

九反田（Ⅲ次調査）・観音塚（Ⅲ次調査）

—東西通り線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2004

本庄市教育委員会

九反田（Ⅲ次調査）・観音塚（Ⅲ次調査）

—東西通り線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2004

本庄市教育委員会

序

本庄市の南端には、市域唯一の丘陵である深い緑におおわれた大久保山があります。今回調査をしました2つの遺跡は、大久保山の北側、現在水田、畑などの農地が大きく広がる場所にありました。

丘陵とその裾に広がる微高地と、沖積地、河川からなる周辺一帯は、今回報告する九反田遺跡、観音塚遺跡をはじめとする集落跡が多数あり、また北堀前山古墳群、久柳塚古墳および周辺の諸古墳、宥勝寺裏墳輪窓跡、あるいはやや南の大久保山寺院跡と、幅広い時代にわたる重要な遺跡が格別密集する一帯です。

本庄市では本年3月13日に上越新幹線本庄早稲田駅が開業し、さらに新駅周辺の区画整理事業も計画されております。今回の調査は、本庄早稲田駅周辺の整備事業に伴う東西通り線の建設工事に先立ち実施しました。新駅の建設および新駅周辺の交通網の整備は、公益性が高く、また緊要性の高い事業でもありましたから、事前の記録保存のための調査を実施した次第です。

本書に示すように、今回の調査は、九反田遺跡のⅢ次調査、観音塚遺跡のⅢ次調査にあたります。

両遺跡の調査は、道路幅の調査でしたが、九反田遺跡の調査では、古墳時代中期の集落跡の一端をとらえることができ、また、集落跡と同じ時期の溝と旧河川からは、勾玉や石製模造品、おびただしい数の土器が出土しました。周辺の古墳時代の歴史を考える上で、貴重な資料であると思います。観音塚遺跡の調査では、集落跡の北限がとらえられるとともに、中世以降の土坑の調査を行なっています。

この報告書が、埋蔵文化財についての理解と郷土の歴史についての関心をより一層深めるための資料として、多くの方々に活用していただければ幸いに存じます。

末筆ながら、厳寒中の発掘調査に、また報告書の作成にあたって、多大な御協力を賜った関係諸機関並びに各位に対し、心から御礼申し上げます。

平成16年3月

本庄市教育委員会

教育長 福島 巖

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市大字西富田562・576-1他に所在する九反田遺跡のⅢ次調査および同本庄市大字東富田44他に所在する観音塚遺跡のⅢ次調査の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、本庄新都心区画整理事業に伴う東西通り線建設、および同事業に付随する機能補償道路の整備に先立ち、本庄市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査を実施した期間は、九反田遺跡のⅢ次調査が平成14年12月10日から平成15年3月20日まで、観音塚遺跡のⅢ次調査に関しては、平成15年3月12日から同年3月20日までである。
なお、両調査地点を含む全長900m余の道路建設予定地の試掘調査は、平成14年11月11日から同年12月4日まで行なった。
4. 調査対象面積は、九反田遺跡の北調査区が1,500㎡、南調査区が540㎡、観音塚遺跡が504㎡である。
5. 発掘調査終了後、引き続き他遺跡の調査を行なったため、出土資料の整理作業、報告書作成のための諸作業に取りかかったのは、平成15年6月4日からである。
6. 発掘調査、整理調査および報告書の編集・刊行にかかる本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

教 育 長 福 島 巖

〈本庄市教育委員会事務局〉

事 務 局 長 掛 妻 龍 一

社会教育課長 田 中 靖 夫 (平成14年度)

吉 田 敏 一 (平成15年度)

同 課 長 補 佐 福 島 保 雄 (人権教育係長兼務、平成14年度)

桜 場 幸 男 (人権教育係長兼務、平成15年度)

文化財保護係

係 長 増 田 一 裕 (平成14年度)

吉 田 稔 (平成15年度)

主 査 太 田 博 之

主 査 我 妻 浩 子

臨 時 職 員 松 本 完

臨 時 職 員 町 田 奈 緒 子

臨 時 職 員 井 上 富 美 子 (事務、平成14年12月16日より平成15年10月17日まで)

7. 発掘調査に関しては、太田博之・松本 完・町田奈緒子が担当した。
8. 発掘調査に必要な基準点測量および水準測量に関しては、昭和株式会社に委託した。基準点測量に用いた座標系は、第IX系座標系である。
9. 本書の執筆、および編集は、松本が行なった。
10. 図1の「九反田遺跡位置図」は1/2,500地形図(1989年、パスコ測量)、図2の「周辺の主要遺跡分布図」は1/25,000地形図『本庄』(1995年、国土地理院発行)にもとづき加除筆したものである。
11. 遺構全体図および挿入中の平面図には、株式会社測研に委託し、同社が測量・作図した平面図を原図として用い作成した。
12. 住居跡および焼土跡の網かけ部分は、赤化の著しい最被熱範囲を表す。図46の1号溝の遺物分布図、および図56~58の旧河道の遺物分布図の網かけ部分は、細かな土器片が稠密に分布し、遺物符号の黒点を落とし切れない範囲を表す。図53の旧河道の平面図で、濃い網かけ部分は、旧河道の基底礫層まで深掘したトレンチの範囲を示し、淡い網かけ部分は、旧河道内の古墳時代中期の遺物包含層分布範囲の内、

同層を全掘した範囲を表す。また、図54の旧河道の土層断面図の網かけ部分は、鉄分の沈着層を示している。

13. 土層および遺物についての色調表現は、「新編標準土色板」によった。
14. 出土遺物の実測および浄書、遺物観察表の作成、遺物写真の撮影は、毛野考古学研究所に委託し、その成果に基づき、挿図・挿表・写真図版を作成した。
15. 写真図版の中の個々の遺物に付した番号は、挿図中の番号と同じであり、遺物の大きさは、原則として実測図のそれとほぼ同大である。
16. 九反田遺跡のⅠ・Ⅱ次調査、および観音塚遺跡のⅠ・Ⅱ次調査に関しては、すでに刊行されている報告書（増田一裕 1987・1989）の記載および挿図によった。
17. 発掘調査および出土資料の整理、報告書作成にあたって、ご協力頂いた作業員の方々は、下記のとおりである。ここに記して感謝の意を表す次第である（敬称略、五十音順）。

赤祖父瑞香、明戸広美、飯島嘉蔵、池田一彦、伊藤好雄、上田ニラモル、金井一郎、金井梧郎、門倉澄子、河田倫子、木島 覚、木村タツ、古指 茂、小暮悠樹、斉藤真理子、塩原忠治、塩原晴幸、高田和正、高橋辰馬、滝沢美智子、土屋牧子、名畑浩美、柳川恵美子、山崎和子、吉田真由美

18. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、下記の方々および諸機関にご教示、ご協力を賜った。末筆ながら記し、感謝の意を表す次第である（敬称略、五十音順）。

荒川正夫、磯崎 一、江原昌俊、大熊季広、及川良彦、柿沼幹夫、金子彰男、恋河内昭彦、昆 彭生、坂本和俊、篠原 潔、佐々木由香、佐々木幹雄、鈴木徳雄、外尾常人、田村 誠、徳山寿樹、鳥羽政之、長井正欣、長瀧歳康、中村正芳、松澤浩一、丸山 修、三村昌史、矢内 勲

毛野考古学研究所、パレオ・ラボ、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、早稲田大学本庄考古資料館

目 次

序	i
例 言	iii
目 次	v
挿図目次	vi
挿表目次	vii
図版目次	viii
I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	2
1 遺跡の立地	2
2 周辺の遺跡と歴史的環境	3
III 調査の方法と経過	5
1 調査の方法	5
2 基本層序	7
3 調査の経過	8
IV 九反田遺跡の遺構と遺物	10
1 古墳時代の遺構と遺物	10
(1) 住居跡	10
(2) 土坑	48
(3) 焼土跡	49
(4) 溝と旧河道	51
2 遺構外出土遺物	80
V 観音塚遺跡の遺構と遺物	88
1 中世以降の遺構と遺物	88
VI まとめ	89
引用・参考文献	92
図 版	

挿図目次

図1	九反田遺跡位置図	2
図2	周辺の主要遺跡分布図	3
図3	九反田遺跡グリッド配置図	5
図4	九反田遺跡遺構全体図	6
図5	1号住居跡平面図および断面図(1)	11
図6	1号住居跡平面図および断面図(2)	12
図7	1号住居跡炉跡平面図および断面図	12
図8	1号住居跡貯蔵穴・P4平面図および断面図	13
図9	1号住居跡出土遺物実測図	14
図10	2号住居跡平面図および断面図	16
図11	3号住居跡平面図および断面図(1)	17
図12	3号住居跡平面図および断面図(2)	18
図13	3号住居跡炉跡・貯蔵穴平面図および断面図	19
図14	3号住居跡柱穴・小溝断面図	20
図15	3号住居跡出土遺物実測図(1)	20
図16	3号住居跡出土遺物実測図(2)	21
図17	4号住居跡平面図および断面図	23
図18	4号住居跡炉跡平面図および断面図	24
図19	4号住居跡出土遺物実測図	25
図20	5・6号住居跡平面図および断面図	26
図21	6号住居跡出土遺物実測図	27
図22	7号住居跡・1号土坑平面図および断面図	29
図23	7号住居跡炉跡平面図および断面図	30
図24	7号住居跡出土遺物実測図	31
図25	8号住居跡出土遺物実測図	32
図26	8・9号住居跡平面図および断面図	33
図27	9号住居跡炉跡平面図および断面図	34
図28	9号住居跡出土遺物実測図	35
図29	10号住居跡平面図および断面図	36
図30	10号住居跡炉跡平面図および断面図	37
図31	10号住居跡出土遺物実測図	38
図32	11号住居跡平面図および断面図	40
図33	11号住居跡炉跡平面図および断面図	41
図34	11号住居跡出土遺物実測図	42
図35	12号住居跡平面図および断面図(1)	44
図36	12号住居跡平面図および断面図(2)	45
図37	12号住居跡炉跡平面図および断面図	45
図38	12号住居跡出土遺物実測図	46
図39	1号土坑平面図および断面図	48

図40	1号土坑出土遺物実測図	48
図41	1・2号焼土跡平面図および断面図	49
図42	1号焼土跡出土遺物実測図	50
図43	1号溝平面図および断面図(1)	52
図44	1号溝平面図および断面図(2)	53
図45	1号溝焼土・炭化物密集範囲平面図および断面図	54
図46	1号溝遺物分布図	54
図47	1号溝出土遺物実測図(1)	55
図48	1号溝出土遺物実測図(2)	57
図49	1号溝出土遺物実測図(3)	59
図50	1号溝出土遺物実測図(4)	60
図51	2号溝平面図および断面図	61
図52	2号溝出土遺物実測図	62
図53	旧河道平面図および断面図(1)	64
図54	旧河道平面図および断面図(2)	65
図55	旧河道平面図および断面図(3)	66
図56	旧河道北集中部遺物分布図	67
図57	旧河道中央・南集中部遺物分布図	67
図58	旧河道南集中部遺物分布図	68
図59	旧河道・北集中部出土遺物実測図(1)	69
図60	旧河道・北集中部出土遺物実測図(2)	72
図61	旧河道・北集中部出土遺物実測図(3)	74
図62	旧河道・北集中部出土遺物実測図(4)	76
図63	旧河道・北集中部出土遺物実測図(5)	77
図64	旧河道・北集中部出土遺物実測図(6)	78
図65	旧河道・中央出土遺物実測図	80
図66	旧河道・南集中部出土遺物実測図(1)	81
図67	旧河道・南集中部出土遺物実測図(2)	84
図68	旧河道・南集中部出土遺物実測図(3)	85
図69	旧河道・中位砂礫層出土遺物実測図	86
図70	遺構外出土遺物実測図	87
図71	観音塚遺跡遺構全体図	88
図72	1号土坑平面図および断面図	88

挿表目次

表1	1号住居跡出土遺物観察表(1)	14
表2	1号住居跡出土遺物観察表(2)	15
表3	3号住居跡出土遺物観察表(1)	21
表4	3号住居跡出土遺物観察表(2)	22
表5	4号住居跡出土遺物観察表	24

表 6	6 号住居跡出土遺物觀察表	28
表 7	7 号住居跡出土遺物觀察表(1)	30
表 8	7 号住居跡出土遺物觀察表(2)	32
表 9	8 号住居跡出土遺物觀察表	33
表10	9 号住居跡出土遺物觀察表(1)	34
表11	9 号住居跡出土遺物觀察表(2)	35
表12	10号住居跡出土遺物觀察表(1)	37
表13	10号住居跡出土遺物觀察表(2)	38
表14	10号住居跡出土遺物觀察表(3)	39
表15	11号住居跡出土遺物觀察表(1)	41
表16	11号住居跡出土遺物觀察表(2)	43
表17	12号住居跡出土遺物觀察表(1)	44
表18	12号住居跡出土遺物觀察表(2)	45
表19	12号住居跡出土遺物觀察表(3)	47
表20	1 号土坑出土遺物觀察表	49
表21	1 号焼土跡出土遺物觀察表	50
表22	1 号溝出土遺物觀察表(1)	55
表23	1 号溝出土遺物觀察表(2)	56
表24	1 号溝出土遺物觀察表(3)	57
表25	1 号溝出土遺物觀察表(4)	58
表26	1 号溝出土遺物觀察表(5)	59
表27	1 号溝出土遺物觀察表(6)	60
表28	1 号溝出土遺物觀察表(7)	61
表29	2 号溝出土遺物觀察表	62
表30	旧河道・北集中部出土遺物觀察表(1)	70
表31	旧河道・北集中部出土遺物觀察表(2)	71
表32	旧河道・北集中部出土遺物觀察表(3)	73
表33	旧河道・北集中部出土遺物觀察表(4)	75
表34	旧河道・北集中部出土遺物觀察表(5)	79
表35	旧河道・中央出土遺物觀察表	80
表36	旧河道・南集中部出土遺物觀察表(1)	82
表37	旧河道・南集中部出土遺物觀察表(2)	83
表38	旧河道・南集中部出土遺物觀察表(3)	85
表39	旧河道・南集中部出土遺物觀察表(4)	86
表40	旧河道・中位砂礫層出土遺物觀察表	86
表41	遺構外出土遺物觀察表	87

図版目次

図版 1 北調査区全景、北調査区近景、南調査区全景

図版 2 1 号住居跡全景、同焼土・炭化物出土状態、同貯藏穴・敷石検出状況、同貯藏穴完掘状況、同土製

品出土状態

- 図版 3 2号住居跡全景、3号住居跡全景、同貯蔵穴・小溝完掘状況、同P3・小溝完掘状況
- 図版 4 4号住居跡全景、5・6号住居跡全景、7号住居跡全景
- 図版 5 7号住居跡遺物出土状態、9号住居跡全景、同遺物出土状態、同炉跡検出状況
- 図版 6 10号住居跡全景、11号住居跡全景、同炉跡検出出土状況、同貯蔵穴土層断面
- 図版 7 12号住居跡全景、同遺物・炭化物検出状況、同遺物検出状況、同炉跡1検出状況
- 図版 8 1号溝全景、同近景
- 図版 9 1号溝遺物出土状態(1)、同遺物出土状態(2)、同焼土・炭化物密集範囲検出状況、同焼土・炭化物密集範囲断面、同土坑3遺物出土状態、同勾玉出土状態
- 図版10 旧河道・北集中部完掘状況、同南集中部完掘状況、同南西壁土層断面、同北東壁土層断面
- 図版11 旧河道・北集中部遺物出土状態(1)、同北集中部土層断面、同北集中部遺物出土状態(2)、同北集中部遺物出土状態(3)
- 図版12 旧河道・南集中部遺物出土状態(1)、同南集中部遺物出土状態(2)、同南集中部石製品出土状態、同南集中部木杭断面、観音塚遺跡・1号土坑全景
- 図版13 1号住居跡出土遺物、3号住居跡出土遺物(1)
- 図版14 3号住居跡出土遺物(2)、4号住居跡出土遺物
- 図版15 6号住居跡出土遺物、7号住居跡出土遺物(1)
- 図版16 7号住居跡出土遺物(2)、8号住居跡出土遺物
- 図版17 9号住居跡出土遺物、10号住居跡出土遺物(1)
- 図版18 10号住居跡出土遺物(2)、11号住居跡出土遺物(1)
- 図版19 11号住居跡出土遺物(2)、12号住居跡出土遺物(1)
- 図版20 12号住居跡出土遺物(2)、1号土坑出土遺物、1号焼土跡出土遺物
- 図版21 1号溝出土遺物(1)
- 図版22 1号溝出土遺物(2)
- 図版23 1号溝出土遺物(3)、2号溝出土遺物
- 図版24 旧河道・北集中部出土遺物(1)
- 図版25 旧河道・北集中部出土遺物(2)
- 図版26 旧河道・北集中部出土遺物(3)
- 図版27 旧河道・北集中部出土遺物(4)
- 図版28 旧河道・北集中部出土遺物(5)
- 図版29 旧河道・北集中部出土遺物(6)
- 図版30 旧河道・北集中部出土遺物(7)、同中央出土遺物、同南集中部出土遺物(1)
- 図版31 旧河道・南集中部出土遺物(2)
- 図版32 旧河道・南集中部出土遺物(3)
- 図版33 旧河道・南集中部出土遺物(4)、同中位砂礫層出土遺物、遺構外出土遺物

I 調査に至る経過

本庄市は、利根川をはさみ群馬県域と隣接する埼玉県北西部の中核都市である。その地理的位置から古来より現在の群馬県域と密接な関係をもち、交通・交流の結節点として、文物が逸早く流入する地域でもあった。そうした地の利と歴史を活かし、拠点法の指定を受けるとともに各種事業が進行しつつあり、上越新幹線本庄早稲田駅建設事業も、その一環として計画された。また、新駅の建設に伴わない周辺の土地区画整理事業も計画されることとなった。

上越新幹線本庄早稲田駅建設予定地周辺に周知の埋蔵文化財包蔵地が集中することは、計画段階より関係者間での共通の認識であり、様々な形での協議が積み重ねられるとともに、埼玉県教育委員会の指導を受け、周辺の埋蔵文化財包蔵地の範囲確認調査などについて、実質的な検討が開始された。

新駅周辺の土地区画整理事業に関しては、(仮称)本庄新都心地区区画整理事業として事業の振興が計られたが、新駅周辺の都市計画道路の変更・敷設が、当面緊要な事業として協議に上ることとなった。

具体的には、都市計画道路変更の要請を受け、平成13年9月10日付け本掲発第36号で、当該事業にかかる「埋蔵文化財の取扱いについて」の協議書が、本庄市長より本庄市教育委員会教育長宛に提出された。これに対しては、その後慎重な検討・協議を経て、平成13年12月3日付け本教社第203号で「(仮称)本庄新都心地区区画整理事業に係る埋蔵文化財の取扱いについて」を、本庄市教育委員会教育長より本庄市長宛に回答した。また、埼玉県教育委員会の指導を受け、平成14年3月20日付けで、事業地内における周知の埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する基本方針について、本庄市、本庄市教育委員会、埼玉県教育委員会三者間で「本庄新都心地区区画整理事業地内の埋蔵文化財に関する協定書」を取り交わすこととなった。これにより本庄新都心地区区画整理事業にかかる埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて、三者が基本的な合意に達するとともに、発掘調査が必要となった場合に万全の体制でのぞむことが確認された。

上記した経過を経て、県道本庄・花園線(東西通り線)にかかる試掘調査が行なわれ、事業地内の2箇所、九反田遺跡、観音塚遺跡に関しては、事業の性格上現状保存が困難であることから、記録保存の措置がとられることとなった。

発掘調査にかかる手続きは、九反田遺跡の南調査区に関しては、平成14年12月5日付けで、「埋蔵文化財発掘の通知」を、本庄市長より埼玉県教育委員会教育長宛に、北調査区に関しては、平成14年12月26日付けで、同「通知」を、本庄土木事務所長より埼玉県教育委員会教育長宛に提出し、両地区ともに「埋蔵文化財発掘調査の通知」を、平成15年1月6日付けで本庄市教育長より埼玉県教育委員会教育長宛に提出した。また、観音塚遺跡に関しては、平成14年12月26日付けで、「埋蔵文化財発掘の通知」を本庄土木事務所長より埼玉県教育委員会教育長宛に提出した。なお、埼玉県教育委員会教育長より本庄市教育委員会教育長に宛てた「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知文書は、いずれの遺跡も平成15年1月20日付けで、教文第3-935~937号として伝達され、その主旨にもとづき、記録保存の措置を講じた次第である。

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

九反田・観音塚遺跡は、本庄市のほぼ中央南西縁に近い位置にある(図1・2)。本庄市は、東西に長い埼玉県の北西端、利根川をはさんで群馬県伊勢崎市と境を接している。この地理的位置ゆえに、古代あるいはそれ以前より群馬県域と共通した様々な要素を文物にみることができ、また現在なお地理的環境、気候、風土の点で、群馬県側との強い結び付きがみとめられる。

本庄市の地形は、利根川右岸の低地と市街地化の中心をなす台地および市域南端の丘陵の3つに分けられる。低地は、利根川や烏川の氾濫原で、下流に広がる妻沼低地、加須低地へと連なる。台地は、いわゆる北武蔵台地の最北の本庄台地で、主に神流川扇状地と身馴川扇状地からなる複合扇状地性の台地である。神流川扇状地は、群馬県鬼石町浄法寺付近を扇の要とし、扇の端は本庄段丘崖を形作っている。身馴川扇状地は、北西側を兎玉丘陵に、南東側を松久丘陵、櫛引台地によりはさまれた一帯である。市域唯一の丘陵地形が、残丘性丘陵の久保山である。

九反田・観音塚遺跡は、ともに久保山(浅見山丘陵)を南東、南にのぞみ、女堀川の氾濫原に突き出た微高地上に位置する。

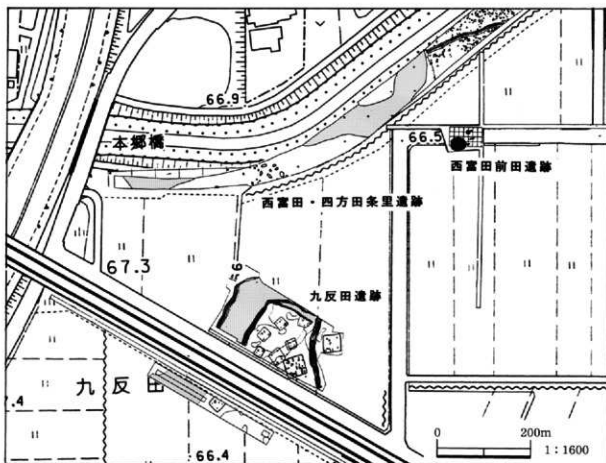
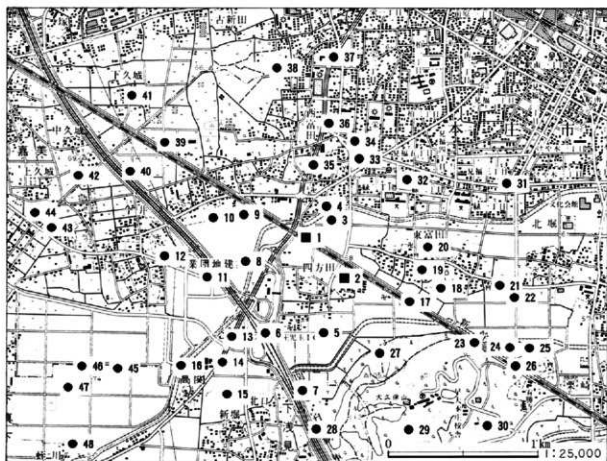


図1 九反田遺跡位置図

2 周辺の遺跡と歴史的環境

本庄台地の南半、とくに九反田遺跡(図2:1、以下()内の番号は、図2の番号と一致する)、観音塚遺跡(2)周辺の主要な遺跡に限って、極簡単にふれることにする¹⁰⁾。

縄文時代以降の遺跡について略説するなら、まず本庄段丘崖の周辺、すなわち扇状地性の本庄台地扇端一帯には、縄文～弥生時代の遺跡が極めて少なく、遺構も現状では極々僅少であることが指摘できる。縄文～弥生時代の遺跡、とくに集落跡を見出すためには、さらに台地の内奥へ、丘陵部とその周辺にまで分け入る必要がある。おそらく森林や中・小河川や支谷の細かな地形の機微が、集落立地の選択を強く制約したからであろう。縄文時代においては森林資源の分布や河川周辺の動植物相、弥



1. 九反田遺跡 2. 観音塚遺跡 3. 西富田前田遺跡 4. 西富田・四方田条里遺跡 5. 四方田遺跡 6. 後張遺跡 7. 飯玉東遺跡 8. 今井条里遺跡 9. 地神遺跡 10. 塔頭遺跡 11. 一丁田遺跡 12. 今井北郭遺跡 13. 川越田遺跡 14. 梅沢遺跡 15. 東牧西分遺跡 16. 今井川越田遺跡 17. 下田遺跡 18. 七色塚遺跡 19. 元富遺跡 20. 公御塚古墳 21. 久下東遺跡 22. 久下前遺跡 23. 北堀前山1・2号墳 24. 宍勝寺北東遺跡 25. 宍勝寺裏稲輪宮跡 26. 東谷遺跡 27. 山根遺跡 28. 雷電下遺跡 29. 大久保山遺跡 30. 大久保山寺院跡 31. 笠ヶ谷戸遺跡 32. 懸塚遺跡 33. 南大通り線内遺跡 34. 薬師元屋舗遺跡 35. 社具路遺跡 36. 西富田新田遺跡 37. 二本松遺跡 38. 夏目遺跡 39. 諏訪遺跡 40. 久城前遺跡 41. 下麻遺跡 42. 往来北遺跡 43. 今井遺跡群 44. 熊野太神南遺跡 45. 柿島遺跡 46. 藤塚遺跡 47. 堀向遺跡 48. 左口遺跡

図2 周辺の主要遺跡分布図

生時代以降では、加えて水稲耕作や畑作の適地、人々の移入経路、交通経路などの様々の要素が複雑に絡み合い、集落分布の特徴的なあり方を生み出したものと考えられる。

九反田遺跡の北東至近の位置にある西富田前田遺跡(3)は、縄文時代中期後半の集落跡である。小規模な集落跡ではあるが、河川沿いでは最も下流の、女堀川に接する微高地に占地する興味深い事例である。

九反田・観音塚遺跡の周辺から大久保山にかけて、丘陵を取り巻く一帯には、弥生時代以降、散漫ながら集落が営まれ、この傾向は、古墳時代前期以降にも引き継がれる。

古墳時代中期の集落跡である九反田遺跡の周辺について、とくに古墳時代前期以降の主要な遺跡を見てみよう。

周辺の弥生時代遺跡としては、宍勝寺北裏遺跡(24)、大久保山遺跡(29)、山根遺跡(27)、雷電下遺跡(28)など、弥生時代以降、丘陵部をめぐって遺跡数が急増する傾向を示す(宍河内 2002)。この傾向は、弥生時代後期以降とくに顕著になるが、古墳時代前期以降は、沖積地に近接した一帯への新たな展開が見られるようである。

周辺の古墳時代前期の集落跡としては、まず、西富田・四方田条里遺跡(4)、後張遺跡(6)、飯玉東遺跡(7)、今井条里遺跡(8)、地神遺跡(9)、塔頭遺跡(10)、川越田遺跡(13)、雷電下遺跡(28)、大久保山遺跡(29)の北側に近接して下田遺跡(17)、七色塚遺跡(18)があり、北堀前山古墳群(23)の北側のやはり至近の微高地には、久下東遺跡(21)、久下前遺跡(22)がある。近年の調査例の増加により、この段階の集落跡の事例は急速に充実しつつあり、枚挙に暇がない。これらの集落跡は、古墳時代中期にも継続する可能性を含み、中期以降には、それらの遺跡にさらに四方田遺跡(5)、東谷遺跡(26)、笠ヶ谷戸遺跡(31)、雌潭遺跡(32)などの諸集落跡が加わる。前期段階の集落例も増えつつあるとは言え、中期以降かつてない集落の隆盛をみるのは、この一帯の際だった特徴である。

周辺の古墳、周溝墓について簡単にふれるなら、古墳時代前期の段階には、飯玉東遺跡(7)、諏訪遺跡(39)などの方形周溝墓群をあげることができ、前期末～中期初頭には、北堀前山2号墳(23)、大久保山遺跡浅見山I地区(29)など丘陵上に方形周溝墓あるいは方墳が築かれ、以降公卿塚古墳(20)周辺の古墳群が微高地にも形成される過程を踏むようである。

以上瞥見したように、九反田遺跡は、まさに女堀川中流域において集落が飛躍的に増加する段階に微高地先端に展開した中期の集落跡である。集落個々の展開過程を踏まえ、狭い範囲に密集・群在する集落群の動静態を見極め、集落と墓域の関係、古墳群の形成へといたる過程を解明する作業は、今後の研究に託された課題であると言えよう。

註

- (1) 以下、個別に明記しないが、遺跡の内容については、それぞれの報告書、および「本庄市史」(本庄市史編集室編 1976・1986)によった。

III 調査の方法と経過

1 調査の方法

九反田・観音塚遺跡の今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡、焼土跡、土坑、溝、旧河道である。ここでは、とくに九反田遺跡で用いた遺構の調査方法の概略を記すことにしたい(図3・4)。

なお、九反田遺跡の今回の調査は、新幹線の軌道および道路をはさみ、南北2地点であり、それぞれを北調査区、南調査区として報告することにした。

試掘調査の結果から、今回の調査範囲内全域に住居跡や溝が展開することが予想された。発掘調査に際しては、業者に委託・実施した座標計算された基準杭に基づき、グリッドを設定した(図3)。まず、100m×100mの大グリッドを設け、それを東西、南北5個ずつの20m×20mの中グリッドに分割した。20m×20mの各中グリッドを、北から南へA1、A2……A5、西から東へA1、B1、C1、D1、E1と呼称し、その各々を2m×2mのより小さなグリッドに分け、その小グリッドを西から東へ00、10、20、30……90、北から南へ00、01、02、03……09と呼び分けた。合わせて「A1-01」、「D2-35」といった呼称法を用いた。

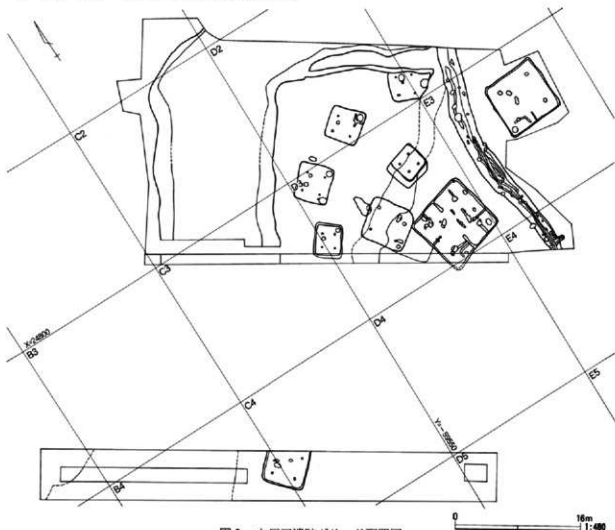


図3 九反田遺跡グリッド配置図

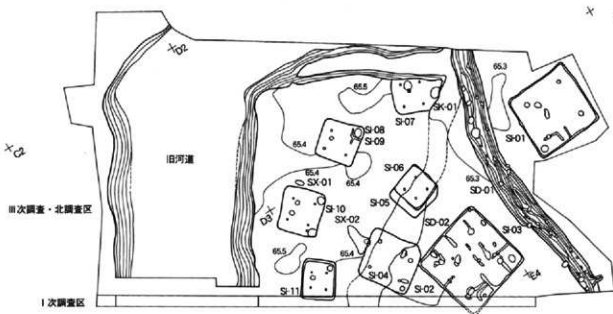


図4 九反田遺跡遺構全体図

遺構は、竪穴住居跡を例にとれば、原則として予想された長軸、短軸あるいは調査区界の壁面に沿って、まずサブトレンチを開掘し、床面の状態を確かめ、しかる後覆土全体を掘り下げ精査する方法をとった。原則として、遺構の平面図、断面図の作成には、1/20の縮尺を用い、炉跡、貯蔵穴などの実測図、遺物微細図には、1/10の縮尺を用いた。覆土中の遺物に関しては、大型破片や全形の判る遺物に関してのみ測点記録を行なった。土器細片などその他の遺物は、セクションベルトにより分かれた区画ごとに可能な範囲で層位を記し、取り上げた。

なお、旧河道の調査法に関して一言触れるておくなら、試掘時点で、部分的に遺物を多量に包蔵することが分かっていたが、幅10mを優に越える旧河道であり、堆積土全体を上から下まで精査することはもとより困難であった。手順としては、試掘調査により部分的に判っていた遺物集中部を避け、まず、河道堆積物の層序を確定すべく、河道基底層に達する集水施設をかねた南北2本のトレンチを

開掘することから調査をはじめた。湧水によりトレンチ壁が崩落し、土層断面図は作成できなかったものの、このトレンチ壁の観察所見との対比から、以降調査した遺物包含層、および無遺物層の特徴や河道堆積物の変化が、ある程度推定可能になったように思う。

トレンチ開掘に続いて、遺物出土状況、トレンチ壁の所見にもとづき、大型重機により遺物の集中する層準まで堆積土を除去した。しかる後遺物の集中する範囲のみトレンチ状の区画を設定し、暫時開掘、遺物の記録、断面図の作成、トレンチの拡張を繰り返し、河岸が露呈するか、無遺物層に達した時点で精査を終了するという調査法をとった。

多量に出土した遺物に関しては、遺物の細かな出土位置、出土状態の復原ができるように複数点を計測・記録し、上方からの細部写真を細かく撮ることで、微細図の作成に代えたが、結局本報告書では、出土状態の細かな復原をなし得ず、測点記録として報告している。

2 基本層序

観音塚遺跡も含め、調査範囲内の遺構は、すべて表土層の直下のローム層で確認したが、ローム層は通常台地上で見られるロームとはかなり異なり、水の影響を強く受けたものであった。また、九反田遺跡の旧河道内、とくに旧河道Aとした、古墳時代中期の河道がその中を流れた旧河道内は、主にその種のローム層に由来する堆積土によって埋まっていた。

基本層序は、表土層であるI層とそれに覆われた遺構の立地する微高地の堆積土と旧河道内の堆積土の大きく3つに分けられるが、調査により判明した堆積時期を加味するなら、微高地と旧河道の堆積土にまたがる古墳時代中期以降の堆積土であるII層と、ローム層上部あるいはその前後に対応するII層以前の旧河道内堆積土であるIII層、微高地の地山のロームのIV層の4つの層に大別することが可能である。II層に関しては、堆積時期および堆積環境からII a～II c層の3つに分けられる。III・IV層に関しては、今後台地上のロームとの対比、位置付けを行なう必要があるであろう。なお、土色に関しては、代表的なもののみ掲げた。

I a 層：暗褐色～灰黄褐色土。ほとんどが現在の耕作土である。九反田遺跡の場合、ほぼ全城が水田土壌であり、床土の層をも一括したが、場所により水田土壌と畑作土壌とが入れ替わる。

I b 層：黒褐色土～暗褐色土および濃い黄褐色土。現耕作土以前の旧耕作土を一括した。圃場整備事業以前の耕作土となるが、総じてI a層と大きな違いは見られない。

II a 層：暗褐色土。黒褐色土のブロックやローム粒を含む暗褐色土や、よりシルト化した黄褐色土からなる旧河道堆積土。土質の固有の特徴を示すことができないが、古墳時代後期に一旦ある程度埋まった旧河道内に、以降堆積した土を一括した。最終的に旧河道の最上部を埋めた堆積土である。時期的に籾を含むものと思われるが、調査時点での所見では、上記I b層とそれほど大きな違いは見られなかった。旧河道が、長期にわたってくぼみの状態で残っていたとすれば、かなり新しい時期の堆積土である可能性もある。

II b 層：黒褐色土～暗褐色土。古墳時代中期以降、II a層が流入するまでの間に堆積した旧河道の堆積土をまとめた。古墳時代中期の遺物を多量に含む黒褐色土、古墳時代後期以降の砂礫を著しく含む層など、堆積環境にも変転が見られるようであるが、次に記す微高地のII c

層と、基本的に対応する層と考える。

- II c 層：暗褐色土。古墳時代中期の遺構覆土にのみ見られる暗褐色土。台地上の古墳～奈良・平安時代の遺構の通有の覆土と同じであるが、シルト化が進み、粘性、しまりが強い。この種の暗褐色土が純層をなすことはない。
- III 層：黒褐色～暗緑灰色シルト層。II b 層より古い時期の旧河道堆積土である。II b 層下の泥炭層やいわゆる青灰色シルト層、砂礫層や旧河道の大半を埋めた夥しい量の再堆積ロームをひとまとめにした。微高地上のローム層上部に対応するものと思われるが、対比はできていない。
- IV 層：黄褐色土。微高地上の地山のローム層である。台地上の通常のロームに比べ、シルト化し、白みがかったり、逆に黒みがかったりしており、粘性・しまりが強い。

3 調査の経過

平成14年12月10日、調査員、作業員が現地、九反田遺跡北調査区に集合し、器材の搬入、調査範囲の確認、防護柵を設定することから作業を始めるとともに、重機による表土剥ぎを開始した。

調査範囲のほとんどが水田であったため表土が厚く泥濘に近いこともあり、土砂搬出車や器機を入れて土出しすることができず、表土剥ぎに思わぬ時間を要した。表土剥ぎを終えたのは、12月20日であった。

12月18日より住居跡の精査を開始し、同時に旧河道の北側の遺物集中部の精査に着手した。以降、南側から順々に住居跡の調査を進めるとともに、旧河道遺物集中部の精査、遺物出し、採り上げ作業を継続して行なった。

平成15年1月8日から調査を再開したが、旧河道の礫層まで掘り下げたトレンチには、水が溜まったまま分厚い氷が張り、調査範囲の南半分が雪に埋もれた状態であった。以降も例年にない積雪に悩まされ、また旧河道の調査には、濁水期とは言え、排水作業が絶えず必要であった。

旧河道の調査では、土器を主とする夥しい量の遺物の取り上げに多くの時間と労力を割かねばならなかった。旧河道の調査をあらかじめ終えたのは、2月6日であった。旧河道の調査と平行して住居跡の調査を継続して行ない、1月24日からは3号住居跡、2月7日からは1号住居跡と、続けて大型住居跡の精査に着手した。

2月12日からは、調査範囲の東側を南北に抜ける1号溝の調査をはじめたが、やはり多量の遺物が出土したため、住居跡の調査を中断し、総力で取り組む必要が再三生じた。したがって、2月中は、順次住居跡の調査を続ける傍、1号溝の調査に終始したと言うことになる。

1号溝の調査が一段落した2月27日、大型重機により、旧河道の中央部分、通路として掘り残した部分を撤去、掘り下げるとともに、南東隅の1号溝の延長部分の調査範囲を拡張する作業を行なった。引き続き精査を行なったが、これにより道路予定地内の1号溝は全掘したこととなり、旧河道に関しても、一部の遺物の希薄な部分を除いて、古墳時代以降の流路はおおむね調査し尽くしたことになる。

2月28日より重機による南調査区の表土剥ぎを開始した。南調査区の場合、調査可能な範囲は、幅6.5mほどであり、北調査区で調査した旧河道は、作業の安全面からも調査自体事実上困難であった。

結局、旧河道に関しては、表土剥ぎに際し重機により深掘し、遺物の有無のみ確認することしかできなかった。北調査区の調査の進捗状況との兼ね合いで、12号住居跡の調査を開始したのは、3月11日であった。

委託した遺構実測作業が終了し、完全に調査が終了したのは、北調査区が3月12日、南調査区が3月20日である。南北調査区合わせて、実働日数は、57日である。

観音塚遺跡の調査は、九反田遺跡の調査と併行して、3月12日より大型重機による表土剥ぎから着手した。表土剥ぎを同日終え、14日より土坑の調査を開始し、遺構実測などすべての作業が終了したのは、九反田遺跡南調査区と同じ3月20日であった。実働日数は、5日である。

IV 九反田遺跡の遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

Ⅲ次調査で検出した竪穴住居跡は、南北調査区あわせて12軒である。北側、西側を旧河道に画され、東側では徐々に沖積低地に転ずる、北西—南東にのびる微高地上に営まれた古墳時代中期の集落の一角とみてよいであろう。南北の調査区間は未調査であるが、住居跡が当然あったものと思われ、また分布状態から見て、今回調査した12号住居跡が集落の南限に近い遺構であるとすれば、全体で20～30軒の住居により構成された集落と考えられる。

1号住居跡

遺構 (図5～8、図版2) 北調査区東端、E3—53グリッドを中心に位置する遺構である。確認面は、表土層直下のIV層上面である。住居跡の西半は確認が遅れたため、覆土をかなり下げた段階でようやく確認しえた。床面上には、炭化材、焼土が散乱しており、いわゆる焼失住居と考えてよいであろう。

平面形は入口側の壁がやや長い隅丸方形である。主軸長は、7.09m、横幅は、7.49m、主軸方位は、N—1°—Wである。

床面にはやや凹凸があり、あまり硬化していない。掘り方は、土層断面A—A'、D—D'、およびP5を通したサブ・トレンチで確認したのみである。深さ10cm前後の壁溝が全周している。また、入口側、ほぼ中軸線上の位置には、壁溝に直交してのびる小溝が掘り込まれている。

炉跡は3箇所で検出した。いずれも浅くくぼんだ地床炉である。炉2は炉床を一度造り替えており、炉3は一応炉跡としたが、あるいは住居の焼失時に床面が強く被熱した痕跡である可能性も捨て切れない。

床面で検出したピットは5個で、P1～P4は、主柱穴である。形態は楕円形、ないしは微妙に角張った不整形で、深さは、P1が93cm、P2が62cm、P3が61cm、P4が76cmである。いずれも柱根跡が明瞭に残っており、ロームを主とする裏込めがみとめられた。

P5は、いわゆる貯蔵穴に類するピット、あるいは土坑である。住居跡中央側から入口側にかけて逆L字形の低い土堤が設けられ、P5と入口部の間には、所々欠けた半円に近い形で礫が敷設されている。礫はおおむね拳大以下の角礫、円礫からなり、白みがかかったローム質の貼床層にひとつひとつ重なり合うことなく埋め込まれている。敷石の層は、P4の上部に及んでおり、主柱に接するあたりまで石敷がなされていたと思われる。所々敷石が欠けているのは、攪乱によるのかもしれない。

P5を中心にキの字にサブ・トレンチを入れ観察したのみではあるが、P5の周辺に限って掘り方を深く掘り下げ造作している。P5の周囲は、方形に浅く掘り込まれており、その四辺を炭化材が取り囲んでいる。炭化材は棒状の材の痕跡とも見えたが、部分的に棒内にも炭化物が広がっており、また厚みがないことから、方形の蓋のようなものであった可能性が考えられる。

また、入口側、ほぼ中軸線上の位置には、壁溝に直交してのびる小溝が掘り込まれている。

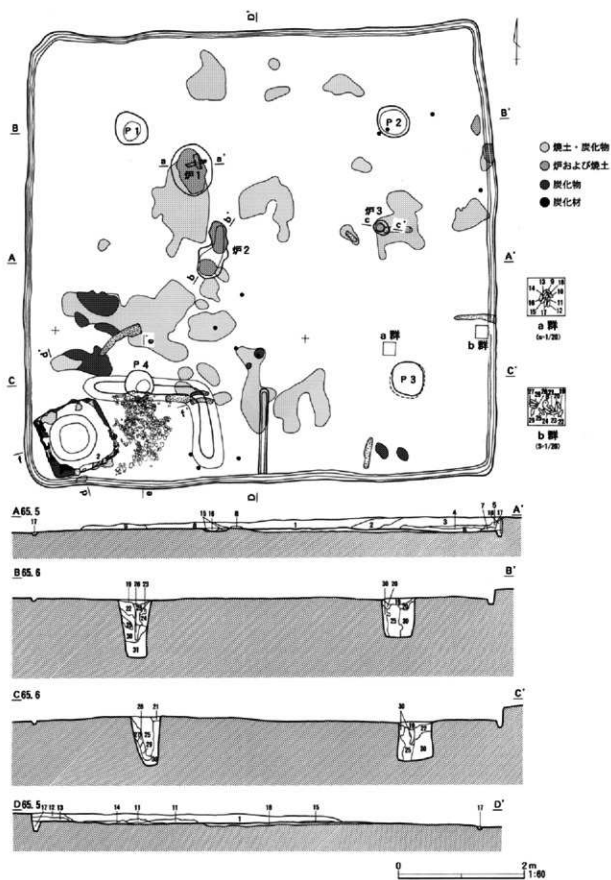


図5 1号住居跡平面図および断面図(1)

1号住居跡覆土

- 1層: 暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含み、焼土、炭化物を多く含む。固くしまっている。A-A'断面ではロームを斑状に含む。
- 2層: 暗褐色土層。1層に近いが、焼土少ない。
- 3層: 暗褐色土層。1層に近いが、焼土、炭化物が少ない。下面に所々マンガンの薄層が見られる。
- 4層: 黒褐色土層。黒褐色土を主に、暗褐色土を含む。木の影響か、白みを帯びる。混入物が少ない。
- 5層: 黒褐色土層。4層土の白みを帯びた黒褐色土を主に、焼土ブロックを多く含む、炭化物を含む。
- 6層: 黒褐色土層。4層に近いが、炭化物が多い。
- 7層: 黒褐色土層。黒褐色土を主に、焼土粒を少量含む。
- 8層: 暗褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。
- 9層: 黒褐色土層。黒褐色土を主に、焼土、炭化物を少量含む。
- 10層: 灰黄褐色土層。灰色がかかった濁った色調のロームを主に焼土を微量含む。
- 11層: 暗褐色土層。1層に近いが、ロームが多く、より不均一。
- 12層: 黒褐色土層。1層に近いが、混入物が少ない。
- 13層: 黒褐色土層。12層に近いが、ロームが多く、より不均一。
- 14層: 黒褐色土層。黒褐色土・焼土、炭化物が不均質に混合。
- 15層: 明赤褐色土層。焼土。
- 16層: 暗褐色土層。暗褐色土・ロームの混合土。焼土を含む。
- 17層: 暗褐色土層。暗褐色土・ロームの混合土。壘積覆土。

- 18層: 灰黄褐色土層。暗褐色土と灰色がかかったロームの混合土を主に、同量のローム粒・ロームブロックを斑状に含む。
- 19層: 暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。焼土を含み、炭化物を少量含む。以下31層まで主柱穴覆土。
- 20層: 暗褐色土層。19層に近いが、焼土、炭化物が少ない。
- 21層: 暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。25層に比し、焼土が多い。
- 22層: 黄褐色土層。暗褐色土とロームが同量程度斑状に混合。
- 23層: 暗褐色土層。暗褐色土を微量含むロームのブロック。
- 24層: 黄褐色土層。22層に近いが、暗褐色土とロームが均一に混じり合う。
- 25層: 暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。19層に比し、焼土、炭化物が少ない。やや粘性がある。柱根跡。
- 26層: 暗褐色土層。22層に近いが、ロームが多い。25層と同じ柱根跡の跡であるが、さらに土壌化進み痕跡的。
- 27層: 暗褐色土層。25層に近いが、ローム粒・ローム小ブロックが多い。
- 28層: 褐色土層。27層に近いが、ロームが多い。
- 29層: 暗褐色土層。25層に近いが、ロームがやや多い。柱根跡の可能性もある。
- 30層: 黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を少量含む。
- 31層: 黄褐色土層。30層に近いが、暗褐色土が少ない。

図6 1号住居跡平面図および断面図(2)

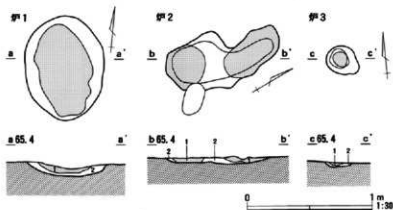


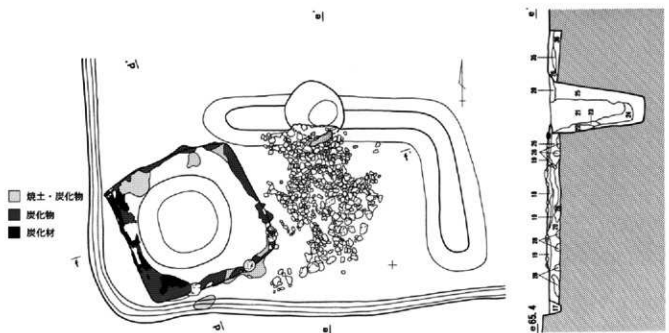
図7 1号住居跡跡平面図および断面図

1号住居跡跡覆土

- 1層: 明赤褐色土層。焼土。
 - 2層: 暗褐色土層。暗褐色土とロームの混合土。焼土を含む。
- 跡2
- 1層: 明赤褐色土層。焼土。
 - 2層: 褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を若干含む。
- 跡3
- 1層: 明赤褐色土層。焼土。
 - 2層: 褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を若干含む。

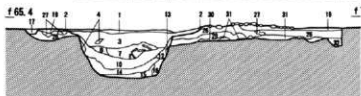
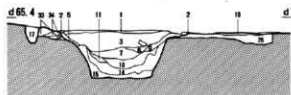
焼土は、炉跡の周辺、住居跡北東部分、南西部分に広がっており、炭化物を含めて南西部分に最も密に分布していた。焼土、炭化物のほとんどは、床面に密着するというより、床面との間に間層をはさんだり、床面直上層に混在する状態で出土している。

住居跡覆土は、31層で、その内19~31層は、柱穴覆土である。全体に焼土や炭化物が多く混入する土が堆積した後、四周から土が流入した様を示している。別図に示したP5、貯蔵穴覆土では、中に炭化物の濃集する層が見られることが特徴的である。



1号住居跡貯蔵穴・P 4

- 1層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、ローム粒・ロームブロックを含む。焼土、炭化物を少量含む。硬くしまっている。
- 2層：炭化物。
- 3層：黒褐色土層。1層に近いがしまらず柔らか。
- 4層：黒褐色土層。炭化物のブロック又は密集層。
- 5層：黒褐色土層。焼土。炭化物の密集層。
- 6層：黒褐色土層。3層に近いが、ローム粒・ロームブロックを斑状に含む。
- 7層：黒褐色土層。3層に近いが、黒褐色土あるいは炭化物が多い。
- 8層：黒褐色土層。炭化物の密集層。
- 9層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、焼土、炭化物を斑状に多量に含む。
- 10層：黒褐色土層。3層に近いが、焼土、炭化物が多い。覆土東半では、焼土がブロックで混入。
- 11層：黒褐色土層。10層に近いが、さらに炭化物が多い。
- 12層：黒褐色土層。10層に近いが、径5mm大の焼土粒が点在する。
- 13層：黒褐色土層。12層に近いが、ローム粒・ロームブロックが多い。
- 14層：黒褐色土層。10層に近いが、焼土多く、炭化物が少ない。
- 15層：黒褐色土層。焼土、炭化物を極微量含むも、純層に近い黒褐色土。わっとりしている。
- 16層：黒褐色土層。15層に近いが、焼土、ローム粒・ロームブロックが多い。
- 17層：暗褐色土層。暗褐色土とロームの混合土。硬質厚土。
- 18層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒、焼土を含む。硬くしまっている。
- 19層：暗褐色土層。18層に近いが、ロームが多い。硬くしまっている。本層および18・26層の上面に埋め込むように障が敷き詰められている。
- 20層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。25層に比し、焼土が多い。



- 21層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。19層に比し、焼土、炭化物が少ない。やや粘性がある。柱根跡。
- 22層：暗褐色土層。21層に近いが、ローム粒、ローム小ブロックが多い。
- 23層：褐色土層。22層に近いが、ロームが多い。
- 24層：暗褐色土層。21層に近いが、ロームがやや多い。柱根跡の一部の可能性もある。
- 25層：黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を少量含む。
- 26層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、ローム粒を含む。
- 27層：褐色土層。29層に近いが、ロームが多い。
- 28層：褐色土層。ロームを主に、暗褐色土・黒褐色土を不規則に含む。
- 29層：褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を含む。
- 30層：黒褐色土層。黒褐色土を主にローム粒を含む。
- 31層：褐色土層。29層に近いが、ロームが多い。
- 32層：暗褐色土層。26層に近いが、黒褐色土が多く、黒みが強い。
- 33層：褐色土層。ロームを主に、焼土を多量に含む。
- 34層：黒褐色土層。黒褐色土のほぼ純層。
- 35層：暗褐色土層。19層に近いが、ロームが多い。
- 36層：黄褐色土層。26層に近いが、ロームが多い。

図8 1号住居跡貯蔵穴・P 4 平面図および断面図

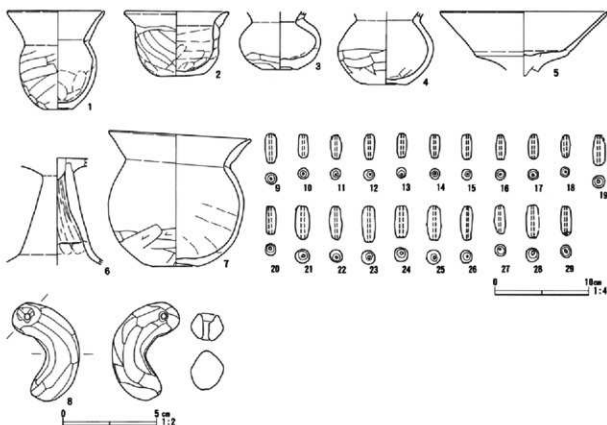


図9 1号住居跡出土遺物実測図

表1 1号住居跡出土遺物観察表(1)

No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土器 甕	口径 10.3 底径 3.0 器高 10.5	体部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に大きく開く。底部は平底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部上位ヨコナデ、体部下位へ底部指ナデ。	片岩・チャート 内一褐色 外一にぶい褐色	4/5。
2	土器 甕	口径 10.9 底径 4.9 器高 6.9	体部わずかな膨らみを持ち、口縁部は短く外反して開く。底部は平底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部上位ヘラナデ、体部下位へ底部指ナデ。	石英・白色粒 内一明赤褐色 外一にぶい褐色	一部欠損。
3	土器 甕	口径 — 底径 3.7 器高 —	体部は中位に膨らみを持つ。底部は上げ底。	外面一体部ヘラケズリ後、上位へ中位をナデ。内面一体部指ナデ。	白色粒・黒色粒 内一明赤褐色 外一明褐色	口縁部欠損。
4	土器 甕	口径 — 底径 4.8 器高 —	体部は中位に膨らみを持つ。底部は上げ底気味。	外面一体部ヘラケズリ後、上位をナデ。内面一体部へ底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内一褐色 外一にぶい黄褐色	口縁部欠損。
5	土器 高坏	口径 (17.9) 底径 — 器高 —	坏部下位にわずかな稜を持つ。口縁部は外反気味に開き、上位わずかに内彎する。	外面一口縁部ヨコナデ、坏部下位部荒れており不鮮明。内面一口縁部ヨコナデ、坏底部ナデ。	石英・白色粒 内外一明赤褐色	坏部3/4残存。
6	土器 高坏	口径 — 底径 — 器高 —	坏底部の突起を筒状の脚部に差し込んで接合。脚部直線的に開き、裾部は外方に広がる。	外面一脚部ナデ。内面一脚部ナデ、下位に指衝圧痕。	石英・白色粒 内一明赤褐色 外一褐色	脚部2/3残存。
7	土器 小型甕	口径 15.2 底径 5.0 器高 14.4	胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。底部は上げ底。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後、上位へ中位をナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部へ底部ヘラナデ。	石英・白色粒 内一灰黄色 外一にぶい黄褐色	4/5。

表2 1号住居跡出土遺物観察表(2)

No	種類	器種	法	量 (cm・g)	備考	
8	土製品	勾玉形模造品	長さ:5.2 幅:1.9 孔径:0.3	重さ:27.4 石英・白色粒	にぶい褐色	完形。
9	土製品	管玉形模造品	長さ:3.1 幅:1.2 孔径:0.3	重さ:5.0 石英・白色粒	明赤褐色	一部欠損。
10	土製品	管玉形模造品	長さ:2.5 幅:1.1 孔径:0.2	重さ:3.8 石英・白色粒	明赤褐色	完形。
11	土製品	管玉形模造品	長さ:2.6 幅:1.1 孔径:0.2	重さ:3.3 石英・白色粒	赤褐色	一部欠損。
12	土製品	管玉形模造品	長さ:2.7 幅:1.1 孔径:0.2	重さ:4.4 石英・白色粒	明赤褐色	完形。
13	土製品	管玉形模造品	長さ:2.6 幅:1.1 孔径:0.3	重さ:3.5 石英・白色粒	明赤褐色	完形。
14	土製品	管玉形模造品	長さ:2.6 幅:1.2 孔径:0.3	重さ:3.8 石英・白色粒	明赤褐色	完形。
15	土製品	管玉形模造品	長さ:2.7 幅:1.2 孔径:0.2	重さ:4.2 石英・白色粒	明褐色	完形。
16	土製品	管玉形模造品	長さ:2.7 幅:1.1 孔径:0.2	重さ:3.5 石英・白色粒	明赤褐色	完形。
17	土製品	管玉形模造品	長さ:2.6 幅:1.1 孔径:0.3	重さ:3.6 石英・白色粒	にぶい褐色	完形。
18	土製品	管玉形模造品	長さ:2.4 幅:1.0 孔径:0.3	重さ:2.9 石英・白色粒	明褐色	完形。
19	土製品	管玉形模造品	長さ:3.3 幅:1.3 孔径:0.4	重さ:5.8 石英・白色粒	明赤褐色	4/5。
20	土製品	管玉形模造品	長さ:2.9 幅:1.2 孔径:0.3	重さ:4.6 石英・白色粒	明赤褐色	完形。
21	土製品	管玉形模造品	長さ:3.6 幅:1.5 孔径:0.4	重さ:9.0 石英・白色粒	明赤褐色	完形。
22	土製品	管玉形模造品	長さ:3.6 幅:1.3 孔径:0.3	重さ:7.2 石英・白色粒	明赤褐色	完形。
23	土製品	管玉形模造品	長さ:3.9 幅:1.4 孔径:0.4	重さ:8.7 石英・白色粒	明赤褐色	一部欠損。
24	土製品	管玉形模造品	長さ:3.3 幅:1.5 孔径:0.3	重さ:8.6 石英・白色粒	明赤褐色	完形。
25	土製品	管玉形模造品	長さ:3.8 幅:1.5 孔径:0.3	重さ:9.7 石英・白色粒	明赤褐色	完形。
26	土製品	管玉形模造品	長さ:3.7 幅:1.4 孔径:0.3	重さ:7.0 石英・白色粒	明赤褐色	完形。
27	土製品	管玉形模造品	長さ:3.1 幅:1.3 孔径:0.3	重さ:5.4 石英・白色粒	明赤褐色	完形。
28	土製品	管玉形模造品	長さ:3.6 幅:1.5 孔径:0.5	重さ:7.3 石英・白色粒	にぶい赤褐色	4/5。
29	土製品	管玉形模造品	長さ:3.1 幅:1.4 孔径:0.4	重さ:5.5 石英・白色粒	にぶい褐色	完形。

遺物(図9、表1・2、図版13) 床面直上の遺物は、いたって少ない。土錘および土製勾玉は、2群に分けられ、a群(9~18)は、東壁寄りのほぼ中央、b群(8・19~29)は、a群よりやや住居跡中央に寄った位置の床面で検出した。土錘と土製勾玉とは、極狭い範囲でしかも数個づつ横並びに近い状態で出土しており、紐状のものでつながっていた可能性が考えられる。2は、貯蔵穴に伴う浅い方形の掘り込み上面から出土した埴の一種である。

2号住居跡

遺構(図10、図版3) 北調査区の南西縁の中央付近、調査区界に接して検出した遺構で、D3-57グリッドを中心に位置する。確認面は、表土層直下のIV層上面である。I次調査の「第4号住居跡」で、本遺構の南西半は、その際に調査を行なった。3号住居跡により、北東側を大きく壊され、北西側も、4号住居跡により壊されている。なお、I次調査の範囲内では、壁高が14cm前後残る部分もあったようであるが、今回の調査範囲内では、壁もほとんど残っておらず、覆土がかすかに残存していたことで辛うじて遺構と認定することができたに過ぎない。

平面形は、胴のやや張る隅丸方形ないしは隅丸長方形であろう。北西-南東方向での長さは推定で5m前後、南西側が入り口になるとすれば、主軸方位は、N-60°-Eくらいになるようである。

床面はほぼ平坦であるが、あまり硬化していない。深さ33cmの不整形円のピットを1個、および焼土面を1箇所検出した。位置的に見て、後者は炉跡とは考えにくく、前者はあるいは入り口に関連するピットの可能性がある。

図示していないが、覆土は1層で、暗褐色土を主とするものである。全体に攪乱が及んでおり、覆土は部分的にしか残っていない。図化できる遺物は出土していない。

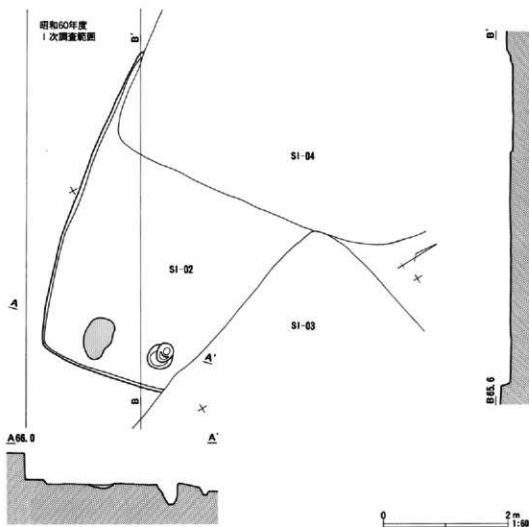


図10 2号住居跡平面図および断面図

3号住居跡

遺構 (図11～14、図版3) 北調査区の南東部、南西縁に接して検出した遺構で、D 3-88グリッドを中心に位置する。確認面は、表土層直下のIV層上面である。I次調査の「第5号住居跡」で、遺構の南東隅付近は、その際調査し、報告した部分である。なお、南東隅の先端は未調査である。2号住居跡を切って構築されており、3号住居跡とは、北西隅で接している。

平面形は、隅丸方形で、主軸長は、8.2m、主軸に直交する方向での長さは、8.32mである。主軸方位は、N-15°-Wである。

床面はほぼ平坦であるが、全体に硬化は顕著ではなく、貼床層もはっきりしない。深さ6～10cmの壁溝が全周している。いわゆる間仕切り溝と思われる小溝は、7条検出した。北壁中央の溝を小溝1と呼称し、以下時計回りに、小溝2～6とした。P1と壁間の小溝もその可能性があるが、やや浅いためひとまず除いた。また、床面中央や東寄りの小溝についても小溝7・8とした。小溝1・6の内側末端には、小ピットが掘り込まれている。調査時の所見では、いずれの小溝も床面で明瞭に輪

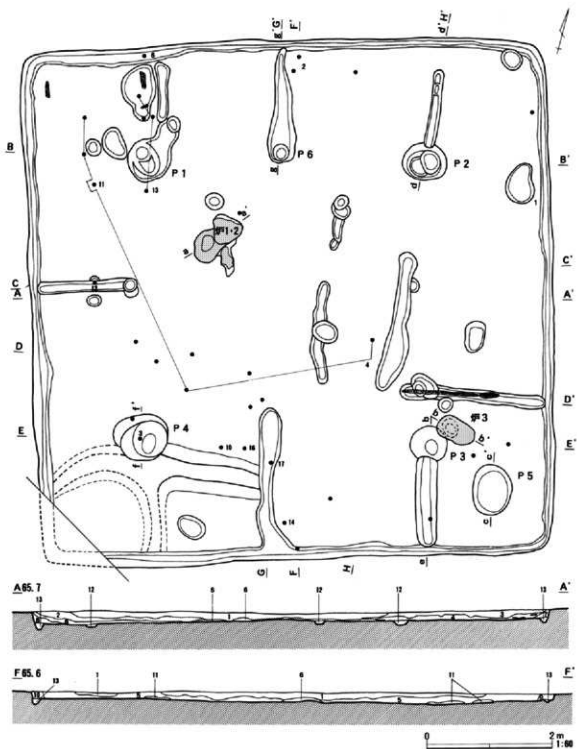
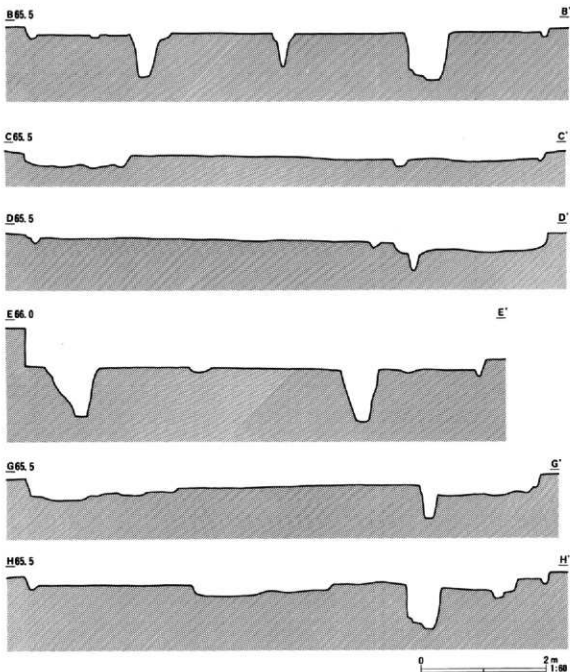


図11 3号住居跡平面図および断面図(1)

郭がとらえられたが、実際掘ってみると、覆土にルームが多くかなりしまっていることもあり、どこまでが小溝なのか見極めるのがかなり困難であった。土層断面では、壁溝やピットより前に掘り込まれたことが分かる場合もあったが、むしろ壁溝と一体で埋まったかに見える場合もあった。ルームを多く含む覆土は、掘りあげたルームをそのまま用いた柱穴の裏込めの土に似ており、上記所見は、小

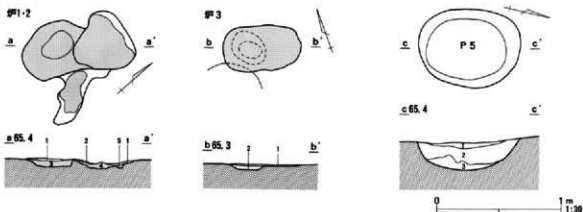


3号住居跡覆土

- 1層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、径10～30mm大のロームブロックを斑状に含む。少量であるが、北側ほど灰白色粒（パミス？の一種あるいは河砂）を含む。
- 2層：黒褐色土層。1層に近いが、ロームブロックが小さく少ない。焼土、炭化物を含む。
- 3層：黒褐色土層。1層に近いが、ロームがやや少ない。焼土、炭化物を多く含む、灰白色粒を微量含む。
- 4層：黒褐色土層。3層に近いが、ロームが多い。焼土、炭化物を多く含む、灰白色粒を含む。
- 5層：黒褐色土層。1層に近いが、ロームが少ない。灰白色粒を微量含む。

- 6層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、焼土、炭化物を多く含む。
- 7層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、ロームをほとんど含まず、焼土、炭化物を含む。灰白色粒を含む。
- 8層：暗褐色土層。黒褐色土を主に、ロームを多量に含む。
- 9層：黒褐色土層。5層に近いが、径20～50mm大のロームブロックがかなり多い。
- 10層：暗褐色土層。8層に近いが、ロームが多い。
- 11層：いよい黄褐色土層。ロームを主に、黒褐色土を少量含む。部分的な貼床層か。
- 12層：暗褐色土層。暗褐色土とロームの不均質な混合土。間仕切りの小溝覆土。
- 13層：褐色土層。12層に近いが、ロームがやや多い。壁溝覆土。

図12 3号住居跡平面図および断面図(2)



3号住居跡炉1・2 覆土

- 1層：赤褐色土層。焼土。上面が砂床。
- 2層：黒色土層。炭化物の薄層。
- 3層：暗赤褐色土層。焼土を主に、ロームを微量含む。
- 4層：赤褐色土層。3層に近いが、ロームが多い。
- 5層：暗褐色土層。暗褐色土を主にローム粒を含む。

3号住居跡炉3 覆土

- 1層：赤褐色土層。焼土。上面が砂床。
- 2層：暗赤褐色土層。暗褐色土を主に、焼土・炭化物を含む。

3号住居跡貯蔵穴（P5） 覆土

- 1層：黒褐色土層。粘性の強い黒褐色土を主に、ロームを含む。焼土、炭化物を含む。
- 2層：暗褐色土層。暗褐色土・黒褐色土とロームが斑状に混合。1層ほどではないが、粘性強い。
- 3層：黄褐色土層。2層に近いが、ロームが多い。

図13 3号住居跡炉跡・貯蔵穴平面図および断面図

溝が住居構築時に壁溝の造作など一連の作業の中で掘り込まれたものであることを示唆している。

炉跡は、2箇所まで3個検出した。炉1・2は、やや不整な形態の地床炉が2個ないしは3個が重複したもので、炉3は、柱穴に接しており、炉か否か判断に迷うものである。

P1～4は、主柱穴である。柱をいけた中心の掘り込みの形状は、いずれも円形ないしは楕円形である。P1～4には、上部に不整な浅い掘り込みが見られ、P2は、柱が付け替えられているのか、底面が2段になっている。P2の場合、柱根跡が明瞭に残されていたが、P3・4にはみとめられない。

P5は、貯蔵穴であろう。平面形は楕円形に近く、碗状に掘り込まれている。南東隅付近には弧状とL字状のつながった高さ2～5cmの土堤が残されており、L字状の土堤の内には、深さが10cm前後の楕円形のピットが掘り込まれている。隅に接した弧状の土堤の内側にも、貯蔵穴があった可能性がある。

北西隅付近の床面、小溝3の覆土上部からは、棒状の炭化材が出土している。炉跡の近辺を除いては、焼土の分布も見られず、いわゆる焼失住居とは考えにくい。

ピットや小溝の埋土を除いた覆土は、13層に分けられる。暗褐色土、黒褐色土を主とし、おおむねロームの多寡によって分層することができた。炉跡の周辺に焼土・炭化物がやや目立つようである。

遺物(図15・16、表3・4、図版13・14) 遺物は、西半でやや多いものの、全体に分散していた。16は自然石の可能性もあるが、床面で出土しており、17の砥石も、南側の小溝上面から出土した。

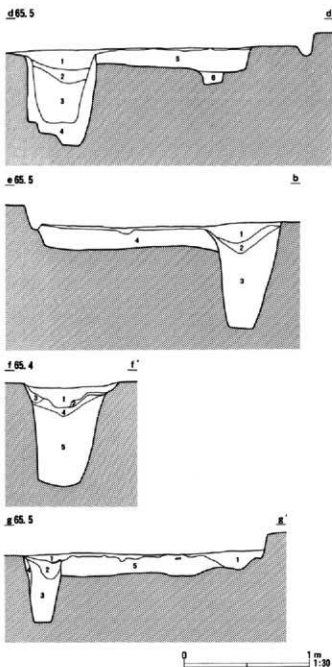


図14 3号住居跡柱穴・小溝断面図

3号住居跡柱穴・小溝断面

P 2・小溝 2 (d-d')

1層：黒褐色土層。粘性のある黒褐色土を主に、ローム粒、径50mmまでのロームブロックを多く含む。焼土を含む。

2層：黄褐色土層。1層に近いが、黒みが強い。

3層：にぶい黄褐色土層。暗褐色土とロームが斑状に混じる。

4層：黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を微量含む。下部はとくに粘性が強い。裏込めのロームの可能性がある。

5層：黄褐色土層。4層に近いが、ロームが白みを帯び、下部はとくに粘性が強い。

6層：黄褐色土層。5層に近い、ロームが多い。

P 3・小溝 4 (e-b)

1層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、ロームを斑状に含む。焼土粒を多く含む。

2層：黒褐色土層。1層に近いが、径20~30mmの炭化物を多く含む。

3層：にぶい黄褐色土層。暗褐色土を主に、ロームを斑状に含む。

4層：黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を微量含む。下部はとくに粘性が強い。

P 4 (f-f')

1層：灰黄褐色土層。暗褐色土を主に、径10~20mm大のロームブロック、焼土を含む。

2層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、焼土を多く含む。

3層：にぶい黄褐色土層。ロームブロックが密集する。所々灰黄褐色土を斑状に含む。

4層：黒褐色土層。粘性の強い黒褐色土を主とする。埋入物は極めて乏しい。

5層：にぶい黄褐色土層。ロームを主に、にぶい黄褐色土あるいは暗褐色土を斑状に含む。

P 5・小溝 1 (g-g')

1層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、ローム粒・ロームブロックを含む。灰白色粒を含み、焼土、炭化物を多く含む。

2層：黒褐色土層。1層に近いが、灰白色粒を含まない。

3層：にぶい黄褐色土層。にぶい黄褐色、褐色の2色のロームが斑状に混合。

4層：黄褐色土層。裏込めのローム。

5層：にぶい黄褐色土層。ロームを主に、微量の暗褐色土あるいは暗褐色土を含む。

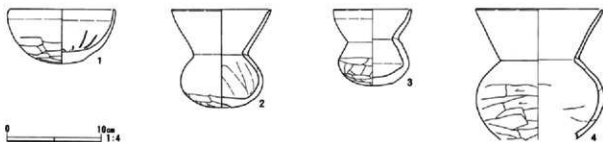


図15 3号住居跡出土遺物実測図(1)

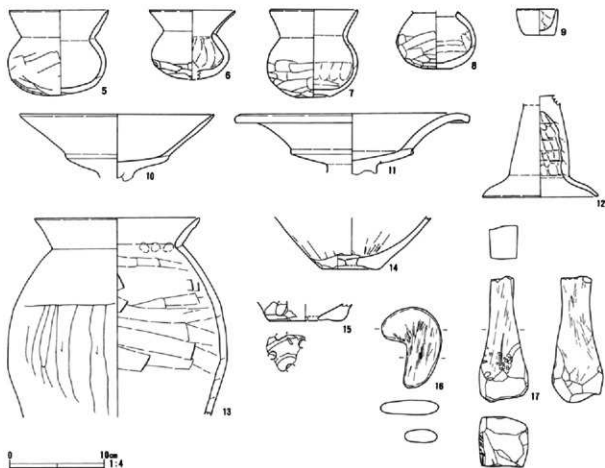


図16 3号住居跡出土遺物実測図(2)

表3 3号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土 甕 器 埴	口径 (11.1) 底径 — 器高 6.7	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部はやや内彎する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部へ底部ヘラケズリ後、体部上位をナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部へ底部ヘラナデ。	チャート 内一にぶい黄褐色 外一にぶい褐色	3/4。
2	土 甕 器 埴	口径 (10.5) 底径 2.6 器高 10.4	体部は中位に膨らみを持つ。口縁部は外反気味に大きく開き、端部はやや内彎。底部は上げ底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位へ中位ナデ、体部下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部へ底部指ナデ。	石英・白色粒 内外一褐色	2/3。
3	土 甕 器 埴	口径 8.3 底径 — 器高 8.1	体部は中位に膨らみを持つ。口縁部上端はやや外傾して立ち上がる。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、体部下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部へ底部ナデ。	石英・白色粒 内一にぶい赤褐色 外一褐色	完形。
4	土 甕 器 埴	口径 13.4 底径 — 器高 —	体部は中位に膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き端部わずかに内彎する。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後、上位をナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	石英・白色粒 内外一褐色	2/3。
5	土 甕 器 埴	口径 10.5 底径 2.0 器高 9.0	体部は横に膨らみ、口縁部は端部がわずかに内彎する。底部は小さな上げ底。	外面一器面寬れており不鮮明だが体部中位へ下位にヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部へ底部ナデ。	粗砂粒・チャート 内一にぶい黄褐色 外一にぶい褐色	4/5。
6	土 甕 器 埴	口径 9.1 底径 — 器高 (7.3)	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、体部下位へ底部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ、体部へ底部指ナデ。	粗砂粒・石英 内一褐色 外一にぶい褐色	2/3。

表4 3号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量 (cm)	形部・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
7	土師器 用	口径 9.4 底径 3.3 器高 9.3	体部は中に膨らみを持つ。口縁部は外反気味に開き端部やや内彎する。底部は上げ底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後、上位をナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部へ底部ナデ。	石英・白色粒 内一明赤褐色 外一褐色	ほぼ完形。
8	土師器 用	口径 — 底径 2.8 器高 —	体部は中に膨らみを持つ。底部は小さな平底。	外面一体部ヘラケズリ後、上位をナデ。内面一体部へ底部指ナデ。	チャート 内外一褐色	口縁部欠損。
9	土師器 ミニチュア 土器	口径 (4.4) 底径 3.3 器高 2.8	体部はわずかな丸みを持つ。底部は平底。	外面一口縁部へ体部ナデ。内面一口縁部へ底部指ナデ、指頭圧痕。	石英・白色粒 内外一ふいふ 褐色	一部欠損。
10	土師器 環	口径 20.6 底径 — 器高 —	環部下位に横を持ち、口縁部は直線的に開く。	外面一口縁部へ環部下位ナデ。内面一口縁部へ環部下位ナデ。	白色粒・角閃石 内一ふいふ褐色 外一明赤褐色	環部4/5残存。
11	土師器 環	口径 (25.1) 底径 — 器高 —	環部下位に横を持つ。口縁部は外反して開き、端部はさらに大きく反る。	外面一口縁部ヨコナデ、環部下位ナデ。内面一口縁部へ環部下位ナデ。	石英・白色粒 内一ふいふ褐色 外一ふいふ黄褐色	環部1/2残存。
12	土師器 高環	口径 — 底径 12.3 器高 —	粘土組織み上げ成形。脚部はわずかに膨らみ、頸部は内彎して開く。	外面一脚部ナデ、頸部ヨコナデ。内面一脚部指ナデ、頸部ヨコナデ。	石英・白色粒 内外一明赤褐色	脚部残存。
13	土師器 壺	口径 17.5 底径 — 器高 —	胴部は弱い膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部縦位ヘラケズリ後、上位をナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、頸部に指頭圧痕。	石英・白色粒 内一黒色 外一浅黄色	口縁部胴部上半残存。
14	土師器 瓶	口径 — 底径 6.0 器高 —	胴部はわずかな丸みを持って立ち上がる。	外面一脚部下位ヘラケズリ。内面一脚部下位へ底部ヘラナデ。	石英・チャート 内一明赤褐色 外一褐色	胴部下位へ底部残存。 孔径：1.2cm。
15	土師器 瓶	口径 — 底径 (8.0) 器高 —	底部及び胴部下端に多孔を穿つ。	小片のため不明瞭。	石英・白色粒 内一ふいふ黄褐色 外一灰褐色	底部片。
No.	種類	器種	法 量 (cm・g)			備考
16	石製品	(砥石)	長さ：8.6 幅：6.4 厚さ：1.5 重さ：108.6 頁岩製			摩痕あり。
17	石製品	砥石	長さ：13.4 幅：5.5 厚さ：5.2 重さ：385.6 砂岩製			4面使用。

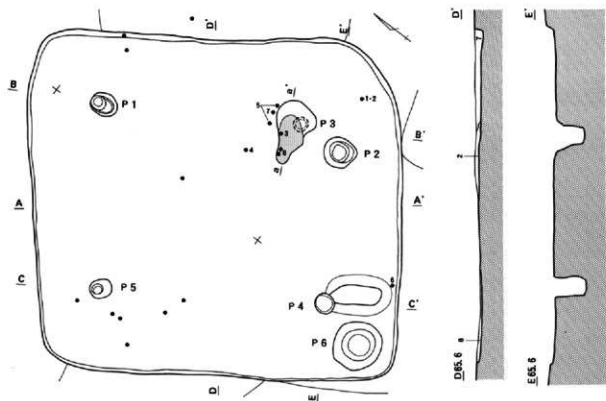
4号住居跡

遺構(図17・18、図版4) 北調査区の南西縁に接して検出した遺構で、D3—45・46グリッドに位置する。確認面は、表土層直下のIV層上面である。2号住居跡、2号溝を切っており、3号住居跡とはわずかに接するのみで、新旧は確定できない。1号焼土跡は、本住居跡より新しい遺構である。

平面形は、やや歪な隅丸長方形で、主軸長は、5.88m、それと直交する軸での長さは、5.9mである。主軸方位は、N—36°—Eである。床面にはかなり高低がある。貼床層もはっきりせず、全体に硬化の度合いも弱い。床面のほぼ中央を旧河道の可能性もある2号溝が抜けているが、その重複部分にも明瞭な貼床は見られない。

炉跡を検出したのは、P1—P2間で、P2側に著しく偏している。かなり不整な瓢形に近い形態の地床炉である。

床面で検出したピットは5個で、P3は炉の燃焼面下で検出したピットである。P1・2・4・5を、住居廃絶時の主柱穴と考える。平面形は、いずれもやや不整な円形、楕円形で、深さも一様である。P3は、P2へと付け替えられる前の主柱穴であろうか。他の柱穴に比べ、径がやや小さく、浅



4号住居跡出土

- 1層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、ローム粒、炭化物を少量含む。
- 2層：黒褐色土層。1層に近いが、粘土、炭化物、パミスかと思われる灰白色粒を含む。
- 3層：黒褐色土層。1層に近いが、砂粒、パミスかと思われる灰白色粒を含む。全体にジャリジャリしている。
- 4層：黒褐色土層。1層に近いが、ローム粒が多い。

- 5層：褐色土層。ローム粒・ロームブロックを主に、黒褐色土を混状に含む。
- 6層：黒褐色土層。3層に近いが、黒みが強く、粘性も強い。
- 7層：黒褐色土層。2層に近いが、砂粒、パミスかと思われる灰白色粒を多く含む。
- 8層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、径5～10mm大のローム小ブロックを含む。

図17 4号住居跡平面図および断面図

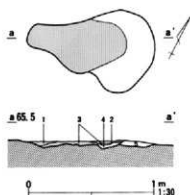


図18 4号住居跡炉跡平面図および断面図

4号住居跡炉跡覆土

- 1層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土、炭化物を多く含む。
- 2層：暗赤褐色土層。焼土粒や細かなブロックに分かれた焼土。
- 3層：暗赤褐色土層。上面が均床をなす焼土。
- 4層：ふい黄褐色土層。暗褐色土を主に、ロームブロック、焼土粒を含む。
- 5層：暗褐色土層。4層に近いが、ロームブロック、バミス粒、炭化物を含む。

い。P2・3いずれを採っても、歪んだ四本柱の配置となる。

P6は、貯蔵穴である。ほぼ円形で、2段に掘り込まれており、深さは42cmである。P6から見て入口部側、P4に接して、高さが3～5cmの土堤と思われる幅広の高まりがみとめられる。

遺物(図19、表5、図版14) 床面ないしは床面直上層より出土した遺物を図示した。3・8は、炉跡上面、4・5・7は、炉跡の脇の床面出土である。

表5 4号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 高 坏	口径 (12.2) 底径 — 器高 —	坏部下位に弱い稜を持ち、口径部は外反気味に開く。	外面—口径部ヨコナデ、坏部下位ナデ。内面—口径部ヨコナデ、坏底部ナデ。	石英・白色粒 内外—赤褐色	坏部1/3残存。
2	土師器 高 坏	口径 — 底径 — 器高 —	脚部はわずかに膨らみ器部へ向かう。	外面—脚部ナデ。内面—脚部ヘラナデ。	石英・白色粒 内外—赤褐色	頸部を欠損する脚部。
3	土師器 小 壺 罍	口径 (12.0) 底径 5.3 器高 12.6	胴部は膨らみを持ち、口径部は短く外反する。底部はやや丸みを持つ。	外面—口径部ヨコナデ、胴部へ底部ヘラケズリ後、胴部上位をナデ。内面—口径部ヨコナデ、胴部へ底部ヘラケズリ。	片岩・チャート 内—明褐色 外—明赤褐色	1/2。
4	土師器 壺	口径 (19.8) 底径 (6.0) 器高 23.3	胴部は中位に膨らみを持つ。口径部は直線的に開き、端部わずかに内彎する。	外面—口径部ヘラケズリ後、粗雑なナデ、胴部ヘラケズリ。内面—口径部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後、粗雑なナデ。	片岩・砂礫 内外—明赤褐色	2/3。
5	土師器 壺	口径 16.0 底径 — 器高 —	胴部は膨らみを持ち、口径部は外反気味に開く。	外面—口径部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面—口径部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、頸部に指頭圧痕。	片岩・粗砂粒 内—黒褐色 外—ふい赤褐色	胴部下平を欠損。
6	土師器 壺	口径 15.9 底径 — 器高 —	胴部は膨らみを持ち、口径部はわずかに槽曲しながら開く。	外面—口径部ヘラケズリ後、粗雑なナデ、胴部ヘラケズリ。内面—口径部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後、粗雑なナデ。	片岩・砂礫 内—褐色 外—ふい褐色	上半部の1/3残存。
7	土師器 壺	口径 15.1 底径 5.0 器高 19.4	胴部は膨らみを持ち、口径部は外反気味に開く。	外面—口径部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面—口径部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後、粗雑なナデ、底部ナデ。	片岩・チャート 内—褐色 外—灰褐色	4/5。
8	土師器 台付 罍	口径 15.4 底径 — 器高 —	胴部は上位に膨らみを持ち、口径部は外反気味に開く。	外面—口径部ヨコナデ、胴部は粗雑で細かいヘラケズリ。内面—口径部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、頸部に指頭圧痕。	片岩・粗砂粒 内外—褐色	台部欠損。

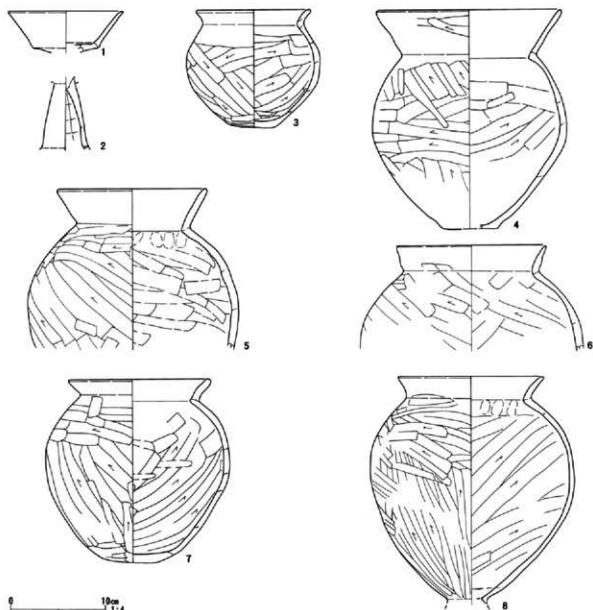


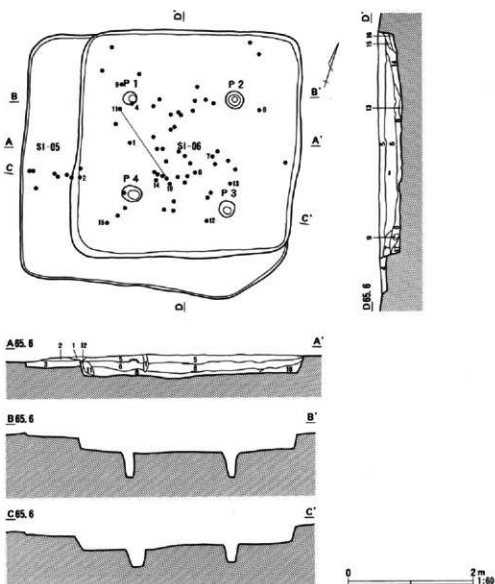
図19 4号住居跡出土遺物実測図

5・6号住居跡

遺構 (図20、図版4) 北調査区の中央やや東寄り、D3-73グリッドを中心に位置する遺構である。確認面は、表土層直下のIV層上面である。重複する2軒の住居跡で、古い方から5・6号住居跡と呼称した。土層断面から見て、掘り込みの浅い5号住居跡を壊し、全体に北東方向に移して、より深い6号住居跡へと建て替えた模様である。2号溝を切っている。

5号住居跡は、6号住居跡が、北壁・東壁を共有し入れ子状に重複して設けられているため、西側、南側の部分のみL字状に遺存した住居跡である。

平面形は、隅丸方形であろう。南東隅は角がとれている。6号住居跡と同じ主軸方向をとるとすれば、主軸長は、4.1m前後、それに直交する軸での長さは、4.45m前後になる。同じく主軸方位も、N-19°-Wと推定できる。床面は、中央部に向かってやや傾斜しており、かなり軟弱である。炉跡、柱



5・6号住居跡覆土

- 1層：褐色土層。褐色土を主に、バミスかと思われる灰白色粒（以下単に「灰白色粒」と呼ぶ）が团塊状をなし集中する。住居跡覆土以後の層。
- 2層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、径1～3mm大の灰白色粒同じ灰白色の粉末を多量に含む。粒子の粗い褐色土、炭化物を少量含む。粘性がなく、乾くとガリガリになる。以下、4層まで5号住居跡覆土。
- 3層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、褐色土を斑状に含む。2層に比し、やや黒みが強く、灰白色粒急減する。
- 4層：褐色土層。褐色土を主に、暗褐色土層と灰白色粒が斑状に混合。
- 5層：暗褐色土層。2層に近いが、褐色土が少ない。2層との区別はかなり微妙であり、2層を含めて、住居跡後のくぼみに溜まった土の可能性もある。以下、6号住居跡覆土。
- 6層：暗褐色土層。3層に近いが、褐色土が少ない。
- 7層：暗褐色土層。6層に近いが、黒みが強い。

- 8層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、灰白色粒、あるいはその粉末を微量含む。この層から土粒細かくなり、しっとりしてくる。灰白色粒さらに急減する。
- 9層：褐色土層。褐色土のブロック。
- 10層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、褐色土を含む。やや粘性あり、水分を含むようになる。
- 11層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、黄褐色土を含む。マンガンとかと思われる黒色粒を含む。
- 12層：暗褐色土層。11層に近いが、やや黒みが強い。径5mm大の黒色粒をかなり含む。
- 13層：褐色土層。褐色土と黒褐色土の混合土。
- 14層：暗褐色土層。8層に近いが、褐色土を斑状に含む。黒褐色土と褐色土同量程度で、全体に暗褐色みを帯びる。
- 15層：暗褐色土層。14層に近いが、褐色土のブロックがはっきりしている。
- 16層：黒褐色土層。8層に近いが、黒みが強い。
- 17層：褐色土層。褐色土を主に、黒褐色土を微量含む。

図20 5・6号住居跡平面図および断面図

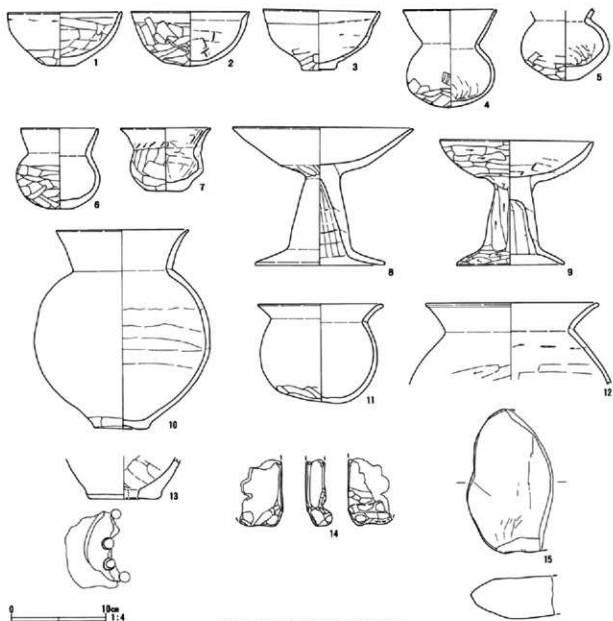


図21 6号住居跡出土遺物実測図

穴に関しては、6号住居跡に壊されたと見る他ない。

覆土は3層で、暗褐色土や褐色土を主に、灰白色粒を含む粒子の粗い土である。

6号住居跡の平面形は、隅丸方形である。南壁側を入口側とすれば、主軸方向は、N-19°-W、主軸長は、3.6m、主軸に直交する軸での長さは、3.56mである。床面にはいくらか高低があり、全体に硬化の度合いも微弱である。床面の大半が2号溝と重なっているが、その部分にも貼床がなされた痕跡は全く見られない。また、壁際の床面がやや軟らかではある。なお、壁溝、および炉跡は検出できなかった。

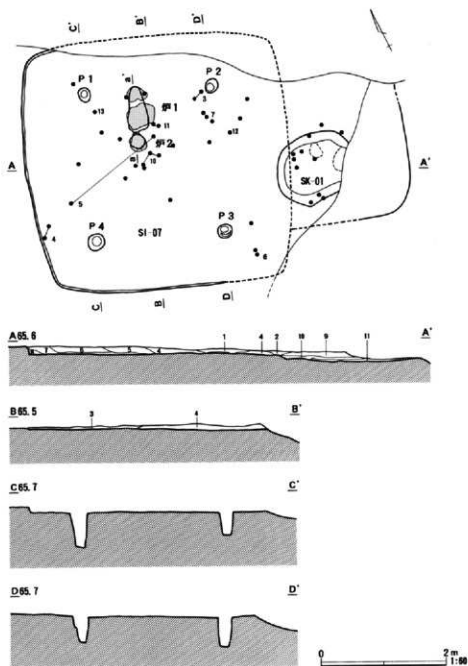
P1~4は、支柱穴であろう。円形・楕円形に近い形に掘り込まれており、P3・4がやや太く、浅いようである。柱穴の検出はかなり困難であったが、中位以下の覆土は、黒みが強く柔らかなため、迷うことなく掘り上げることができた。

表6 6号住居跡出土遺物観察表

No	器 種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
1	土 師 器 埴	口径 12.2 底径 4.0 器高 5.7	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部はわずかに内彎する。体部は丸みのある平底。	外面一全体をヘラクスリ後、口縁へ体部中位をナダ。内面ヘラクスリ後、体部へ底部ヘラナダ。	石英・白色粒 内外一明赤褐色	完形。
2	土 師 器 埴	口径 12.6 底径 5.8 器高 —	体部は丸みを持って立ち上がる。口縁部はわずかに外反し、内斜する。底部は丸底。	外面一口縁部ココナダ、体部へ底部ヘラクスリ。内面一口縁部ココナダ、体部へ底部ヘラナダ。	白色粒・黒色粒 内外一明赤褐色	完形。
3	土 師 器 鉢	口径 12.4 底径 3.6 器高 6.5	全体的に歪みのある雑な成形。平底の台状底部から体部は丸みを持って立ち上がる。肥厚口縁。	外面一口縁部ナダ、体部ヘラクスリ後ナダ。内面一口縁部ココナダ、体部へ底部ナダ。	石英・白色粒 内外一明赤褐色	一部欠損。
4	土 師 器 埴	口径 10.0 底径 — 器高 10.5	体部は膨らみを持ち、口縁部はわずかに褶曲して開く。底部は丸底。	外面一口縁部ココナダ、体部上位ナダ、体部下位へ底部ヘラクスリ。内面一口縁部ココナダ、体部上位ナダ、体部下位へ底部ヘラナダ。	石英・白色粒 内一褐色 外一明赤褐色	一部欠損。
5	土 師 器 埴	口径 — 底径 3.0 器高 7.6	膨らみを持つ体部。底部は小さな平底。	外面一体部ヘラクスリ後、上位を中心にナダ。内面一体部へ底部指ナダ。	石英・白色粒 内外一褐色	口縁部欠損。
6	土 師 器 埴	口径 8.2 底径 — 器高 8.6	体部は膨らみを持つ。口縁部は上端がやや内彎する。底部は丸底。	外面一口縁部ココナダ、体部へ底部ヘラクスリ。内面一口縁部ココナダ、体部へ底部指ナダ。	片岩・チャート 内外一褐色	ほぼ完形。
7	土 師 器 埴	口径 9.6 底径 4.3 器高 6.6	全体的に歪み・凹凸のある雑な成形。胴部は膨らみ、口縁部は外反して開く。底部は平底。	外面一口縁部粗雑なナダ、体部ヘラクスリ。内面一口縁部粗雑なナダ、体部へ底部ヘラナダ。	石英・白色粒 内外一褐色	ほぼ完形。
8	土 師 器 高 坏	口径 (19.3) 底径 13.9 器高 14.7	坏部下位にわずかな後を持ち、口縁部は直線的に開く。胴部はわずかに膨らみ、裾部は外方へ広がる。	外面一口縁部ナダ、坏部下位ヘラクスリ。胴部へ裾部ナダ。内面一口縁部へ坏底部ナダ、胴部ヘラナダ。	石英・白色粒 内一褐色 外一明赤褐色	2/3。
9	土 師 器 高 坏	口径 16.3 底径 11.5 器高 13.3	坏部下位に弱い段を持ち、口縁部は彎曲して開く。胴部はわずかに膨らみ、裾部は彎曲して開く。	外面一口縁部粗雑なナダ、口縁部上端をナダ。内面一口縁部ココナダ、坏部下位へ坏底部ヘラナダ、胴部ヘラナダ。	砂礫・チャート 内一褐色 外一褐色	4/5。
10	土 師 器 壺	口径 14.0 底径 5.7 器高 21.1	胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。底部は中央部が窪む。	外面一口縁部ココナダ、胴部ヘラクスリ後ナダ。内面一口縁部ココナダ、胴部へ底部ヘラナダ。	石英・白色粒 内外一褐色	一部欠損。
11	土 師 器 小 型 壺	口径 13.5 底径 — 器高 10.4	胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。体部は丸底気味。	外面一口縁部ココナダ、胴部ナダ、底部ヘラクスリ。内面一口縁部ココナダ、胴部へ底部ナダ。	石英・白色粒 内一褐色 外一褐色	3/4。
12	土 師 器 壺	口径 18.5 底径 — 器高 —	口縁部は外反気味に開き、玉縁状。	外面一口縁部ココナダ、胴部ヘラクスリ、上位をナダ。内面一口縁部ココナダ、胴部ヘラナダ。	石英・白色粒 内一褐色 外一灰褐色	口縁へ胴部上位残存。
13	土 師 器 瓶	口径 — 底径 (7.8) 器高 —	底部に多孔を穿つ。	外面一器面荒れており不鮮明。内面一底部ヘラナダ。	石英・角閃石 内外一褐色	底部片。
14	(土製品)	口径 — 底径 — 器高 —	厚さ2cm前後の板状品で、図下側が短く折れ曲がる。	全体をナダ。部分的に指摺り底。	石英・白色粒に よい黄褐色へ よい褐色	
No	種 類	法 量 (cm・g)				備 考
15	雜	長さ: 15.2 残存幅: 9.0 厚さ: 4.5 重さ: 993.5 安山岩				平滑でわずかな擦痕あり。

覆土は13層で、5号住居跡覆土に比べ、全体にやや黒みが強く、下層にゆくほど水分を含み、粘性が増すようであった。

遺物(図21、表6、図版15) 図示した遺物は、いずれも6号住居跡出土である。1・6・7・10・11・13・14など、住居中央にややまとまり、床面よりかなり浮いた状態で出土している。



7号住居跡覆土

- 1層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土、炭化物を多量に含む。ローム粒、白色粒も含む。1～8層は、7号住居跡覆土。
- 2層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土、炭化物を含む。マンガンかと思われる黒色粒を所々含む。
- 3層：暗褐色土層。1層に近いが、炭化物が少ない。
- 4層：暗褐色土層。1層に近いが、焼土、炭化物が細かく、均一に分散している。
- 5層：暗褐色土層。1層に近いが、大きな炭化物粒、炭化物片を含む。
- 6層：暗褐色土層。5層に近いが、炭化物片がさらに大きい。下面の所々に炭化物の薄層が見られる。

- 7層：暗褐色土層。5層に近いが、ローム粒多く、炭化物が少ない。
- 8層：暗褐色土層。7層に近いが、焼土が少ない。
- 9層：暗褐色土層。1層に近いが、白色粒が多く、マンガンかと思われる黒色粒を斑状に含む。9～11層は、1号土坑覆土。
- 10層：黒褐色土層。暗褐色土あるいは黒褐色土を主に、焼土、炭化物を多量に含む。
- 11層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。全体にシルト化し白みを帯びている。焼土を少量含む。

図22 7号住居跡・1号土坑平面図および断面図

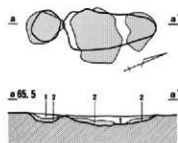


図23 7号住居跡炉跡平面図および断面図

7号住居跡炉跡覆土

- 1層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、機土粒を含む。
2層：暗赤褐色土層。焼土。上面が伊灰と思われるが、焼土中にも不規則に少量の暗褐色土を含む。

7号住居跡

遺構 (図22・23、図版4・5) 北調査区の東半、北寄り、D2-98・99グリッドを中心に位置する遺構である。確認面は、IV層上面である。北側を旧河道に壊され、東側では、1号土坑を壊して構築されている。提示した土層断面図では、東側の壁もいくらか残っているようにも見えるが、実際には、東、南東側の壁はほとんど残っておらず、辛うじて覆土の範囲がとらえられるに過ぎなかった。

平面形は、横幅の方がやや長く、胴の張る隅丸方形になりそうである。いずれも推定値になるが、主軸長は4.02m前後、主軸に直交する方向での長さは、4.2m、主軸方位は、N-24°Eである。

床面には微妙な凹凸があり、硬化の度合はそれほど著しくない。壁溝は見られない。

炉跡は1箇所、ほぼ主軸線上に並ぶ3面の燃焼面を検出した。新旧は分らないが、燃焼面を替えて順次使用されたものであろう。炉1としたものは、やや歪な長楕円に床面を浅く掘りくぼめただけの地床炉である。南北方向に並んだ2つの燃焼面を有する。炉2は、炉1の北側に隣接して設けられた不整形の地床炉であり、やはり床面が浅く掘りくぼめられている。いずれの炉も明瞭に被熱赤化している。

P1~4は、主柱穴である。いずれも不整形な円形に掘り込まれており、深さにやや幅があるようである。

覆土は8層で、全体に焼土、炭化物をかなり含む。

遺物 (図24、表7・8、図版15・16) 7号住居跡出土として図示した遺物は、いずれも床面から出土したものである。炉跡を中心に、完形に近い土器(3・5・7・10~12)や砥石(13)が床面上に転がっており、一見すると焼失住居のような観を呈していた。

表7 7号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	流量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土器 鉢	口径 10.4 底径 3.8 器高 6.5	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部はやや内湾する。底部は平底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ。内面一口縁~底部ナデ。	石英・白色粒 内一明褐色 外一褐色	一部欠損。
2	土器 甕	口径 9.0 底径 1.8 器高 8.3	体部は中位に膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き、端部やや内湾する。底部は上げ底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後、上位をナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部~底部指ナデ。	片岩・チャート 内外一明赤褐色	一部欠損。
3	土器 甕	口径 (15.5) 底径 — 器高 —	直線的に開く口縁部。	外面一口縁部ナデ。内面一口縁部ナデ。	チャート 内外一にぶい黄褐色	口縁部1/3残存。
4	土器 (瓶)	口径 (19.7) 底径 — 器高 —	胴部わずかに彎曲して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	外面一器面荒れており不鮮明。内面一口縁~胴部ナデ。	石英・白色粒 内一褐色 外一明褐色	1/3。

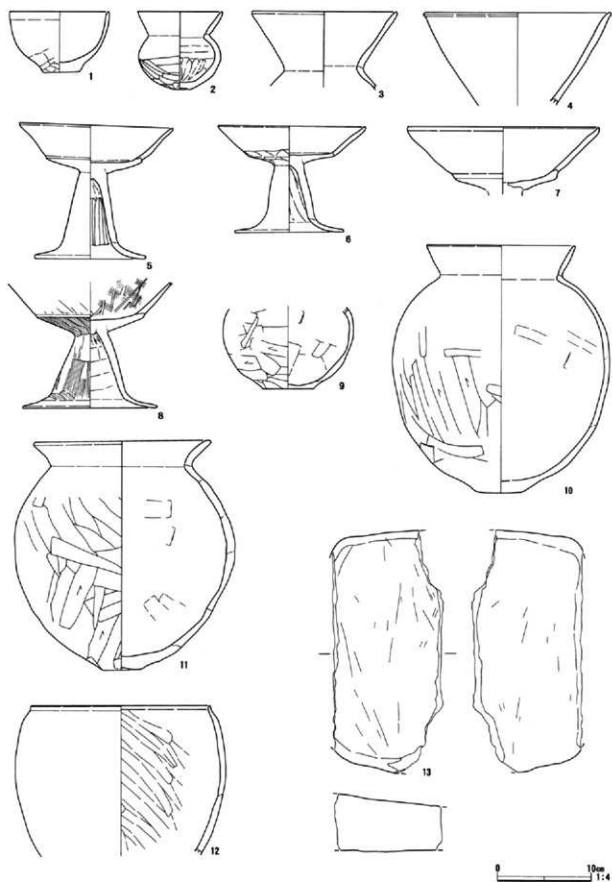


图24 7号住居跡出土物実測図

表8 7号住居跡出土遺物観察表(2)

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
5	土師器 高環	口径 16.4 底径 11.8 器高 14.2	坏部下位に稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。脚部下方に向かってわずかに開き、裾部は広がる。	外面一面瓦れており不鮮明。内面一坏部ナデ、脚部上位絞り目、中位・下位ヘラクスリ、底部ナデ。	石英・チャート 内一明赤褐色 外一明褐色	一部欠損。
6	土師器 高環	口径 (15.8) 底径 (11.6) 器高 11.3	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。脚部わずかに膨らみ、裾部は広がる。	外面一口縁部ヨコナデ、坏部下位ヘラクスリ、脚部ナデ、裾部ヨコナデ。内面一口縁部ヨコナデ、坏底部ナデ、脚部絞り目、裾部ヘラナデ。	石英・白色粒 内一褐色 外一明赤褐色	3/4。
7	土師器 高環	口径 (20.5) 底径 — 器高 —	坏部下位に稜を持つ。口縁部は直線的に開き、端部やや内彎する。	外面一口縁部ヨコナデ、坏部下位ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、坏底部ナデ。	石英・白色粒 内外一褐色	脚部欠損。
8	土師器 高環	口径 — 底径 (14.1) 器高 —	坏部下位に稜を持ち、口縁部は直線的に開く。脚部は膨らみを持ち、裾部は広がる。	外面一口縁部ハケ目後ナデ、坏部下位ハケ目、脚部ハケ目後上位を中心にナデ、裾部ヨコナデ。内面一口縁部ハケ目後重なるミガキ、脚部上位絞り目、中位・下位ヘラナデ、裾部ヨコナデ。	石英・白色粒 内外一褐色	1/2。
9	土師器 壺	口径 — 底径 (5.4) 器高 —	膨らみを持つ胴部。	外面一胴部ヘラクスリ、底部ヘラクスリ。内面一胴部～底部ヘラナデ。	片岩・チャート 内一にぶい黄褐色 外一にぶい黄褐色	胴部下位の1/2残存。
10	土師器 壺	口径 (15.9) 底径 (5.2) 器高 26.3	胴部は膨らみを持ち、口縁部はわずかに彎曲して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラクスリ後、上位を中心にナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	粗砂粒・チャート 内一にぶい褐色 外一褐色	2/3。
11	土師器 壺	口径 18.8 底径 4.4 器高 24.2	胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。底部中央部がわずかに窪む。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラクスリ後、上位を中心にナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	チャート・角閃石 内一にぶい黄褐色 外一にぶい褐色	4/5。
12	土師器 甌	口径 (19.0) 底径 — 器高 —	胴部は弱い膨らみを持ち、口縁部は短く内傾する。	外面一胴部ヘラクスリ後ナデ。内面一胴部ヘラナデ。	石英・白色粒 内外一にぶい黄褐色	上半部片。
No	種類	器種	法 量 (cm・g)		備 考	
13	石製品	砥石	長さ:25.7 残存幅:11.8 厚さ:6.0 重さ:3,100.6 砂岩質		平磨でわずかな磨痕あり。	

8号住居跡

遺構(図26、図版5) 北調査区のほぼ中央、北寄り、D2—67グリッドを中心に位置する遺構である。確認面は、IV層上面である。ほとんど削平されており、床面に痕跡的に残るのみである。残存部分から見て、本来9号住居跡と重複していた住居跡であろう。

平面形、規模ともに不明であるが、東隅の輪郭は、確認作業時かなり明瞭に視認でき、床面らしき面がわずかながらも東隅周辺に残ることが確認できた。床面で検出したピットは2個である。P1の側壁の極一部ではあるが、被熱し淡く赤化した部分が見られたが、炉跡とは断定できない。P2を主柱穴とも考えたが、対応するピットが見られない。

遺物(図25、表9、図版16) ピットを中心とするやや広い範囲から、土器片が出土している。それらの破片の中には、図化した土器の他に、S字壺の胴部片が含まれる。

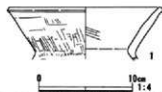


図25 8号住居跡出土遺物実測図

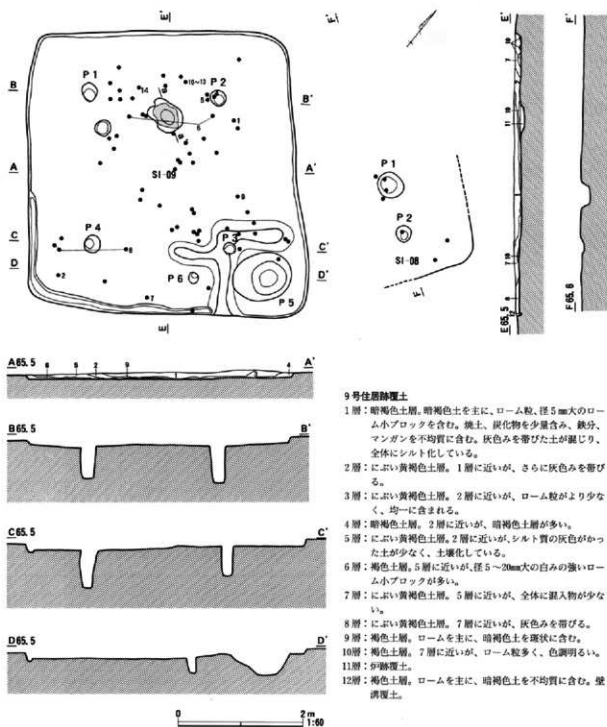
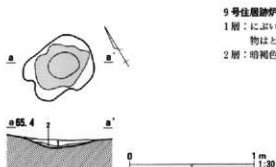


図26 8・9号住居跡平面図および断面図

表9 8号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量(cm)	形値・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土部器 壺	口径 (16.7) 底径 — 器高 —	口縁部は直線的に開き、口唇部はわずかに外方へ突出する。	外面一口縁部タテハケ目後ヨコナデ。内面一口縁部ハケ目後ヨコナデ。	石英・白色粒 内一にぶい黄褐色 外一にぶい黄褐色	口縁部1/3残存。



9号住居跡炉跡土

1層：ぶい黄褐色土層。ロームを主に、炭化物を含む。炭化物はとくに上部に多い。

2層：暗褐色土層。残土。

図27 9号住居跡炉跡平面図および断面図

9号住居跡

遺構 (図26・27、図版5) 北調査区のほぼ中央、D2-48・49・58・59グリッドを中心に位置する遺構であり、確認面は、IV層上面である。本来8号住居跡と重複していた可能性がある。

平面形は、やや歪な隅丸方形である。主軸長は、4.49m、それに直交する方向での長さは、4.25mで、主軸方向は、N-39°-Wである。

床面の硬化はかなり明瞭であるが、中央部が微妙にくぼんでいる。壁際の床面は全体に軟弱である。実際に壁溝を検出したのは、南西壁際の一部、および貯蔵穴周辺を除く南東壁際に限られる。

炉跡は、床面を浅く掘りくぼめ炉床とした地床炉であり、炉床はよく赤化している。

検出したピットは、P1～7の7個で、P1～4は、支柱穴で、P5は、貯蔵穴である。P5の周囲には、1～5cmと極わずかな高さではあるが、土堤と思われる高まりがみつめられる。P7は、入口部に関連するピットであろうか。土堤の一部は枝分かれして、P7の片側を画している。

覆土は、10層に分けられた。全体にシルト化したロームの混入が目立つようである。

遺物 (図28、表10・11、図版17) 図示した遺物のほとんどは、床面から出土したものである。5・6の高環は炉の脇、9の砥石は、P5の土堤の近くの床面から出土した。

表10 9号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土器 壺	口径 8.6 底径 4.4 器高 5.9	体部は上位に膨らみを持ち、口縁部はやや内彎する。	外面—口縁—体部ナダ。内面—口縁—体部上位ヨコナダ、体部中位—底部ヘラケズリ。	石英・角閃石 内外—橙色	5/6。
2	土器 壺	口径 11.4 底径 — 器高 —	体部は横に膨らむ。口縁部は直線的に開き、肩部やや内彎する。	外面—口縁部ヨコナダ、体部上位・中位ナダ、体部下位ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナダ、体部—底部ヘラナダ。	石英・白色粒 内外—橙色	1/3。
3	土器 鉢	口径 9.5 底径 2.1 器高 6.8	体部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。底部は小さな平底。	外面—口縁部ヨコナダ、体部ヘラケズリ後、上位をナダ。底部に刺突。内面—口縁部ヨコナダ、体部—底部ヘラナダ。	石英・角閃石 内外—橙色	2/3。
4	土器 壺	口径 13.6 底径 — 器高 14.2	体部は膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き、肩部やや内彎する。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナダ、体部上位ナダ、体部中位—底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナダ、体部—底部ヘラナダ。	石英・角閃石・ チャート 内外—明赤褐色	5/6。

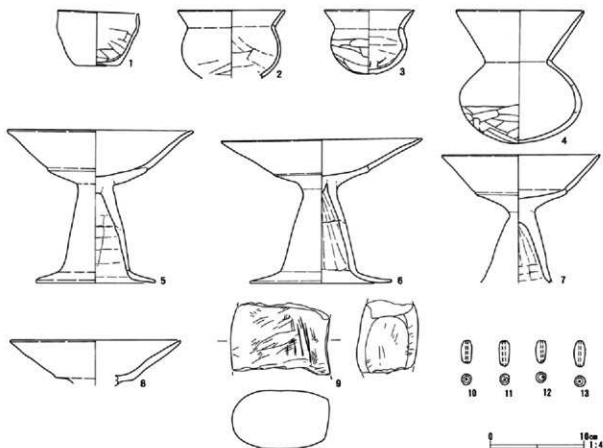
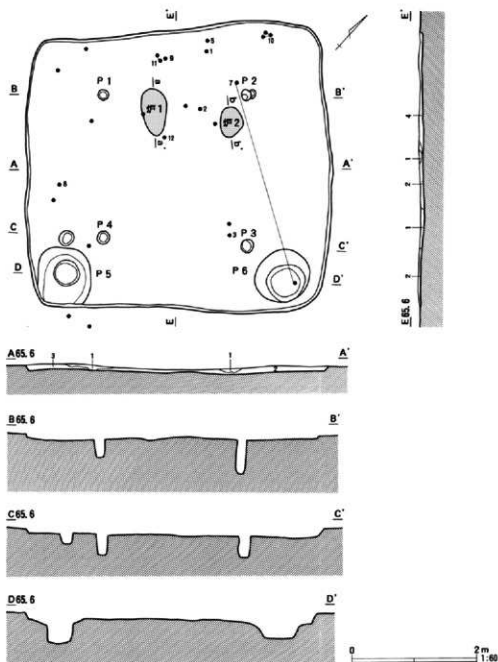


図28 9号住居跡出土遺物実測図

表11 9号住居跡出土遺物観察表(2)

No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
5	土器 高坏	口径 (19.7) 底径 (12.7) 器高 16.3	坏部下に横を持ち、口縁部は外反して開く。脚部はわずかな膨らみを持ち、裾部は広がる。	外面一口縁部ヨコナデ、坏部下位～脚部ナデ、裾部ヨコナデ。 内面一口縁部ヨコナデ、坏底部ナデ、脚部ヘラナデ、裾部ヨコナデ。	石英・白色粒 内外一明赤褐色	2/3。
6	土器 高坏	口径 (21.4) 底径 15.1 器高 15.4	坏部下位に横を持ち、口縁部は外反気味に開く。脚部はわずかな膨らみを持ち、裾部は広がる。	外面一口縁部ヨコナデ、坏部下位～脚部ナデ、裾部ヨコナデ。 内面一口縁部ヨコナデ、坏底部ナデ、脚部絞り目、裾部ヨコナデ。	石英・白色粒 内外一にふい橙色	2/3。
7	土器 高坏	口径 16.9 底径 — 器高 —	坏部下位に弱い横を持ち、口縁部は外反気味に開く。脚部はわずかな膨らみを持つ。	外面一口縁部ヨコナデ、坏部下位～脚部ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、坏底部ナデ、脚部上位・中位絞り目、下位ヘラナデ。	石英・角閃石 内外一橙色	裾部欠損。
8	土器 高坏	口径 (18.0) 底径 — 器高 —	坏部下位に弱い横を持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、坏部下位ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、坏底部ナデ。	石英・白色粒 内外一明赤褐色	坏部4/5残存。
No	種類	器種	法 量 (cm・g)			備考
9	石製品	砥石	残存長:6.8 幅:10.3 厚さ:6.2 重さ:84.0 安山岩製			
10	土製品	管玉形模造品	長さ:2.4 幅:1.1 孔径:0.2 重さ:3.3 石英・白色粒 明赤褐色			完形。
11	土製品	管玉形模造品	長さ:2.7 幅:1.1 孔径:0.2 重さ:3.5 石英・白色粒 ぶい赤褐色			一部欠損。
12	土製品	管玉形模造品	長さ:2.3 幅:1.1 孔径:0.2 重さ:3.2 石英・白色粒 明赤褐色			完形。
13	土製品	管玉形模造品	長さ:2.7 幅:1.1 孔径:0.2 重さ:3.7 石英・白色粒 明赤褐色			完形。



10号住居跡覆土

1層：灰黄褐色土層。表土。水田の床土と思われる灰黄褐色シルト質土。

2層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、径20～50mm大のロームブロックおよび機土を含む。

3層：暗褐色土層。2層に近いが、ロームブロックが小さい。

4層：暗褐色土層。2層に近いが、ロームブロックがかなり少ない。

図29 10号住居跡平面図および断面図

10号住居跡

遺構（図29・30、図版6） 北調査区のほぼ中央、南西寄り、D3-10・11グリッドを中心に位置する遺構である。確認面は、IV層上面である。

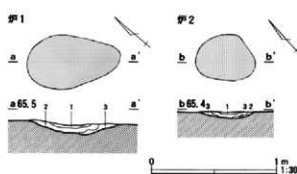


図30 10号住居跡炉跡平面図および断面図

かなり歪ではあるが、平面形はやや胴の張る隅丸方形としてよいであろう。主軸長は、4.4m、主軸に直交する方向での長さは、4.85mで、主軸方向は、N-43°Wである。

床面には凹凸が顕著であるが、炉跡の周辺を中心に比較的良好に硬化している。

炉跡は、主軸線の左右に1つずつ2箇所検出した。炉1・2はともにほとんど床面を掘りくぼめることなく炉床を設けた地床炉である。炉1の方が赤化の度合いがいちじらしい。また、床面に張り付くような状態で、炉1の周囲から奥壁側に広がる炭化物の薄層がみとめられた。

床面で検出したピットは7個で、P1~4は、支柱穴、P5・6は、貯蔵穴である。P5は、上部が楕円状で中央が円く掘り込まれており、P6も上部が大きく広がっている。ともに暗褐色土を主とする覆土である。

住居跡本体の覆土は4層に分けられたが、上層には所々より上位の土が混入していた。

遺物(図31、表12~14、図版17・18) 1・2・5・9~12など、遺物の多くは、炉の周辺から奥壁にかけての床面から出土している。7は、P2脇出土の破片と、P6、貯蔵穴出土の破片の接合資料である。

表12 10号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法的特徴	調整手法的特徴	胎土・色調	備考
1	土器 壺	口径 8.6 底径 — 器高 —	体部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一面荒れており不明瞭。 内面一口縁部ヨコナデ、体部指ナデ・ナデ。	石英・チャート 内外一にふい黄褐色	2/3。
2	土器 壺	口径 9.1 底径 — 器高 7.4	体部は膨らみを持ち、口縁部はわずかに彎曲して開く。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、体部中位~底部ヘラクスリ。 内面一口縁部ヨコナデ、体部~底部ナデ・指ナデ。	石英・白色粒 内外一明赤褐色	4/5。
3	土器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	体部は膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位・中位ナデ、体部下位~底部ヘラクスリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部~底部指ナデ。	白色粒・黒色粒 内外一明赤褐色	1/2。
4	土器 壺	口径 (8.0) 底径 — 器高 (8.1)	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は内彎気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラクスリ後、上位をナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラナデ。	石英・白色粒 内外一明赤褐色	3/4。
5	土器 壺	口径 — 底径 1.8 器高 —	体部は横に膨らみを持つ。底部は上げ底。	外面一体部上位ナデ、下位ヘラクスリ。内面一体部ヘラナデ。	石英・角閃石 内外一明赤褐色	口縁部欠損。
6	土器 壺 小型	口径 (14.1) 底径 — 器高 —	直線的に開く口縁部、上位はわずかに内彎する。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部上位ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、頸部に指頭圧痕。	白色粒・黒色粒 内一明赤褐色 外一にふい黄褐色	口縁部1/3残存。

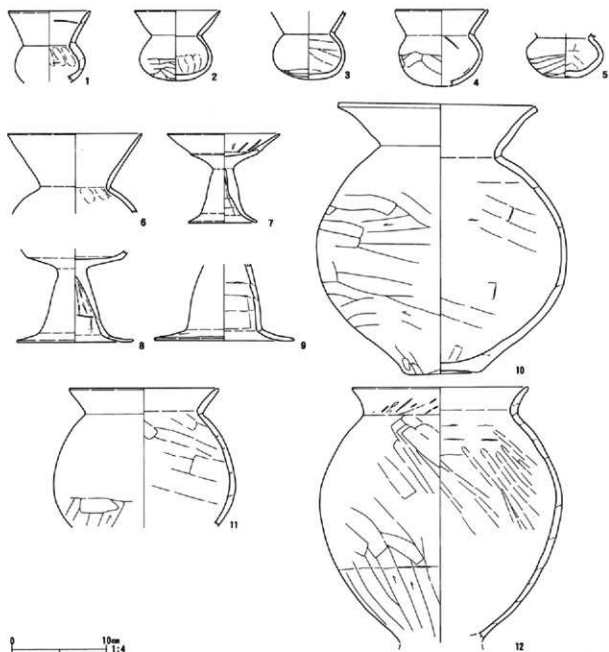


図31 10号住居跡出土遺物実測図

表13 10号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	流量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	粘土・色調	備考
7	土師器 高環	口径 11.9 底径 (7.4) 器高 9.5	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。脚部は直線的に開き、裾部広がる。	外面—口縁部ココナデ、坏部下位—脚部ナデ、裾部ココナデ。 内面—口縁部ココナデ・縦位ミガキ、坏底部ナデ、脚部上位に絞目、下位ヘラナデ、裾部ココナデ。	石英・白色粒 内—ふよい褐色 外—明赤褐色	3/4。
8	土師器 高環	口径 — 底径 12.3 器高 —	坏部下位に弱い稜を持つ。脚部は直線的に開き、裾部広がる。	外面—坏部下位—脚部ナデ、裾部ココナデ。内面—坏底部ナデ、脚部上位・中位絞目、下位ヘラナデ、裾部ココナデ。	石英・白色粒 内外—明赤褐色	口縁部欠損。
9	土師器 高環	口径 14.9 底径 — 器高 —	粘土紐巻き上げ成形。脚部は下位に膨らみを持ち、裾部は大きく広がる。	外面—脚部ナデ、裾部ナデ。内面—脚部ヘラナデ、裾部ココナデ。	石英・白色粒 内外—明赤褐色	脚部2/3残存。

表14 10号住居跡出土遺物観察表(3)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
10	土師器 壺	口径 21.5 底径 8.5 器高 28.9	胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。口唇部は面をなす。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後粗雑なナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部へ底部ヘラナデ。	チャート 内一にぶい黄褐色 外一明黄褐色	3/4。
11	土師器 甕	口径 (16.0) 底径 — 器高 —	粘土紐積み上げ成形。胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部上位ナデ、下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	石英・チャート 内外一灰黄褐色	1/4。
12	土師器 白付壺	口径 (19.0) 底径 — 器高 —	粘土紐積み上げ成形。胴部は中位やや上に膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。胴部下位は窄まり台部に向かう。	外面一口縁部ヨコナデでヘラ当り痕残る、胴部ヘラケズリ後、上位中心にナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ナデ・指ナデ。	チャート 内一にぶい黄褐色 外一にぶい赤褐色	1/4。台部欠損。

11号住居跡

遺構 (図32・33、図版6) 北調査区のほぼ中央、南西縁沿いで検出した遺構である。D 3-04グリッドを中心に位置する。確認面はIV層上面である。遺構の南西部分は、I次調査の折りに調査を行ない「第2号住居跡」として報告した遺構である。

平面形は、横幅の方が長い隅丸長方形で、主軸長は3.65m、横幅は4.3mである。主軸方向は、N-53°-Wである。

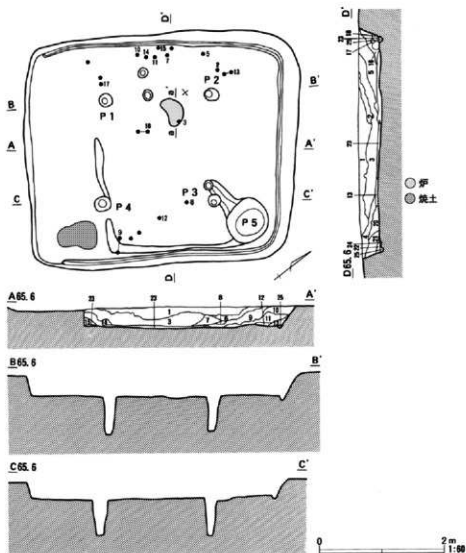
床面には高低、凹凸が見られるが、炉跡の周囲を中心に硬くしまっている。貼床かと思われる層を確認しているが、部分的である。南西壁を除いた壁際には、細い壁溝が設けられている。また、P 5とした貯蔵穴に発し、南東壁溝と併走した後、直角に折れP 1の手前まで延びる小溝を床面で検出した。小溝の幅は5~17cm、深さは深いところでも5cmに満たない。床面を最初に精査した時点では、小溝は、さらに屈折して北東へと延び、住居跡の入口側をコの字状に小さく囲む様子が観察できた。炉の手前の刃を形造っていた小溝は、極々浅く細かったため、図化の段階には見えなくなっていた。

炉跡は、P 1-P 2間よりやや入口側に寄った位置で検出した。床面とほぼ同レベルに炉床を設けた地床炉であり、炉床はよく焼けていた。また、炉跡の近辺からかなり広い範囲に広がる炭化物の薄膜状の層を検出している。

P 1~4は、主柱穴である。上端の形態はいずれも円形に近く、全体に先細り気味に掘り込まれている。P 1・3・4は、柱穴内に覆土のつまっていない空洞が見られ、空洞の底にねっとりした灰褐色土、あるいはシルトが溜まっていた。柱根部分のみが立ち腐れし、柱穴の上部が密閉された状態のまま保たれたためであろうか。P 5は貯蔵穴である。深さは57cm前後、炉跡側の上端にも浅く短い溝が連結している。覆土は粘性、しまりの強い暗褐色土、あるいは黒褐色土で、下層からかなり太い炭化材が出土している。

覆土は、25層に分けられた。壁際の覆土はやや細かく分層できるが、1~9層とした覆土は、総じてロームブロックの混入が顕著で、まとまりをなして流入した模様である。埋め戻された土であろう。

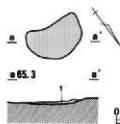
遺物 (図34、表15・16、図版18・19) 住居跡中央、奥壁付近から入口部にかけて、ややまとまって埴・高坏などを主とする土器が出土しているが、大半は床面から浮いた状態で、覆土の上層以下、床面直上層までかなりの高低差をもって出土している。1の坏は、他の土器に比べやや後出する可能性がある。



11号住居跡覆土

- 1層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、所々径10～50mm大のロームブロックを含む。
- 3層：暗褐色土層。1層土と同量のローム粒、径5～30mm大のロームブロックの混合土。強くしまっている。
- 4層：暗褐色土層。1層土を主に、ローム粒・ロームブロックを斑状に含む。全体に白みを帯び、粘性が強い。
- 5層：暗褐色土層。2層に近いが、ロームブロックが小さい。
- 6層：暗褐色土層。3層に近いが、ロームが少ない。
- 7層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ロームを均一に含む。3層よりロームブロックが少ない。
- 8層：赤褐色土層。焼土・炭化物の大ブロック。
- 9層：暗褐色土層。3層に近いが、ブロックが小さい。炭化物を少量含む。
- 10層：褐色土層。暗褐色土あるいは褐色土を主に、ローム粒を含む。水の影響か暗褐色土が白みを帯び、粘性が強い。
- 11層：褐色土層。10層土を主に、ローム粒・ロームブロックを斑状に多量に含む。
- 12層：暗褐色土層。11層に近いが、ロームブロックが少ない。
- 13層：褐色土層。11層に近いが、ロームブロックがさらに少ない。
- 14層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームブロックが多く含む。
- 15層：暗褐色土層。14層に近いが、ロームブロックが多い。
- 16層：暗褐色土層。1層に近いが、粘性が強い。
- 17層：褐色土層。ロームの大ブロック。
- 18層：暗褐色土層。16層に近いが、径10mm大のロームブロックを含む。
- 19層：暗褐色土層。4層に近いが、ロームブロックが多い。
- 20層：暗褐色土層。3層に近いが、ロームブロックが小さく、少ない。
- 21層：暗褐色土層。1層に近いが、径5～10mm大のロームブロックを含む。
- 22層：暗褐色土層。21層に近いが、ロームブロックが多い。
- 23層：暗褐色土層。暗褐色土とローム粒・ロームブロックの混合土。床面を覆う薄層であるが、一部は粘床の可能性もある。
- 24層：暗褐色土層。暗褐色土とロームの不均一な混合土。床面小溝覆土。
- 25層：褐色土層。24層に近いが、ロームが多い。

図32 11号住居跡平面図および断面図



11号住居跡が覆土

1層：暗赤褐色土。被熱赤化範囲。上面が97味。

図33 11号住居跡が跡平面図および断面図

表15 11号住居跡出土遺物観察表(1)

No	器種	法量(cm)	形態・成形手の特徴	調整手の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 環	口径 14.5 底径 — 器高 4.7	体部は腰やかに立ち上がり、口縁部は内彎して立ち上がる。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部へ底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部へ底部ナデ。	石英・白色粒 内外一明赤褐色	ほぼ完形。
2	土師器 鉢	口径 13.4 底径 4.9 器高 7.9	体部は腰に膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。底部は上げ底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後、上位・中位をナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部へ底部ヨコナデ・指面圧痕。	石英・白色粒 内一明赤褐色 外一橙色	一部欠損。
3	土師器 埴	口径 11.3 底径 — 器高 —	粘土練積み上げ成形。膨らみを持つ体部から、口縁部外反気味に開き、底部やや内彎する。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ・指面圧痕。	石英・白色粒 内一明赤褐色 外一橙色	上半部の2/3残存。
4	土師器 埴	口径 9.4 底径 — 器高 —	膨らみを持つ体部から、口縁部はわずかに内彎して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部上位ヘラナデ。	石英・白色粒 内外一明赤褐色	口縁へ体部上位残存。
5	土師器 埴	口径 8.7 底径 — 器高 8.1	体部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部へ底部ヘラケズリ後、上位ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ。下位へ底部ヘラナデ。	石英・白色粒 内外一橙色	完形。
6	土師器 埴	口径 10.4 底径 — 器高 8.4	体部は膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き、底部わずかに内彎する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ。下位へ底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、中位へ底部ヘラナデ。	石英・白色粒 内外一にぶい褐色	2/3。
7	土師器 埴	口径 10.1 底径 1.9 器高 9.7	体部は膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。底部は小さな上げ底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後、上位ナデ。内面一口縁部ヘラナデ、体部上位ナデ、中位へ底部指ナデ。	石英・白色粒 内外一橙色 外一にぶい褐色	一部欠損。
8	土師器 埴	口径 8.6 底径 2.6 器高 6.8	体部は膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き、底部わずかに内彎する。底部は上げ底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後、上位ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部へ底部ヘラナデ・ナデ。	石英・白色粒 内外一橙色	一部欠損。
9	土師器 埴	口径 9.4 底径 2.6 器高 7.4	体部は膨らみを持ち、口縁部はわずかに内彎して開く。底部は中や上げ底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後、上位・中位ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、中位へ底部指ナデ。	石英・白色粒 内一明赤褐色 外一にぶい赤褐色	ほぼ完形。
10	土師器 埴	口径 — 底径 2.7 器高 —	体部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に立ち上がる。底部は丸底気味の小さな平底。	外面一体部上位・中位ナデ、体部下位へ底部ヘラケズリ。内面一体部へ底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内一にぶい褐色 外一橙色	口縁部欠損。
11	土師器 高環	口径 19.0 底径 (14.6) 器高 —	環部下位に腰を持ち、口縁部は外反気味に立ち上がる。脚部は下位に膨らみを持ち、裾部広がる。	外面一口縁部ヨコナデ、環部下位へ脚部ナデ、裾部ヘラナデ。内面一口縁部ヨコナデ、環部下位ナデ、脚部上位・中位絞り目、下位ヘラナデ、裾部ヨコナデ。	白色粒・黒色粒 内一にぶい黄褐色 外一明赤褐色	3/4。
12	土師器 高環	口径 19.0 底径 13.1 器高 14.4	環部下位に強い腰を持ち、口縁部は外反気味に開く。脚部は中位以下に膨らみを持ち、裾部広がる。	外面一口縁部ヨコナデ、環部下位へ脚部ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、環部下位ナデ、脚部上位・中位絞り目、下位ヘラナデ、裾部ヨコナデ。	石英・チャート 内一にぶい黄褐色 外一明赤褐色	一部欠損。
13	土師器 高環	口径 20.0 底径 — 器高 —	環部下位に強い腰を持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、環部下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、環部下位ナデ。	白色粒・黒色粒 内外一にぶい褐色	環部3/4残存。

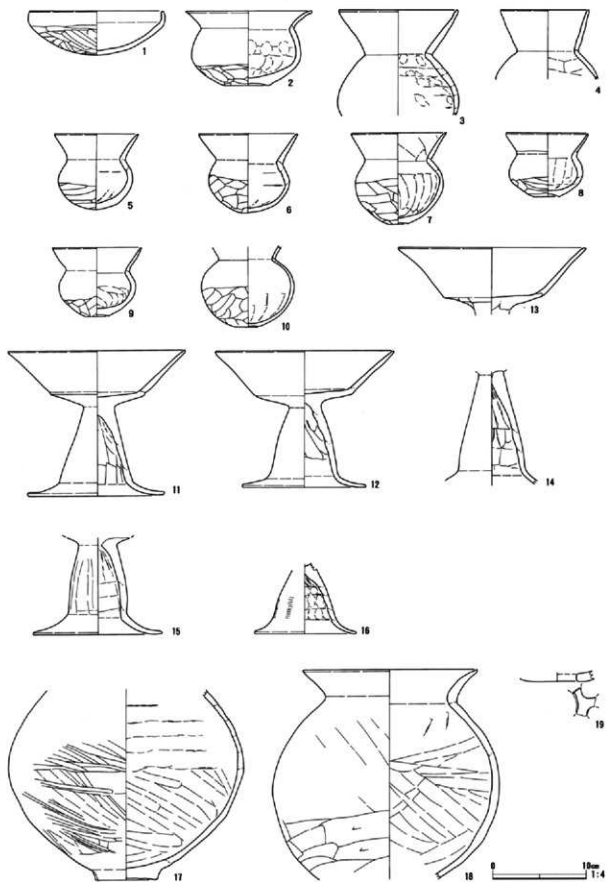


图34 11号住居跡出土遺物実測図

表16 11号住居跡出土遺物観察表(2)

No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
14	土器 高環	口径 — 底径 — 器高 —	下位に膨らみを持つ脚部。	外面一脚部ナデ。内面一脚部上位・中位紋り目、下位ヘラナデ。	石英・白色粒 内一明赤褐色 外一褐色	脚部を欠損する脚部。
15	土器 高環	口径 — 底径 13.7 器高 —	膨らみを持つ脚部。脚部は外反して広がる。上端に環部の装着孔。	外面一脚部ヘラケズリ後ナデ、脚部ココナデ。内面一脚部上位紋り目、下位ヘラナデ、脚部ココナデ。	石英・白色粒 内外一褐色	環部欠損。
16	土器 高環	口径 — 底径 (10.7) 器高 —	粘土紐巻き上げ成形。膨らみを持つ脚部。脚部広がる。	外面一脚部ナデ、脚部ココナデ、脚部中位～下位に爪形刺突を縦位5単位。内面一脚部紋り目、中位・下位ナデ・指頭丘痕、脚部ココナデ。	白色粒・黒色粒 内外一褐色	脚部3/4残存。
17	土器 壺	口径 — 底径 (6.4) 器高 —	粘土紐積み上げ整形。中位に膨らみを持つ脚部。	外面一脚部ヘラケズリ・ナデ後、粗雑なミダキ。内面一脚部～底部ヘラナデ・ナデ。	石英・赤褐色粒 内外一にふい赤褐色	脚部1/4残存。
18	土器 壺	口径 18.6 底径 — 器高 —	脚部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。	外面一口縁部ココナデ、脚部ヘラケズリ後、上位・中位ナデ。内面一口縁部ココナデ、脚部ヘラナデ。	石英・白色粒 内一明赤褐色 外一褐色	脚部下位～底部欠損。
19	土器 瓶	口径 — 底径 — 器高 —	底部に多孔。	小破片のための調整不明瞭。	石英・チャート 内外一にふい黄褐色	底部小破片。

12号住居跡

遺構 (図35～37、図版7) 南調査区の中央、北東縁沿い、C4-04・05グリッドを中心に位置する。確認面はI層上面である。いわゆる焼失住居である。

平面形は、微妙に胴の張る隅丸方形で、主軸長は5.56m、現存の横幅は4.4mである。横幅の推定値は5m前後で、主軸方向がやや長い形態となる。主軸方向は、N-43°-Wである。

床面はほぼ平坦で、比較的良好に硬化している。壁際には、壁溝が巡っている。

炉跡は、住居跡中央奥壁寄りの2箇所、やや入口側に寄った1箇所で見出した。いずれも地床炉で、炉1のみ床面を浅く掘りくぼめており、炉床が著しく焼けていた。なお、炭化物の薄膜状の層が、炉1のまわりから炉2を覆い周辺にまで広がっていた。この層は、床面に密着しており、調査時、上に被った土をきれいに剝ぐことができた。

P1～3は、支柱穴である。いずれも不整な円形で、P3のみやや深く掘り込まれている。

床面には、炭化材が散乱していた。南側P3の周囲には、棒状の炭化材が、炉2・3の、やや太い炭化材は、材の表面のみ炭化して残存したものである。焼土は、全体に分散して覆土に含まれるのみで、床面には、とくに集中する部分が見られなかった。

覆土は、29層に分けられた。全体に壁際は細かく分層できたが、住居跡中央は、大きなまとまりをなす8・10層などの土が一挙に流入したようである。埋め戻された可能性がある。

遺物 (図38、表17～19、図版19・20) 図化した遺物は皆、床面上、あるいは床面直上層出土である。9・11・14・19の埴・高環・壺は、炉1～3に取り巻かれた一角から、2・5・6・8・12・13・16～18は、南隅～南西壁の一带からまとまりをなし、分散する細かな炭化物とともに出土している。20の砥石は、入口部脇から床面よりやや浮いた状態で出土している。床面とその直上層から、完形あるいはそれに近い土器が多数出土しているにもかかわらず、それより上位の覆土中には、極少数の土器片を除けば、遺物をほとんど含まない。

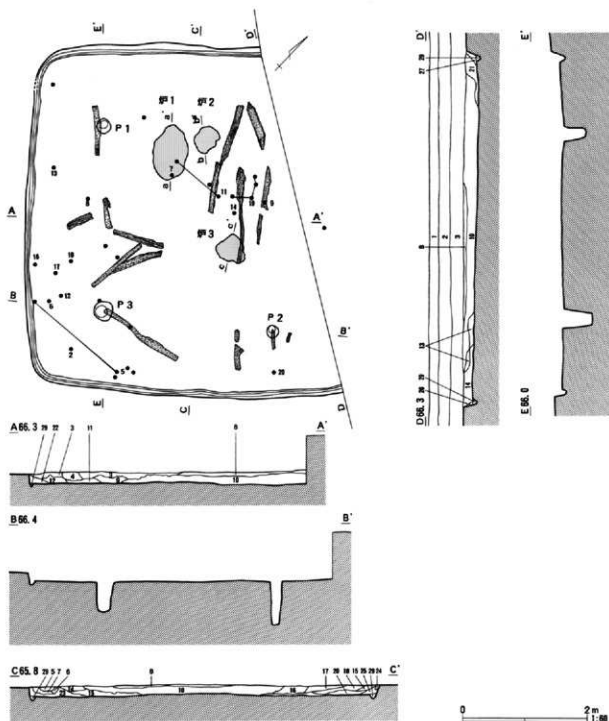


図35 12号住居跡平面図および断面図(1)

表17 12号住居跡出土遺物観察表(1)

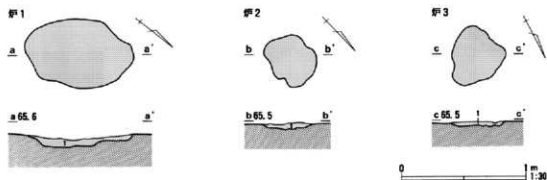
No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土節鉢	口径 12.2 底径 3.2 器高 6.2	体部は彎曲して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。底部は小さな平底。	外面一口縁～体部中位ナデ、体部下位ヘラケズリ。内面一口縁～体部中位ヨコナデ、体部下位～底部ヘラナデ。	石英・角閃石 内外一橙色	一部欠損。
2	土節埴	口径 9.0 底径 — 器高 7.6	体部は膨らみを持ち、口縁部はわずかに彎曲して開く。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ後、体部上位ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	石英・白色粒 内外一明赤褐色	3/4。

12号住居跡埋土

- 1層：暗褐色土～灰黄褐色土層。現耕作土からなる表土。
- 2層：灰黄褐色土層。現水田床土と思われるシルト質土。
- 3層：黒褐色土層。暗褐色土層を主に、ローム粒を含み、いわゆる浅間砂をかなり含む。シルト化し、鉄分が沈着している。
- 4層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒・ロームブロックを多量に含む。焼土が少ない。
- 5層：暗褐色土層。4層に近いが、ロームブロックの輪郭がはっきりせず斑状。5～7層は、焼土のない時期の新しい遺構埋土の可能性もある。
- 6層：暗褐色土層。5層に近いが、部分的にシルト化している。
- 7層：暗褐色土層。5層に近いが、ロームが少なく、黒みが強い。
- 8層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒・ロームブロックを多量に含む。焼土を含む。部分的にシルト化しており、灰色みを帯びる。この層まで、住居跡埋土より新しい埋土とも考えられる。
- 9層：暗褐色土層。8層に近いが、焼土が少ない。
- 10層：暗褐色土層。8層に近いが、焼土をほとんど含まない。
- 11層：暗褐色土層。10層に近いが、ロームブロックが激減する。
- 12層：褐色土層。ローム粒・ロームブロックを主に、暗褐色土を含む。
- 13層：暗褐色土層。10層に近いが、ロームブロックが多く、ま

- とまっている。
- 14層：黒褐色土層。10層に近いが、ロームブロックが激減し、さらにシルト化し、黒み増す。
- 15層：暗褐色土層。14層に近いが、さらにロームブロックが少ない。
- 16層：暗褐色土層。10層に近いが、ローム粒・ロームブロックが少ない。
- 17層：暗褐色土層。14層に近いが、焼土を含む。
- 18層：暗褐色土層。10層に近いが、焼土を若干含む。
- 19層：暗褐色土層。18層に近いが、焼土が多い。
- 20層：暗褐色土層。シルト化した暗褐色土。
- 21層：暗褐色土層。20層に近いが、シルト化がさらに著しい。
- 22層：黒褐色土層。シルト化した黒褐色土・暗褐色土を主に、ローム粒・ロームブロックを含む。
- 23層：褐色土層。10層に近いが、ロームが多い。ロームブロックの輪郭が不鮮明。
- 24層：褐色土層。ロームブロック。
- 25層：暗褐色土層。20層に近いが、シルト化が弱い。
- 26層：褐色土層。ロームを主に、上平わずかに焼土を含む。
- 27層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、ローム粒を少量含む。
- 28層：灰化材。
- 29層：褐色土層。暗褐色土とロームの不均質な混合土。壁埋土。

図36 12号住居跡平面図および断面図(2)



12号住居跡伊勢埋土

- 1層：暗赤褐色土層。被熱赤化範囲。上面が砂床。

図37 12号住居跡伊勢埋土平面図および断面図

表18 12号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
3	土器 罎	口径 9.2 底径 2.2 器高 7.9	体部は膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。底部は小さな平底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後、上位・中位ナデ。 内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ・ヘラナデ。	石英・白色粒 内一ふい橙色 外一橙色	4/5。
4	土器 罎	口径 9.4 底径 — 器高 9.0	体部は膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ後、上位・中位ナデ。 内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ・ヘラナデ。	石英・白色粒 内外一明赤褐色	4/5。
5	土器 罎	口径 8.5 底径 — 器高 —	体部は膨らみを持ち、口縁部はわずかに彎曲して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、下位残存部少なく不明瞭。 内面一口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	石英・白色粒 内外一明赤褐色	胴部中位以下の大半を欠損。

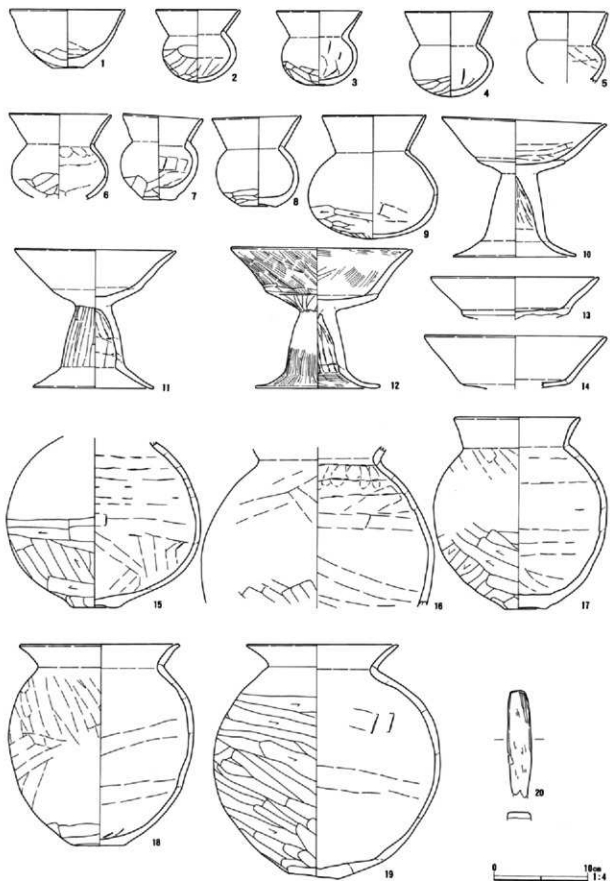


图38 12号住居跡出土遺物実測図

表19 12号住居跡出土遺物観察表(3)

No	器種	法量 (cm)	形態・成形手の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
6	土器 増	口径 10.8 底径 — 器高 —	体部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部ナデ、頸部に指頭圧痕。	片岩・チャート内一ふいふ褐色 外一明赤褐色	1/2。
7	土器 増	口径 8.6 底径 3.2 器高 9.2	体部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。底部は平底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位・中位ナデ、下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部上位ヘラナデ、下位〜底部指ナデ。	石英・白色粒内一明赤褐色 外一褐色	一部欠損。
8	土器 増	口径 9.5 底径 3.8 器高 9.6	体部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。底部は上げ底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位・中位ナデ、体部下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部〜底部ヘラナデ。	石英・白色粒内一明赤褐色 外一ふい褐色	ほぼ完形。
9	土器 増	口径 11.0 底径 — 器高 13.1	体部は横に膨らみ、口縁部は直線的に開く。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部〜底部ヘラケズリ後、体部上位・中位ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部〜底部ヘラナデ。	粗砂粒・チャート内一明赤褐色 外一褐色	4/5。
10	土器 高 環	口径 17.6 底径 13.0 器高 15.0	環部下位に横を持つ。口縁部は彎曲して立ち上がり、頸部はわずかに外反する。脚部はわずかに膨らみ、裾部広がる。	外面一口縁部ヨコナデ、環部下位〜脚部ナデ、裾部ヨコナデ。内面一口縁部上位ヨコナデ、下位〜環底部ナデ、脚部上位・中位絞り目、下位ヘラナデ、裾部ヨコナデ。	粗砂粒・チャート内一褐色 外一ふい褐色	一部欠損。
11	土器 高 環	口径 17.0 底径 12.8 器高 14.8	環部下位にわずかな横を持ち、口縁部は外反気味に開く。脚部弱い膨らみを持ち、裾部広がる。	外面一口縁部ヨコナデ、環部下位ナデ、脚部ヘラケズリ後ナデ、裾部ヨコナデ。内面一口縁部ヨコナデ、環底部ナデ、脚部上位絞り目、下位ヘラナデ、裾部ヨコナデ。	粗砂粒・チャート内一褐色 外一褐色	一部欠損。
12	土器 高 環	口径 19.2 底径 13.1 器高 10.2	環部下位に横を持ち、口縁部は外反して開く。脚部わずかに膨らみ、裾部広がる。	外面一口縁部ハケ目後弱いヨコナデ、環部下位ヘラケズリ、脚部〜裾部ハケ目後、脚部上位ナデ。内面一口縁部ハケ目後ナデ、環底部ナデ、脚部絞り目、裾部ハケ目後ヨコナデ。	石英・チャート内一ふい褐色 外一褐色	一部欠損。
13	土器 高 環	口径 18.0 底径 — 器高 —	環部下位に横を持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ。内面一口縁部ヨコナデ、環底部ナデ。	石英・チャート内一褐色 外一明赤褐色	環部下位以下を欠損。
14	土器 高 環	口径 (19.5) 底径 — 器高 —	環部下位にわずかな横を持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、環部下位ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、環底部ナデ。	石英・チャート内一褐色 外一褐色	環部1/3残存。
15	土器 甕	口径 — 底径 5.5 器高 —	粘土懸積み上げ成形。膨らみを持つ胴部。	外面一胴部上位ナデ、下位ヘラケズリ。内面一胴部〜底部ヘラナデ。	石英・白色粒内一褐色	口縁部欠損。
16	土器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	粘土懸積み上げ成形。膨らみを持つ胴部。	外面一胴部ヘラケズリ後、上位・中位をナデ。内面一胴部ヘラナデ、上位に指頭圧痕。	石英・チャート内一褐色 外一褐色	口縁部・胴部下位を欠損。
17	土器 甕	口径 13.6 底径 4.5 器高 20.4	粘土懸積み上げ成形。胴部は中に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後、上位・中位ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部〜底部ヘラナデ。	石英・チャート内一ふい褐色 外一黒褐色	4/5。
18	土器 甕	口径 17.1 底径 5.5 器高 21.5	胴部は上位に緩やかな膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部〜底部ヘラナデ。	石英・白色粒内一褐色 外一褐色	一部欠損。
19	土器 甕	口径 16.3 底径 5.2 器高 24.9	胴部は中に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後、上位をナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部〜底部ヘラナデ。	チャート・白色粒内一明赤褐色 外一黒褐色	4/5。
No	種類	器種	法 量 (cm・g)		備 考	
20	石製品	不 明	残存長: 11.3 幅: 2.5 残存厚: 0.7 重さ: 36.9 滑石製 明オリブ灰色		裏面は刻線。	

(2) 土坑

検出した土坑は、1号土坑1基である。1号土坑は、当初住居跡と考え調査を行なった遺構である。掘り方部分のみ残存する住居跡の残欠と見ることもできないではないが、遺構の南東隅と思われる掘り込みの一部が検出できたのみで輪郭がとらえられないこと、床面らしき面が見られないこと、住居跡の付属施設とは考えにくい土坑様の掘り込みを伴うことなどから、一応全体として土坑の一種として扱うこととした。

1号土坑

遺構 (図39) 北調査区の東半、北寄り、D2-19グリッドを中心に位置する遺構であり、確認面は、IV層上面である。北東側を旧河道に、西側を7号住居跡に壊されている。また、2号溝を切っている可能性がある。

平面形、規模ともに不明であり、ただ南東隅が丸みをもって屈曲することしか判らない。確認した範囲の中央には、最大径1.32m、深さ13cm前後の不整形の掘り込みがみとめられる。掘り込みの覆土下層である3層は、焼土・炭化物を多量に含み、底面に張り付く様にして破砕され細片化した土器片が敷き詰められたような状態で出土している。また底面の一部は被熱赤化していた。

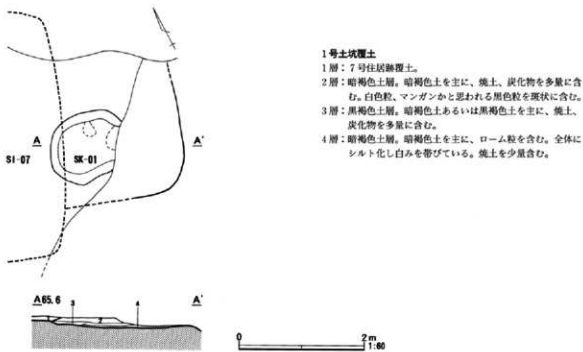


図39 1号土坑平面図および断面図

遺物 (図40、表20、図版20) 1号土坑の底面に張り付いて出土した多数の細片は、同一個体の壺と思われるが、被熱により劣化しており、復原できなかった。復原・図化できたのは、高坏1点のみである。

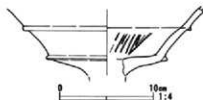


表20 1号土坑出土遺物察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考	
1	土師器 高環	口径 底径 器高	— — —	口縁部はやや褶曲して開く。下位と中位に2条の突帯を巡らせる。	外面一帯周覧れており不鮮明。内面一口縁部ココナテ・縦位ミガキ、環底部ナデ。	石英・白色粒 内一い黄褐色 外一明赤褐色	環部1/3残存。

(3) 焼土跡

焼土跡とした遺構は2基で、住居跡跡、あるいは部分的に住居跡と重なった状態で検出した遺構である。住居跡の炉跡の残骸と見ることもできるが、床面や柱穴と思われるピットが検出できなかったため、ここに別途記載する。

1号焼土跡

遺構(図41) 北調査区の中央、南西寄り、D3-33・34グリッドを中心に検出した遺構である。

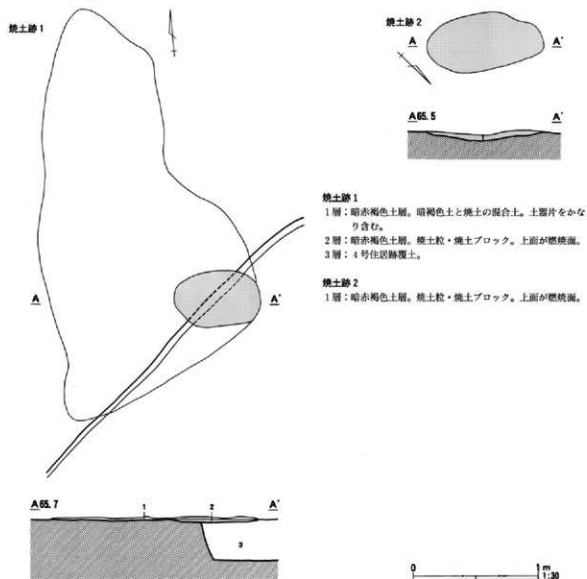


図41 1・2号焼土跡平面図および断面図

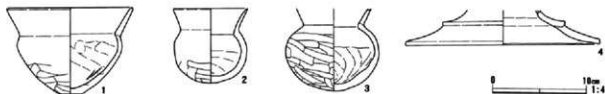


図42 1号焼土跡出土遺物実測図

表21 1号焼土跡出土遺物観察表

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器鉢	口径 13.2 底径 2.4 器高 9.2	体部上位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に大きく開く。底部は小さな平底。	外面—口縁部ココナデ、体部ヘラケズリ後、上位をナデ。内面—口縁部ココナデ、体部へ底部ヘラナデ、上位に指頭圧痕。	白色粒・黒色粒 内外—明赤褐色	2/3。
2	土師器甕	口径 (7.9) 底径 1.5 器高 7.9	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。底部は小さな平底。	外面—口縁部ココナデ、体部ヘラケズリ後、上位をナデ。内面—口縁部ココナデ、体部へ底部指ナデ。	石英・白色粒 内—ふい褐色 外—明赤褐色	4/5。
3	土師器甕	口径 — 底径 — 器高 —	体部は膨らみを持ち、口縁部は直線的に開き始める。底部は丸底。	外面—口縁部ココナデ、体部へ底部ヘラケズリ。内面—口縁部ココナデ、体部へ底部指ナデ。	石英・白色粒 内—ふい褐色 外—明赤褐色	口縁部の大半を欠損。
4	土師器高坏	口径 — 底径 — 器高 —	裾部は中位に段を有し大きく開く。	外面—裾部ココナデ。内面—裾部ココナデ。	石英・白色粒 内外—橙褐色	裾部2/3残存。

表土剥ぎの段階に、本遺構を中心に土器片などがややまとまって出土したため、この周辺の表土を多少残したまま、あらためて精査した遺構である。したがって、確認面は、IV層上面、あるいはそれより多少上の層中である。住居跡の炉跡周辺のみ残存したものと見てよいであろう。4号住居跡と重複しており、本遺構の方が新しい。

おおむね南北6.4m前後、東西3.4m前後の縦長不定形の範囲内に、焼土と土器片とがかなり密に、同じような高さで分布していた。この分布範囲の東寄りの一角に、焼土の濃集する部分がみとめられた。軽微ではあるが被熱赤化しているため、燃焼面と考えた。全体に断面観察したところ、焼土・土器片の分布する範囲は、焼土が多量に混入する薄層が広がるのみで、掘り込みはほとんど見られず、燃焼面に関しても、赤化はわずかな深さにとどまるようであった。

遺物 (図42、表21、図版20) 図化した遺物は、本遺構の範囲内に破片の状態で散らばっていた土器である。

2号焼土跡

遺構 (図41) 北調査区の中央、D2—19グリッドで検出した遺構である。確認面は、IV層上面である。

楕円形に近い平面形の浅く掘りくぼめられた燃焼面である。形態的にも住居跡の炉跡に似ているため、対応するピットを探すべく周辺を精査したが、見つけることができなかった。また、床面らしき面は、周囲にも一切見られない。燃焼面は比較的よく焼けており、断面観察でも、燃焼面以下が明瞭に被熱赤化している。本遺構に伴う遺物は、検出できなかった。

(4) 溝と旧河道

住居跡などの遺構の他に、2条の溝と旧河道の調査を行なった。溝と河道とは、調査範囲の北東部で合流しており、ある時点で溝と河道とがそれぞれ連結して、雨水などの流入、流出を繰り返した模様である。なお、旧河道については、本来別節を設けて記載すべきであろうが、集落跡と同時期の多量の遺物を包含し、また、とくに1号溝との関係が問題になることもあり、本項で溝とともに記載することにしたい。

1号溝

遺構 (図43～45、図版8・9) 北調査区の東半、E2～E4グリッドで検出した遺構である。自然流路である可能性もないではないが、土坑、ピットが多数うたれるなど種々の造作が加えられていることは間違いなく、人的営力が強く及んでいる点から、溝と呼称した。確認面は、IV層上面である。旧河道を流路とする新しい段階の河道に切られ、2号溝を切っている。

調査区の北東縁から南西縁へとほぼ南北に、微妙にうねりながら走る溝である。上端の幅は、北端で2.25m、中程の最も幅広の部分で2.89m、南端の最も細くなった部分で1.35mである。深さは、北端で50cm、南端で27cm、土層断面図を取った部分での溝底の標高は、A-A' (図43:土層断面) で64.64m、B-B'で64.79m、C-C'で64.63m、D-D'で64.87mである。溝底にかなり高低があるが、全体としては、やはり南から北へと水が流れたと見てよいであろう。

断面形は、北半がおおむねU字形、南半ではV字形に近く、所々深さを違えて掘り込まれている。北半西溝壁、真中あたりの東溝壁が弱い段をもっているのは、掘り直しの跡と見るのが自然であろうが、土層断面では、掘り直しなど溝を改変した痕跡は明瞭ではない。

溝底、溝壁では、4基の土坑(図43:1～4)、多数のピットを検出した。溝内土坑1～3は、平面形がやや不整な楕円形で、断面形はU字形に近い。肩側での深さは、1が33cm、2が32cm、3が50cmである。覆土は、いずれも黒褐色土とロームが不均質に混じる土で、1・3の溝底付近からは、埴などの土器がややまとまって出土している。4は菱形に近い形態の土坑で、時期的に新しい遺構の可能性もある。

図45は、南端近くの溝底で検出した焼土・炭化物が密集する部分である。重なり合った棒状礫と40cmくらいの平たい小判形の礫と円礫(同図:S)を中心にして、それらの礫を覆い、さらに周辺にまで、焼土・炭化物の薄層が広がっていた。密集範囲の下の溝底、周囲の溝壁には、とくに被熱した跡は見られなかったが、焼土・炭化物が混交せず層をなし堆積していることなどからすれば、ただ焼土や炭化物をまとめて溝内に捨てた跡とも言い切れないようである。あるいは、溝底がある程度埋まった段階に、この場で火を焚いたため、溝壁や溝底に被熱した痕跡が見られないのかもしれない。密集範囲付近では、溝の上下を問わずかなりの量の土器が出土している。

1号溝の覆土は、場所毎でかなり異なるが、全体に多少シルト化した暗褐色土を主とし、溝底に近づくにつれ、砂礫が多く含まれるようになる。

遺物 (図46～50、表22～28、図版21～23) 小破片から完形に近い土器にいたる様々な残存率の多量の土器が、溝全体から満遍なく、奇妙なほど分散して出土している。なお、ある程度のおおきさの土器片に限り測点記録して取り上げたが、図46では、密集度がとくに著しい部分に関しては、網かけで

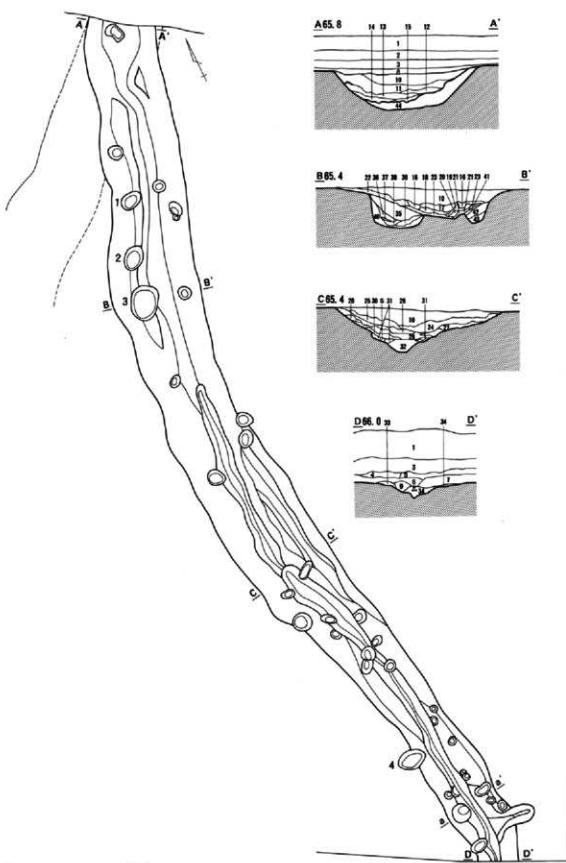


図43 1号溝平面図および断面図(1)

1号溝壁土

- 1層：暗褐色～灰黄褐色土層。現耕作土の表土。
- 2層：黒褐色土層。旧耕作土のシルト化した黒褐色土。
- 3層：にぶい黄褐色土層。上位の旧耕作土に伴うシルト質土の床土。
- 4層：黒褐色土層。砂あるいは軽石の混入する黒褐色土層。粘性がない。2層以前の耕作土か。
- 5層：黒褐色土層。4層に近いが、焼土および炭化物を少量含む。
- 6層：灰黄褐色土層。シルト質土。4・5層に伴う床土か。この層以下土器を含む。
- 7層：黒褐色土層。5層に近いが、砂粒を若干含む。鉄分が沈着している。
- 8層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、マンガング粒かと思われる黒色粒を点々と含み、いわゆる浅間砂を団塊状、雲状に含む。乾くと細い白色の帯に見える。鉄分が沈着している。
- 9層：暗褐色土層。6層に近いが、鉄分の沈着が顕著。いわゆる浅間砂を含む。
- 10層：暗褐色土層。8層に近いが、黒みがややあり、シルト化する。所々薄い砂層が挟在する。鉄分が斑状に沈着する。
- 11層：暗褐色土層。10層に近いが、シルト化さらに進む。所々砂・小角礫層が挟在する。
- 12層：暗褐色土・砂礫層。11層と一連の砂・小角礫密集部分と考えてよい。
- 13層：黒褐色土層。10層に近いが、黒みが増し、粘性も強くなる。所々砂・小角礫層が挟在する。
- 14層：黒褐色土層。13層に近いが、砂・小角礫が多い。黒褐色土の細かな結が入る。
- 15層：黒褐色土・砂礫層。14層と一連の砂・小角礫密集部分と考えてよい。
- 16層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、鉄分が少量沈着する。軽石もしくは砂を少量含む。
- 17層：暗褐色砂礫層。砂・小角礫を主に、暗褐色土を少量含む。
- 18層：黒褐色土層。16層に近いが、ローム粒、鉄分を多く含む。
- 19層：灰黄褐色土層。灰黄褐色のシルト質土を主に、ローム粒を含む。鉄分がかなり沈着している。

- 20層：暗褐色土層。19層に近いが、砂礫、鉄分を多く含む。
- 21層：黒褐色土層。純層に近い粘性の強い黒褐色土。
- 22層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、にぶい黄褐色土のロームブロックを多く含む。
- 23層：にぶい黄褐色土層。ロームを主に、褐色土を斑状に含む。
- 24層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、所々砂層が挟在する。
- 25層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、径2～5mm大のロームブロックを斑状に多量に含む。黒褐色土も斑状に含む。
- 26層：にぶい黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を少量含む。
- 27層：暗褐色土層。砂・小礫を主に、径40mm大の焼土ブロックを若干含む。鉄分の沈着した薄層が挟在する。
- 28層：灰黄褐色土層。16層に近いが、ロームがシルト化している。暗褐色土を斑状に含む。
- 29層：黒褐色土層。黒褐色土層を主に、ローム粒を若干含む。土器片もかなり含む。
- 30層：黒褐色土層。29層に近いが、シルト化している。
- 31層：灰黄褐色土層。ロームを主に、黒褐色土を微量含む。
- 32層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、砂礫層、鉄分の薄層が互層をなす。
- 33層：暗褐色土層。暗褐色土とロームブロック、鉄分が渾然と混じり合う。
- 34層：黒褐色土層。砂礫を主に、黒褐色土を含む。径20mm大の礫が多く、土器片も多量に含む。
- 35層：暗褐色土層。暗褐色土とロームの不均質な混合物。
- 36層：暗褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を含む。
- 37層：黒褐色砂礫層。砂礫を主に、黒褐色土を含む。
- 38層：黒褐色土層。純層に近い粘性の強い黒褐色土。
- 39層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、シルト化した灰黄褐色のロームブロックを含む。
- 40層：にぶい褐色土。ロームを主に、暗褐色土を少量含む。
- 41層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、焼土、炭化物を少量含む。
- 42層：黒褐色土層。41層に近いが、焼土が多い。
- 43層：黒褐色土層。黒褐色土を主に、ローム粒を含む。
- 44層：にぶい黄褐色土層。帯水した再堆積のロームと思われるシルト質土。鉄分が細かな縦方向の脈状に分かれ沈着する。

図44 1号溝平面図および断面図(2)

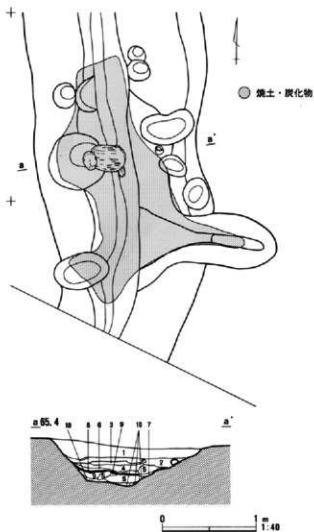
示している。

いずれの溝内土坑からも土器片がかなりまとまって出土している。10は溝内土坑3の坑底付近から出土した埴である。図45に示した焼土・炭化物密集範囲では、埴(12・16・18・19・20・26)、高坏(33)、壺(44)、甕(50)が出土しているが、総じて焼土・炭化物の層より上位から出土している。

29の装飾性の高い高坏は、北壁寄りの溝壁から、38の小型太頸の特異な器形、調整の壺は、中央付近の最下層から出土している。46の大型壺は、主に南寄りの中・下層から多数の大破片となって出土している。残存率の低い破片から図上復元した。55の特殊な形態の坏は、北壁近くの溝底から出土している。

57・58の勾玉は、ほぼ中央の、溝底からかなり浮いた位置で検出した。とくに勾玉にかかわる掘り込みなどは見られないようであった。

なお、図化し得ていないが、S字甕の小破片が、本遺構全体からかなりの数出土している。それらS字甕の口縁部片を見る限り、S字甕の最終段階を前後する時期のものが主になるようである。



1号溝焼土・炭化物密集範囲

- 1層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、マンガン粒かと思われる黒色粒を点々と含む。所々薄い砂層が挟在する。全体にシルト化し、鉄分が比着している。
- 2層：黒褐色土層。シルト化し白みを帯びた黒褐色土層を主に、ローム粒、砂礫を含む。鉄分が若干比着している。
- 3層：黒褐色砂礫層。砂、径10～20mm大の小礫を主に、黒褐色土を含む。土器をかなり含む。
- 4層：黒褐色土層。2層に近いが、鉄分が多い。
- 5層：暗褐色砂礫層。砂礫を主に、焼土・炭化物が不規則に挟在する。
- 6層：黒色炭化物層。純層に近い炭化物の密集層。焼土を所々含む。
- 7層：赤褐色土層。焼土と砂の混合層。5層の一部と考えてもよい。
- 8層：赤褐色土層。焼土の薄層。湿水したためか粘性があり、ペースト状。
- 9層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、シルト化したローム、焼土、炭化物が不均質に混じる。
- 10層：におい黄褐色土層。シルト化したロームを主に、暗褐色土を斑状に少量含む。

図45 1号溝焼土・炭化物密集範囲平面図および断面図

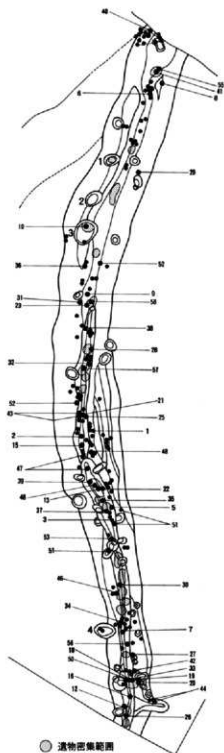


図46 1号溝遺物分布図

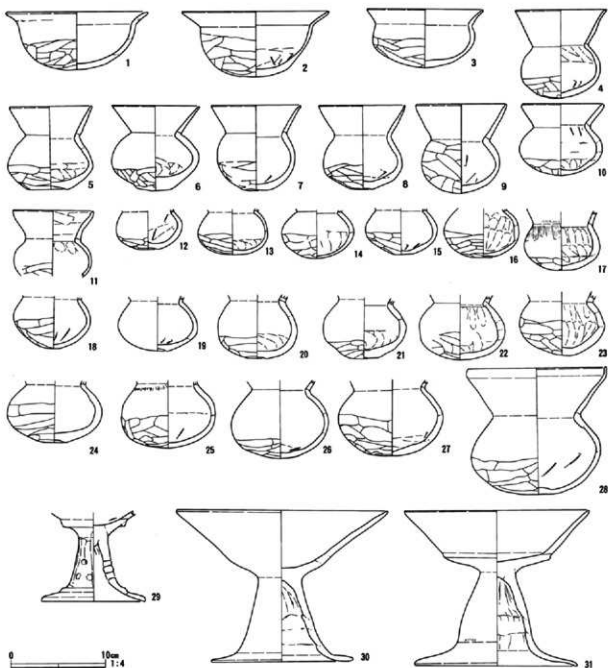


図47 1号溝出土遺物実測図(1)

表22 1号溝出土遺物観察表(1)

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土器鉢	口径 15.1 底径 — 器高 6.2	体部は彎曲して立ち上がり、口縁部は短く外反する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、体部中位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	片岩・チャート 内外一明赤褐色	一部欠損。
2	土器鉢	口径 15.8 底径 — 器高 7.0	体部は彎曲して立ち上がり、口縁部は外傾する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部上位ヨコナデ、体部下位～底部ヘラナデ。	石英・チャート 内一黒色 外一ぶい黄褐色	4/5。 内面一黒色処 埋。
3	土器鉢	口径 11.4 底径 — 器高 6.1	体部浅めで上位に膨らみを持つ。口縁部は短く外反する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ後、体部上位ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・白色粒 内外一褐色	一部欠損。

表23 1号溝出土遺物観察表(2)

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
4	土師器 甗	口径 (9.6) 底径 — 器高 9.4	体部は中位に膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き、端部わずかに外反する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ後、体部上位・中位ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	微砂粒・白色粒 内一褐色 外一明赤褐色	口縁部の4/5を欠損。
5	土師器 甗	口径 8.6 底径 3.5 器高 8.9	体部は中位下側に膨らみを持ち、口縁部はわずかに彎曲して開く。底部は上げ底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、下位～底部指ナデ。	粗砂粒・白色粒 内外一褐色	4/5。
6	土師器 甗	口径 9.2 底径 4.0 器高 8.2	体部は中位に膨らみを持つ。口縁部は直線的に開く。底部は厚く丸みのある台状。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位・中位ナデ、下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部指ナデ。	石英・白色粒 内外一褐色	4/5。
7	土師器 甗	口径 9.5 底径 2.7 器高 9.1	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。体部は小さな平底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内一明赤褐色 外一褐色	3/4。
8	土師器 甗	口径 9.2 底径 1.3 器高 9.0	体部は中位に膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き、端部やや内彎する。底部は小さな上げ底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外一褐色	4/5。
9	土師器 甗	口径 9.7 底径 — 器高 9.6	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部はわずかに彎曲して開く。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	石英・チャート 内外一明赤褐色	一部欠損。
10	土師器 甗	口径 (8.8) 底径 — 器高 7.7	体部は中位に膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き、端部わずかに内彎する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位・中位ナデ、下位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部上位・中位ヘラナデ、下位～底部指ナデ。	白色粒・黒色粒 内一明赤褐色 外一褐色	4/5。
11	土師器 甗	口径 (8.6) 底径 — 器高 —	体部は中位に膨らみを持つ。口縁部は外反して立ち上がり、上位は内彎する。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヘラナデ、体部ナデ、頸部に指頭圧痕。	石英・白色粒 内一にぶい黄褐色 外一明赤褐色	1/3。
12	土師器 甗	口径 — 底径 2.0 器高 2.0	膨らみを持つ体部。底部は小さな上げ底。	外面一体部上位・中位ナデ、下位ヘラケズリ。内面一体部～底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外一明赤褐色	口縁部欠損。
13	土師器 甗	口径 — 底径 — 器高 —	膨らみを持つ体部。底部は丸底。	外面一体部上位ナデ、下位～底部ヘラケズリ。内面一体部上位ナデ、下位～底部指ナデ。	白色粒・黒色粒 内一明褐色 外一褐色	口縁部欠損。
14	土師器 甗	口径 — 底径 — 器高 —	膨らみを持つ体部。底部は丸底。	外面一体部上位ナデ、下位～底部ヘラケズリ。内面一体部上位ナデ、下位～底部指ナデ。	白色粒・黒色粒 内外一赤褐色	口縁部欠損。
15	土師器 甗	口径 — 底径 1.3 器高 —	膨らみを持つ体部。底部は丸底。	外面一体部上位ナデ、下位ヘラケズリ。内面一体部～底部ヘラナデ。	石英・白色粒 内一明赤褐色 外一褐色	口縁部欠損。
16	土師器 甗	口径 — 底径 2.6 器高 —	膨らみを持つ体部。底部は小さく、上げ底気味。	外面一体部上位ナデ、下位ヘラケズリ。内面一体部～底部指ナデ、指頭圧痕。	石英・チャート 内一にぶい褐色 外一褐色	口縁部欠損。
17	土師器 甗	口径 — 底径 2.0 器高 —	膨らみを持つ体部。口縁部は直線的に立ち上がる。底部は平底気味。	外面一体部上位ヘラ目後ナデ、中位ナデ、下位～底部ヘラケズリ。内面一体部～底部指ナデ。	石英・白色粒 内外一明赤褐色	口縁部上位欠損。
18	土師器 甗	口径 — 底径 1.7 器高 —	中位に膨らみを持つ体部。底部は小さな平底。	外面一体部上位ナデ、中位～底部ヘラケズリ。内面一体部～底部ヘラナデ。	白色粒・角閃石 内外一明赤褐色	体部～底部2/3残存。
19	土師器 甗	口径 — 底径 1.8 器高 —	中位に膨らみを持つ体部。底部は小さな上げ底。	外面一体部ヘラケズリ後ナデ。内面一体部～底部ヘラナデ。	石英・白色粒 内一褐色 外一明赤褐色	体部～底部3/4残存。

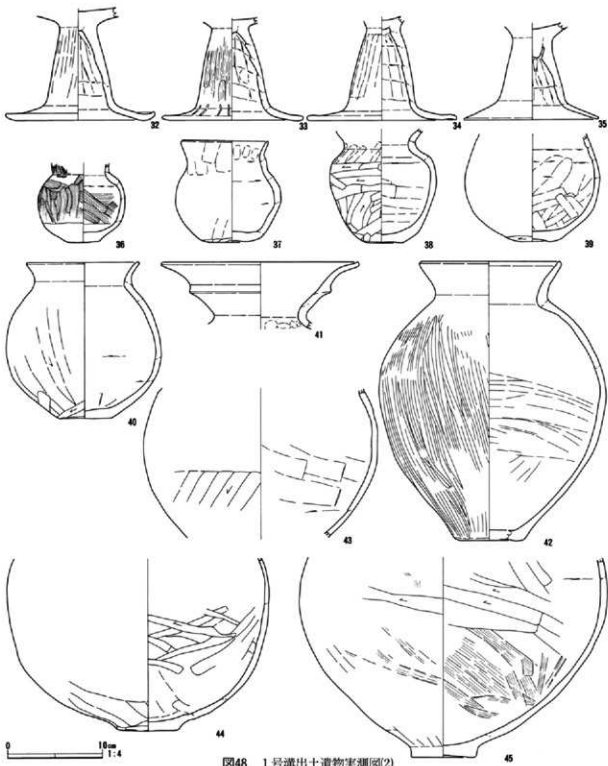


図46 1号溝出土遺物実測図(2)

表24 1号溝出土遺物観察表(3)

No	器種	流量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考	
20	土 罎 器 埴	口径 底径 器高	— 2.0 —	翻らみを持つ体部。底部は小さな 上げ底。	外面一体系上位・中位ナダ、下位 ヘラケズリ。内面一体系～底部指 ナダ。	石英・白色粒 内外一明赤褐色	口縁部欠損。
21	土 罎 器 埴	口径 底径 器高	— 2.0 —	中位に翻らみを持つ体部。底部は 小さな平底で上げ底気味。	外面一体系上位・中位ナダ、下位 ヘラケズリ。内面一体系～底部指 ナダ。	石英・白色粒 内一にふい赤褐 色 外一明赤褐 色	口縁部欠損。
22	土 罎 器 埴	口径 底径 器高	— — —	翻らみを持つ体部。底部は丸底。	外面一体系上位ナダ、下位～底部 ヘラケズリ。内面一体系～底部指 ナダ。	石英・白色粒 内外一にふい褐 色	体部～底部 1/2残存。

表25 1号溝出土遺物観察表(4)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
23	土師器 甗	口径 — 底径 — 器高 —	膨らみを持つ体部。底部は丸底気味。	外面—体部上位ナデ、中位～底部ヘラケズリ。内面—体部～底部指ナデ。	石英・白色粒 内—褐色色 外— 内—ぶい黄褐色	口縁部欠損。
24	土師器 甗	口径 — 底径 2.2 器高 —	膨らみを持つ体部。底部は上げ底。	外面—体部上位ナデ、中位～下位ヘラケズリ。内面—体部～底部ナデ。	石英・白色粒 内—ぶい黄褐色 外— 褐色色	口縁部欠損。
25	土師器 甗	口径 — 底径 — 器高 —	膨らみを持つ体部。底部は丸底。	外面—体部上位ナデ、下位ヘラケズリ。腹部にハケ目残る。内面—体部～底部ヘラケナデ。	石英・白色粒 内外—明赤褐色	口縁部欠損。
26	土師器 甗	口径 — 底径 — 器高 —	粘土継ぎ上げ成形。膨らみを持つ体部。口縁部は直線的に立ち上がる。底部は丸底。	外面—体部上位・中位ナデ、下位～底部ヘラケズリ。内面—体部上位ナデ、下位～底部ヘラケナデ。	石英・白色粒 内外—褐色色	口縁部欠損。
27	土師器 甗	口径 — 底径 — 器高 —	中位に膨らみを持つ体部。底部は丸底。	外面—体部上位ナデ、中位～底部ヘラケズリ。内面—体部～底部ヘラケナデ。	石英・チャート 内外—褐色色	口縁部欠損。
28	土師器 甗	口径 (14.8) 底径 — 器高 13.4	中位が横に張る体部。口縁部は外反気味に開き、端部は内彎して立ち上がる。底部は丸底。	外面—口縁部ココナデ、体部上位ナデ、下位～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ココナデ、体部～底部ヘラケナデ。	石英・白色粒 内—明赤褐色 外—ぶい赤褐色	3/4。
29	土師器 坏	口径 — 底径 (11.0) 器高 —	坏部下位に脚状の突起を巡らせる。脚部に径5mm前後の孔を2段に多数穿つ。脚部下位に段を有し、裾部広がる。	外面—坏部下位ナデ、脚部ヘラケズリ後ナデ、裾部ココナデ。 内面—脚部上位紋目、中位～裾部は器面荒れており不鮮明。	石英・白色粒 内外—ぶい褐色	坏部下位～裾部 1/2残存。
30	土師器 坏	口径 21.8 底径 15.2 器高 16.3	坏部下位に明瞭な稜を持たず、口縁部は外反気味に開く。脚部やや外反して開き、裾部広がる。	外面—口縁部ココナデ、坏部下位～脚部ナデ、裾部ココナデ。 内面—口縁部ココナデ、坏底部ナデ、脚部上位紋目、下位ヘラケナデ、裾部ココナデ。	粗砂粒・チャート 内外—明赤褐色	4/5。
31	土師器 坏	口径 19.7 底径 (17.3) 器高 16.7	坏部下位に稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。脚部は下位に膨らみを持ち、裾部広がる。	外面—口縁部ココナデ、坏部下位～脚部ナデ、裾部ココナデ。 内面—口縁部ココナデ、坏底部ナデ、脚部上位紋目、下位ヘラケナデ、裾部ココナデ。	白色粒・角閃石 内—明褐色 外—褐色色	3/4。
32	土師器 坏	口径 — 底径 (15.7) 器高 —	脚部はわずかな膨らみを持つ。裾部は広がり、端部は反り上がる。	外面—脚部ヘラケズリ後ナデ、裾部ココナデ。内面—脚部上位・中位紋目、下位ヘラケナデ、裾部ココナデ。	石英・白色粒 内外—明赤褐色	脚部3/4残存。
33	土師器 坏	口径 — 底径 15.1 器高 —	脚部はわずかな膨らみを持ち、裾部は大きく広がる。	外面—脚部木口状工具ナデ、裾部ココナデ・放射状ミガネ。内面—脚部紋目、下位をヘラケナデ、裾部ココナデ。	石英・白色粒 内—褐色色 外—ぶい褐色	坏部欠損。
34	土師器 坏	口径 — 底径 15.9 器高 —	脚部はわずかな膨らみを持ち、裾部は反って大きく開き、端部は彎曲する。	外面—脚部ヘラケズリ後ナデ、裾部ココナデ。内面—脚部ヘラケナデ。上位に紋目、裾部ココナデ。	白色粒・角閃石 内—赤褐色 外—ぶい褐色	坏部欠損。
35	土師器 坏	口径 — 底径 14.4 器高 —	脚部はわずかな膨らみを持ち、裾部は広がる。	外面—脚部ナデ、裾部ココナデ。 内面—脚部紋目、裾部ココナデ。	白色粒・褐色粒 内外—ぶい褐色	坏部欠損。
36	土師器 小型壺	口径 — 底径 3.8 器高 —	胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は直立気味に立ち上がりはじめる。	外面—胴部上位・中位ハケ目、下位ナデ。内面—胴部上位・中位ハケ目、下位～底部ナデ。	石英・チャート 内外—黒褐色	口縁部欠損。
37	土師器 小型壺	口径 9.2 底径 4.6 器高 10.9	粗雑な成・整形で器形歪む。胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面—口縁～体部ヘラケナデ・ナデ、体部下端～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ナデ・指頭圧痕。体部～底部ナデ。	チャート・白色粒 内—灰黄褐色 外—赤褐色	2/3。
38	土師器 小型壺	口径 — 底径 3.8 器高 —	胴部は上位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開きはじめる。	外面—胴部ヘラケズリ後、上位をナデ。内面—胴部～底部ヘラケナデ。	白色粒・角閃石 内外—ぶい褐色	口縁部欠損。
39	土師器 小型壺	口径 — 底径 4.5 器高 —	粘土積層み上げ成形。膨らみ持つ胴部。底部は上げ底気味。	外面—胴部ナデ、下端をヘラケズリ。内面—胴部ヘラケナデ。	石英・白色粒 内—褐色色 外—ぶい褐色	胴部1/2残存。

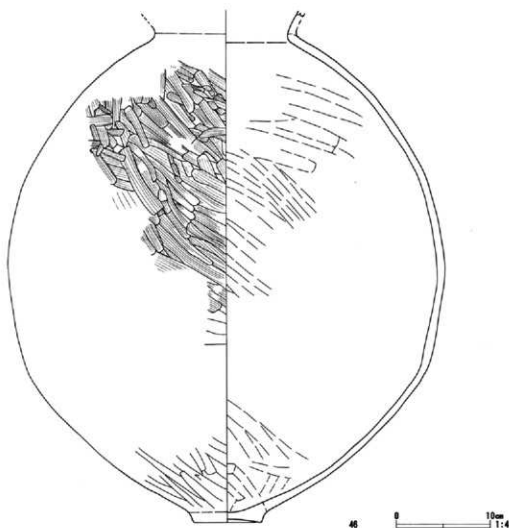


図49 1号溝出土遺物実測図(3)

表26 1号溝出土遺物観察表(5)

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
40	土師器 壺	口径 12.1 底径 5.5 器高 16.6	胴部は丸く膨らみ、口縁部は外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後、下端を除きナデ。 内面一口縁部器面荒れており不鮮明、胴部～底部ヘラナデ。	石英・チャート 内一にぶい橙色 外一橙色	4/5。
41	土師器 壺	口径 (21.2) 底径 — 器高 —	口縁部は中位に稜線を巡らせ、外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、内面一口縁部ヨコナデ、頸部に指頭圧痕。	石英・白色粒 内一にぶい橙色 外一橙色	口縁部1/3残存。
42	土師器 壺	口径 (15.2) 底径 7.6 器高 29.6	胴部は中位に膨らみを持つ。口縁部は外反気味に開き、端部わずかに内彎する。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部縦位ミガキ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内一暗灰黄色 外一にぶい黄橙色	3/4。
43	土師器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	膨らみを持つ胴部。	外面一胴部ヘラケズリ後、上位をナデ。内面一胴部ヘラナデ	石英・白色粒 内外一橙色	胴部1/2残存。
44	土師器 壺	口径 — 底径 6.7 器高 —	膨らみを持つ胴部。	外面一胴部ヘラケズリあるが器面荒れており不明瞭。内面一胴部中位粗雑なヘラケズリ、下位～底部ヘラナデ。	石英・チャート 内一暗灰黄色 外一橙色	胴部中位～底部2/3残存。
45	土師器 壺	口径 — 底径 7.1 器高 —	膨らみを持つ胴部。底部は小さな台状。	外面一胴部ヘラケズリ後ナデ、一部にハケ目残る。内面一胴部中位粗雑なヘラケズリ、下位～底部木口状工具ナデ。	白色粒・角閃石 内一にぶい黄橙色 外一明赤褐色	胴部中位～底部3/4残存。

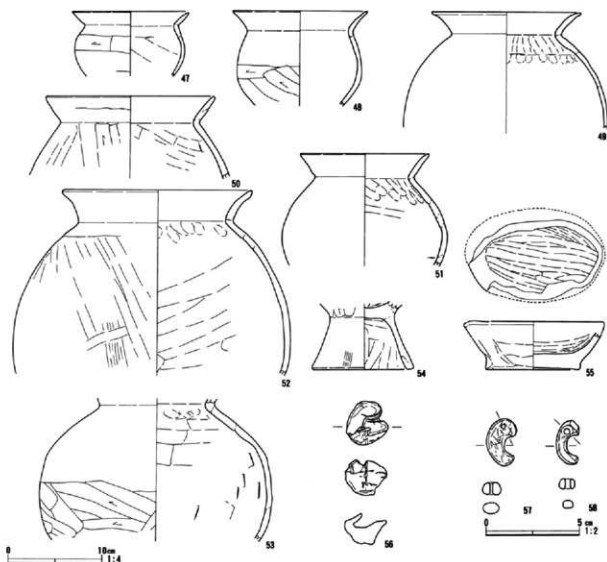


図50 1号溝出土遺物実測図(4)

表27 1号溝出土遺物観察表(6)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
46	土師器 大型甕	口径 — 底径 7.2 器高 —	頸部までの高さ51.5cmの大型品。胸部は中位に膨らみを持つ。小さな底部。	外面—胸部上位へ中位ハケ目、下位ヘラクスリ後ナデ。内面—胸部へ底部ヘラナデ。	石英・チャート 内—浅黄色 外—ぶい黄色	1/4。
47	土師器 小型甕	口径 12.3 底径 — 器高 —	胸部は膨らみを持ち、口縁部はやや彎曲して開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胸部上位ヘラクスリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	石英・白色粒 内外—橙色	上半部1/2残存。
48	土師器 小型甕	口径 14.3 底径 — 器高 —	胸部は膨らみを持ち、口縁部はやや外反して開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胸部上位ナデ、下位ヘラクスリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	石英・白色粒 内—ぶい橙色 外—橙色	胴部下位へ底部欠損。
49	土師器 甕	口径 16.0 底径 — 器高 —	胸部は膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胸部上位ナデ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、上位に指頭圧痕。	石英・チャート 内外—ぶい黄褐色	上半部1/3残存。
50	土師器 甕	口径 (16.0) 底径 — 器高 —	口縁部はわずかに彎曲して開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胸部上位ヘラクスリ後ナデ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	赤褐色粒 内外—ぶい橙褐色	口縁—胸部上位破片。
51	土師器 甕	口径 (13.6) 底径 — 器高 —	胸部は膨らみを持つ。口縁部はわずかに彎曲し、端部やや外反する。	外面—口縁部ヨコナデ、胸部上位ナデ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、上位に指頭圧痕。	片岩・チャート 内—明赤褐色 外—ぶい赤褐色	上半部1/3残存。

表28 1号溝出土遺物観察表(7)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
52	土器 器	口径 20.2 底径 — 器高 —	胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。	外面一口縁部コナダ、胴部ヘラケズリ後ナダ。内面一口縁部ハゲ目後ナダ、胴部ヘラナダ。	片岩・チャート内一ふい黄色外一黄灰色	上半部1/3残存。
53	土器 器	口径 — 底径 — 器高 —	膨らみを持つ胴部。	外面一胴部上位ナダ、中位ヘラケズリ。内面一胴部ヘラナダ、上位に指痕圧痕。	石英・チャート内外一明赤褐色	胴部上半部1/3残存。
54	土器 台付 器	口径 — 底径 (10.8) 器高 —	直線的に開く台部。	外面一台部ナダ、一部ハゲ目残る。内面一底部ヘラナダ、台部ナダ・指ナダ。	石英・チャート内外一ふい黄褐色	台部3/4残存。
55	土器 異形 環	口径 (15.0) 底径 10.0 器高 5.2	平面形が楕円形もしくは木葉形と想定される環形土器。体部は彎曲して立ち上がる。底部は平底で平面形は隅丸長方形に近い楕円形。	外面一体部粗雑なヘラケズリ後ナダ。内面一長軸方向を基調とするナダ。	石英・白色粒・角閃石内外一明赤褐色	口縁～体部の大半を欠損。
56	土器 器 (ミニチュア土器)	口径 — 底径 2.3 器高 —	手捏土器(ミニチュア土器)を押しつぶしたもののか。	外面一ナダ。内面一明確に観察できない。	石英・白色粒内外一ふい褐色	ほぼ完存。
No.	種類	器種	法量 (cm・g)			備考
57	石製品	勾玉	長さ:2.4 幅:1.6 厚さ:0.6	孔径:0.2 重さ:3.3	蛇紋岩製 緑灰色	完形。
58	石製品	勾玉	長さ:2.3 幅:1.2 厚さ:0.5	孔径:0.3 重さ:1.9	蛇紋岩製 暗緑灰色	完形。

2号溝

遺構(図51) 北調査区の中央やや東寄り、D3・E2・E3グリッドで検出した遺構である。4～6号住居跡、1号土坑、1号溝、新しい時期の旧河道、すべてに切られている遺構である。

遺構の輪郭を確認した際、あるいは4～6号住居跡の床面精査時にも、露出した本遺構の覆土は、砂や小角礫を多く含む、河道に特有の堆積土であり、自然河道の可能性が高いと考えた。中央やや南寄りの位置にトレンチを設定し、開掘したが、遺物が皆無であったため、全体の輪郭を図化し、調査を終えることにした。ただし、I次調査の際遺物が出土したとされているため、一応2号溝と呼称し

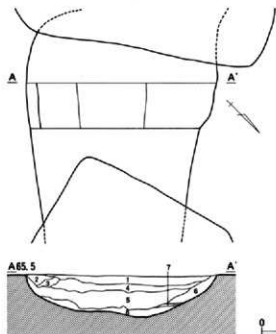


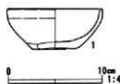
図51 2号溝平面図および断面図

2号溝覆土

- 1層: 灰黄褐色砂礫層。径1～10mm大の砂、円礫・角礫(径10～40mm大が多い)を主に、暗褐色土を含む。白色粒(軽石の可能性有)が集中し、全体に白っぽい。
- 2層: 褐色土層。シルト質褐色土。部分的に砂が挟在する。
- 3層: 内ふい黄褐色砂礫層。1層に近いが、部分的に褐色土を多く含む。
- 4層: 暗褐色砂礫。角礫を少量含む河砂層。下半にはシルト質土を含む。
- 5層: 暗褐色土層。鉄分およびマンガンが多量に沈着する暗褐色シルト質土。砂も含む。しまっている。
- 6層: 暗褐色土層。5層に近いが、シルト化している。砂が少なく、ザラザラ感が弱い。
- 7層: 黒褐色土。5層に近いが、さらにシルトが進み、黒褐色あるいは灰褐色シルトに近い。粘性強く、ネっとりしている。
- 8層: 暗褐色土層。5層に近いが、さらにシルト化が進み、暗褐色あるいは灰褐色シルトに近い。ブロック状の砂を含み、鉄分も固まりとなり沈着する。粘性・しまりあり。

記載しておくことにした。トレンチ部分の所見では、幅4m前後、深さが85cmの断面形が椀状に近い形態の溝である。

遺物 (図52、表29、図版23) 図示した土器は、出土状況など不明であり、問題も残るが、I次調査において本遺構から出土したとされる環である。I次調査は調査範囲が極限られていたこともあり、本遺構と土坑などが重複していた可能性もあるとの所見を得ている。



52図 2号溝出土遺物実測図

表29 2号溝出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 埴	口径 (10.1) 底径 4.7 器高 4.3	体部はわずかに彎曲して立ち上がり、口縁部はやや内彎する。底部は平底。	外面一口縁部ココナダ、体部ヘラケズリ後ナダ。内面一口縁部ココナダ、体部へ底部ナダ。	砂質・チャート 内一にぶい褐色 外一にぶい赤褐色	3/4。

旧河道

形状および堆積土 (図53～55、図版10～12) 北調査区の南西縁の西側から北東方向に向かい、大きく彎曲して北東縁を画する旧河道、旧河川跡である。

北調査区では、試掘調査の段階で、遺物が密集する部分があることを確認しており、それら遺物の集中部の範囲を確定し精査すること、また、遺物出土層位を確認し、その堆積状況を把握することを第1の課題とし、併せて河道の変遷を明らかにするための材料を得ることを、第2の課題とし調査を進めた。実際の調査では、遺物の集中する範囲を避け、適宜先行トレンチを入れ、遺物出土層位を確認しつつ精査を進める方法をとった。遺物の集中する範囲に関しては、その範囲がおおむね南北に分かれることが予想されたため、それぞれ「北遺物集中部」、「南遺物集中部」と呼称し、遺物の取り上げを行なった。

なお、南調査区でも旧河道を確認しているが、調査区の幅が狭く到底掘り上げることができなかったため、重機によりトレンチを入れ、遺物がほとんど見られないことのみ確認し、調査を終えた。

旧河道は、堆積土および河底の標高などから判断して、大きく分けて5回の流路変更を経ていること、つまり今回旧河道とした河川の跡は、都合6本の、時期を異にし、流路を微妙に変えて流れた埋没河川跡と考えられた。古い方から順に、旧河道A～Fとし、以下記載する。

第53図の旧河道の平面図では、濃いスクリーントーンを貼った部分が、旧河道Aの河底の礫層まで確認した深掘トレンチの範囲であり、薄いスクリーントーンを貼った部分が、多量の遺物を包含する旧河道Bの堆積土をほぼ掘り尽くした範囲である。その他の部分に関しては、旧河道E・Fの堆積物を除いた段階までしか調査を行っていない。

旧河道Aは、最初の、そして、また最も大きな開析作用の結果生じた谷地形と考えられる。河道を形成した時期は正確には判らないが、堆積物がローム起源の土に限られることや、河底に堆積している青灰色のシルト層などから見て、更新世の内開析した河道と推定される。

新しい段階の河道は、ほぼこの河道の中を流れており、この谷地形自体は大きく変わっていないようである。河道幅は、15m前後、確認面からの深さは2m前後である。

上・中位の堆積土は、基本的に再堆積のロームである。細かな分層をしていないが、下部にゆくほ

どシルト化し、砂層が挟在するようになる。最下層は、植物遺体を含む「小豆色」の泥炭層が挟在するシルト・砂礫層である。河底は、暗緑灰色の礫層である。

旧河道Bは、集落跡の時期と一致する遺物を多量に包含する段階の河道である。A-A'(図53・54:土層断面)を例にとれば、旧河道Bの堆積土は、22・26・29・30層の4層である。その内遺物を最も多く含むのは、26層であるが、河岸のかかなり高い位置にも遺物が多く、高坪が正位の状態で見られるところから出土するなど、遺物の一部は原位置のまま埋没した可能性があり、埋没過程が急速に進んだことが示唆される。つまり旧河道Bが速やかに一旦埋没した段階があり、その後旧河道C・Dが旧河道Bを切って流れたと見てよいであろう。

旧河道Bの堆積物は、粘性、黒みの強い特徴的な土であり、また古墳時代中期の遺物のみ含むことから、ある程度流路を復元することが可能である。

A-A'では、少なくとも集落のある側、右岸側のみ堆積物が残されていた。本来の河岸が旧河道Cの端まであったとすれば、河幅は最大で8m前後となり、確認面からの深さは1.3m前後となる。

D-D'に示されるように、調査範囲の真中では、遺物が出土する層は、両岸に近い2箇所、2筋に分かれるようである。後述する北集中部では、遺物の出土状態は、旧河道Bの流路を明示し、左岸にやや寄ったあたりから北東へと流れを転じ、旧河道全体の彎曲に従い調査区外へと抜けてゆくことが確かめられた。旧河道Bの河底の標高は、調査区の間でほとんど変わらず、流れのゆるやかな状態が推定され、それは粘性の強いシルト質の堆積土の性状とも矛盾しないようである。また、堆積土中には、押しつぶされたようなヨシの類の植物遺体が一見すると筵を敷いたように面的に確認できる箇所があった。南調査区では、この旧河道Bの堆積土自体がはっきり確認できなかった。

旧河道C・Dは、旧河道Bを大きく削って流れた河道である。旧河道Cに関しては、A-A'、B-B'で厳密な意味で堆積物が一致するとは言い切れず、むしろ旧河道BとDの間に何度か河道の流れに変動があり、断面で確認できた河道は、そのひとつ、あるいはひとつずつの可能性もある。

旧河道Dは、大小の角礫や砂を多量に含む特徴的な堆積物によって埋まった河道である。A-A'では、右岸側に大きな角礫が密集し、次第に礫の大きさが減じるとともに、左岸側に近付くにつれて礫が漸移的に砂に変わってゆく様子が観察できた。また、B-B'、C-C'では、何枚もの砂層とシルト質土の層、小礫の層が複雑なラミナを形成し、河道の流れが緩急を繰り返す、激しく変転したことを示している。旧河道Dの段階は、水流が激しく乱流し、河岸の砂礫層などを大きく削りこみ、多量の砂礫をもたらした段階と見てよい。古墳時代後期の土器のみが出土している。

河幅は、B-B'で7m前後と推定され、確認面から河底までの深さは、1.2mくらいである。中間のD-D'では、河幅が著しく広がっているかに見えるが、あるいは旧河道Bと同様に、この間に河道が分岐し、再び合流するのかもしれない。

旧河道Eに関しても、旧河道D・Fの堆積過程の間にやや小規模な河道の移動があり、その痕跡であること以上は分からない。旧河道Eの堆積土は、7・8層であり、堆積土から見る限り、旧河道Fの堆積土に近いようである。

旧河道Fは、河道の最終段階である。堆積土は、より上位の3層などとも大きく異ならず、砂礫などもそれほど含まない。水が流れることもあったのであろうが、河川というより、時に水の溜まるくぼみのような状態かと推定される。

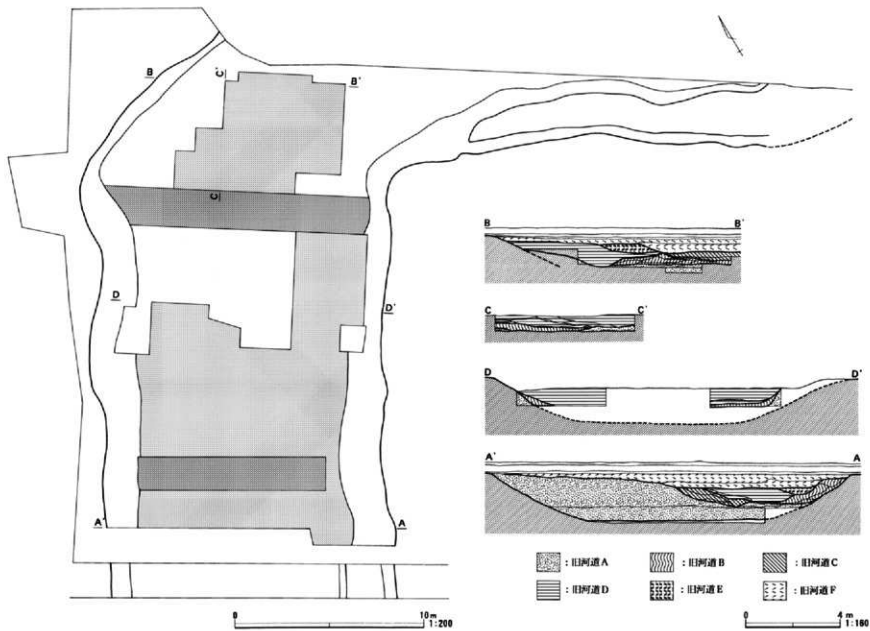


図53 旧河道平面図および断面図(1)

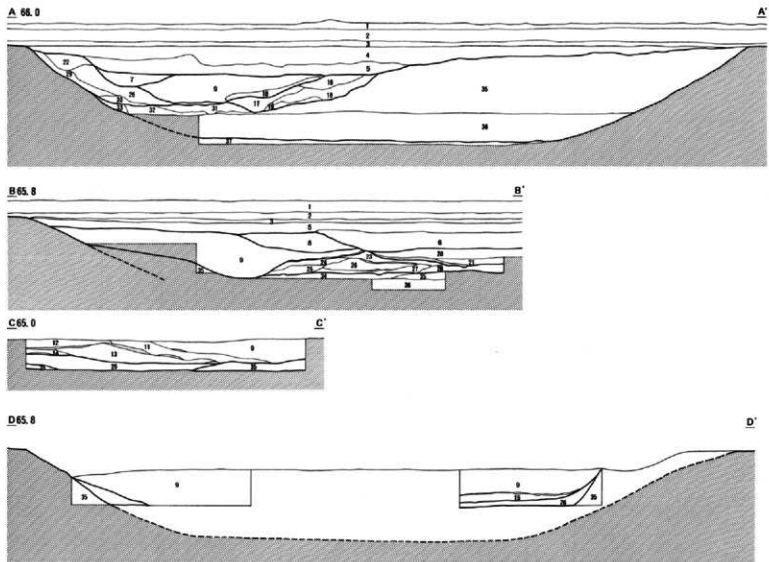


図54 旧河道平面図および断面図(2)

0 2m
1:80

旧河道遺土

- 1層：暗褐色～灰黄褐色土層。現耕作土の表土。
 2層：黒褐色土層。旧耕作土のシルト化した黒褐色土。
 3層：にぶい黄褐色土層。上位の旧耕作土に伴うシルト質土の床土。
 4層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、黒褐色土ブロック、ローム粒を含む。バミスと思われる白色粒を含む。しまっており、粘性ややある。
 5層：暗褐色土層。ややシルト化した暗褐色土を主に、雲状に鉄分が沈着する。他に混入物は少ない。
 6層：にぶい黄褐色土層。にぶい黄褐色のシルト質土を主に、鉄分がかなり沈着する。炭化物を少量含む。
 7層：にぶい黄褐色土層。にぶい黄褐色のシルト質土を主に、下部では砂・小礫、鉄分がラミナをなす。6・7層は、旧河道Eの堆積物の可能性がある。
 8層：にぶい黄褐色土層。6層に近いが、やや白みが強く、シルト化が進む。
 9層：暗褐色土層。シルト化した暗褐色土。ただし、下部は暗褐色の砂礫層。上部は暗褐色土を主に、砂・小礫が細かなラミナをなす。下部は、砂、大小の角礫がラミナをなし、鉄分が沈着している。図(A-A')の同層下部石から左へと礫の径が大きくなり左端では、径2～20mm大の角礫が密集する。同図右側上に向かって次第に礫より砂が多くなる。以下、15層まで蛇行し激しい浸食を繰り返した旧河道Dの一連の河川内堆積物。
 10層：暗褐色土層。河砂の密集部分。
 11層：灰黄褐色土・砂層。シルト質土。砂がごく細かなラミナをなす。12層とともに下面に鉄分が沈着する。
 12層：にぶい黄褐色土層。マンガンを沈着するシルト質土。炭化物を少量含む。砂も所々挟む。
 13層：にぶい黄褐色土層。11層に近いが、ラミナをなすシルト質土と鉄分の層が混れ、炭化物が多い。砂も所々挟む。
 14層：暗褐色土層。粘性の強いシルト質土。炭化物を雲状にかたまりて含む。砂のブロックを所々含む。
 15層：暗褐色あるいは黒褐色砂礫層。9層の一部の砂礫層と思われ、旧河道Bの堆積物を巻き込んでのりらしく、砂礫にまみれた完形に近い土層が下部で点々と出土する。部分的に純砂層となる。
 16層：褐色砂礫層。砂を主に、小礫、鉄分とラミナをなす。以下、19層まで旧河道Cの堆積物。
 17層：褐色砂礫層。径5～10mm大の角礫を主に、砂とラミナをなす。下面に厚く鉄分が沈着する。
 18層：褐色土・砂層。16層に近いが、薄い灰色シルト質土がラミナに加わる。16層より礫が小さい。
 19層：褐色土・砂層。18層に近いが、さらにシルト質土が多い。
 20層：にぶい黄褐色土層。シルト質土。6層よりシルト化が進み、黒み増す。20・21層は、旧河道Cの堆積物の可能性もある。

- 21層：にぶい黄褐色土層。20層に近いが、マンガンかと思われる黒色粒、黒色小ブロックを含み、さらに黒みが増す。
 22層：黒褐色土層。シルト質土。26層よりやや黒みが弱く、混入物も少ない。以下、30層まで旧河道Bの堆積物。
 23層：暗褐色土層。シルト質土。20層にやや似るも、粒子が細かく、黒みが強い。植物遺体片を含む。本層から25層までは、旧河道Bより新しく、旧河道Cより古い、ひとつの河道堆積物とする見方もできる。
 24層：褐灰色土層。砂が所々挟むシルト質土。全体的に雲状、雲状に鉄分を含む。黒化した植物遺体を若干含む。26層より黒みが強い。11層よりシルト質土多いか。
 25層：灰黄褐色土層。鉄分が多量に沈着した砂を主に、径2～10mm大の小礫を含む。
 26層：黒褐色土層。遺物を多量に含むシルト質土。下部には、砂を含み、薄層状の黒化した植物遺体(コシ、アシの類か?)を所々に含む。全体的に雲状に鉄分を含む。上位層に比し、鉄分沈着量は急減する。下面には鉄分が厚く沈着している。
 27層：黒褐色土層。黒褐色あるいは褐灰色シルト質土を主に、白色粒(バミス?)、マンガン粒、鉄分を雲状に含む。黒化した植物遺体を点々と含む。
 28層：灰褐色土層。遺物を雲状に含むシルト質土。砂を含み、黒化した植物遺体も若干含む。遺物は、26・27層との境界付近に限られる。
 29層：にぶい黄褐色土層。河岸のシルト化したロームの崩落土を主に、黒褐色土を含む。粘性が強い。多数の土器も含む。30層に近いが、黒みが強い。
 30層：にぶい黄褐色土層。29層に近いが、黒みが強い。
 31層：黒褐色シルト層。植物遺体をかなり含む泥炭に近いシルト。断面を削った直後は、暗褐色色を帯びる。草率な植物遺体が所々密集し、下面近くでは、下位層の暗緑灰色シルトを含む。この層の最上部まで遺物を少数含む。本層以下、旧河道Aの堆積物。
 32層：暗緑灰色シルト層。断面を削った直後は、鮮やかな「ベバーミント色」のシルト。
 33層：明黄褐色土層。シルト層のローム層。32層は、この層が層相化したものと思われる。
 34層：黒褐色シルト層。31層に近いが、植物遺体が少ない。雲状に鉄分塊が沈着している。遺物を包含するのは、この層の上面付近までである。27層と境界付近に白色シルトが分散する。
 35層：暗褐色あるいは褐灰色土層。くすんだ色調の再堆積ローム。谷底に近づくにつれシルト化が進み、また下部では層厚30～50mmの砂層が挟む。
 36層：暗緑灰色シルト・砂礫層。河道による開削、土砂の堆積を繰り返した跡と見られる。ラミナの発達したシルト・砂礫層。植物遺体を部分的に含む、鉄分も層をなし、入り乱れる。

図55 旧河道平面図および断面図(3)

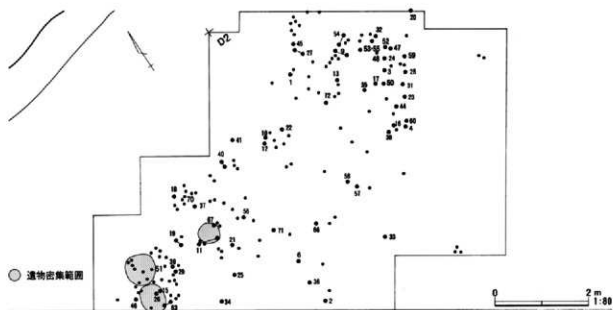


图56 旧河道北集中部遺物分布図

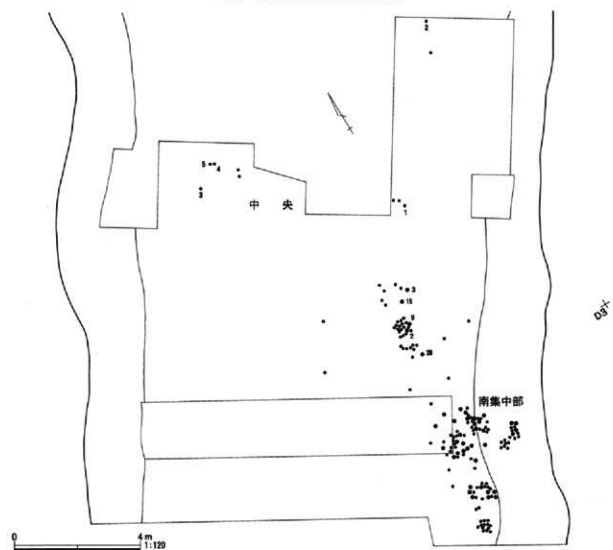


图57 旧河道中央・南集中部遺物分布図

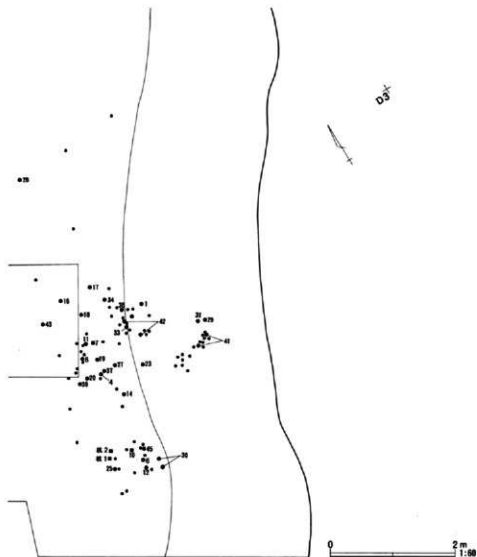


図56 旧河道南集中部遺物分布図

遺物 (図56～69、表30～40、図版24～33) 時期を限定できる遺物が出土しているのは、旧河道B・Dのみである。旧河道Bに関しては、土器を主とする古墳時代中期の遺物が多量に出土している。これについては、北集中部、中央、南集中部に分け、出土状況および出土遺物について簡単に触れることにしたい。

北集中部の遺物分布状態については、図56に、出土した遺物は、図59～64に図示した。他に破片資料が多量に出土しているが、本報告書では、完形もしくはそれに準ずる土器を中心に、残存率の高い土器を図示することしかできなかった。これは、南集中部出土土器も同様である。

北集中部では、端的に言って、全体として旧河道の流路に沿って遺物が出土している。また、右岸側では、河岸の傾斜なりに、つまり右河岸の方から見て、手前側の遺物が高く、河中に近づくにつれ順次遺物の出土レベルが低くなるような分布状態であった。

北集中部で最初に検出した一群 (3・9・13・17・23・24・28・31・32・35・44・47・48・50・53～55・59・72、図版11上段) に関しては、掘り込みは全く見られず、河岸に一括してまとめて置かれたような状態で出土しており、流路におおむね沿って出土した他の遺物とは出土状態がかなり異なる。

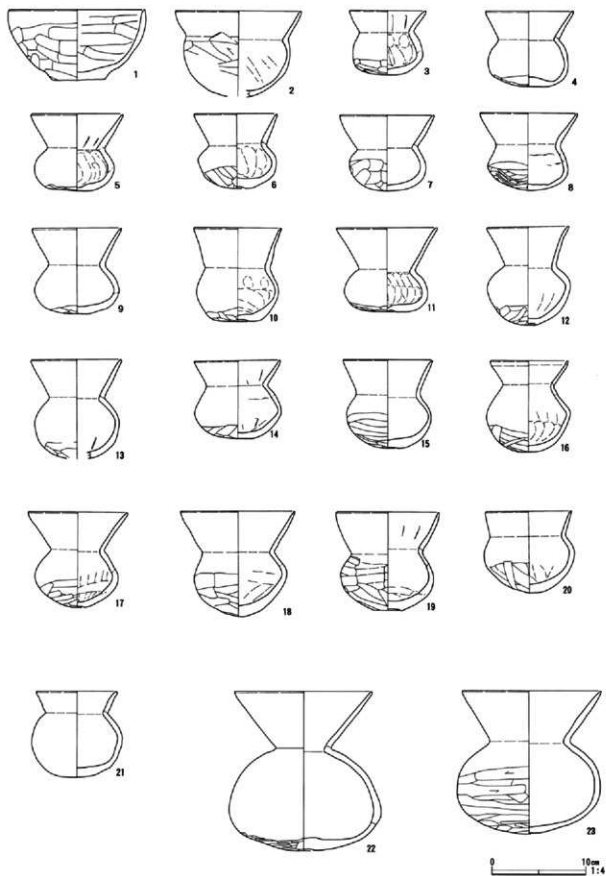


圖59 旧河道・北集中部出土遺物実測図(1)

表30 旧河道・北集中部出土遺物観察表(1)

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 埴	口径 14.6 底径 5.2 器高 7.5	体部は彎曲して立ち上がる。底部は平底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、底部ナデ。	石英・白色粒 内外一明褐色	3/4。
2	土師器 鉢	口径 13.4 底径 — 器高 —	体部は膨らみを持ち。口縁部は彎曲気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	粗砂粒・白色粒 内一橙色 外一明褐色	1/2。
3	土師器 甕	口径 8.3 底径 — 器高 6.8	体部は膨らみを持ち、口縁部はわずかに彎曲して開く。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位・中位ナデ、下位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヘラナデ、体部～底部指ナデ・指頭圧痕。	石英・白色粒 内一～ぶい黄色 外一灰黄色	一部欠損。
4	土師器 甕	口径 (9.3) 底径 — 器高 7.9	横に膨らむ体部。口縁部は直線的に開く。底部は平底気味の丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位・中位ナデ、下位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・白色粒 内外一橙色	4/5。
5	土師器 甕	口径 (9.8) 底径 — 器高 8.3	横に膨らむ体部。口縁部は直線的に開く。底部は平底気味の丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヘラナデ、体部～底部指ナデ。	石英・白色粒 内外一橙色	1/2。
6	土師器 甕	口径 8.9 底径 2.8 器高 8.0	体部は膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。小さな上げ底気味の底部。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部指ナデ。	石英・チャート 内外一橙色	一部欠損。
7	土師器 甕	口径 10.1 底径 — 器高 8.1	体部は膨らみを持ち、口縁部はわずかに彎曲して開く。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、中位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・チャート 内外一～ぶい黄 橙色	一部欠損。
8	土師器 甕	口径 10.4 底径 — 器高 8.2	体部は膨らみを持ち。口縁部は外反気味に開きはじめ、端部やや内彎する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、下位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内外一明赤褐色	ほぼ完形。
9	土師器 甕	口径 9.2 底径 — 器高 9.1	体部は膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。底部は平底気味の丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラケズリ。内面一口縁部～底部ナデ。	石英・白色粒 内外一～ぶい橙 色	1/2。
10	土師器 甕	口径 (9.3) 底径 3.3 器高 10.0	体部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。底部は上げ底気味。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後、下端部を除きナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部指ナデ・指頭圧痕。	石英・白色粒 内一～ぶい橙 色 外一橙色	1/2。
11	土師器 甕	口径 10.3 底径 2.5 器高 8.9	体部は横に膨らむ。口縁部は直線的に開き、端部やや外反する。底部は上げ底気味で、内面中央部窪む。	外面一口縁部ナデ、体部ヘラケズリ後、下端部を除きナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部指ナデ。	白色粒・黒色粒 内一橙色 外一～ぶい橙 色	4/5。
12	土師器 甕	口径 8.7 底径 1.6 器高 10.5	体部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。小さな上げ底気味の底部。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位・中位ナデ、下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内一～ぶい橙 色 外一橙色	ほぼ完形。
13	土師器 甕	口径 9.6 底径 — 器高 —	体部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位・中位ナデ、下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	砂・白色粒・黒 色粒 内外一～ぶい褐 色	4/5。
14	土師器 甕	口径 9.2 底径 2.8 器高 8.4	体部は中位が膨る。口縁部は直線的に開く。端部やや内彎する。底部は平底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位・中位ナデ、下位ヘラケズリ。内面一口縁部～底部ヘラナデ。	石英・チャート 内外一橙色	一部欠損。
15	土師器 甕	口径 9.6 底径 1.5 器高 9.4	体部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。底部は小さな平底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内外一橙色	一部欠損。

表31 旧河道・北集中部出土遺物観察表(2)

No	器 種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
16	土 師 器 埴	口径 8.3 底径 — 器高 9.7	体部は中位に膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き、端部わずかに内彎する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位・中位ナデ、下位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部指ナデ。	石英・白色粒 内外一明赤褐色	一部欠損。
17	土 師 器 埴	口径 10.6 底径 1.7 器高 10.2	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。小さな上げ底気味の底部。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位・中位ナデ、下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	石英・白色粒 内外一褐色	完形。
18	土 師 器 埴	口径 12.1 底径 — 器高 11.2	体部は膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き、端部わずかに内彎する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、中位～底部ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	石英・白色粒 内一明褐色 外一褐色	一部欠損。
19	土 師 器 埴	口径 11.1 底径 3.0 器高 10.5	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は彎曲気味に開く。底部は上げ底。	外面一口縁部ナデ、体部ヘラケズリ。内面一口縁～底部ヘラナデ。	片岩・チャート 内外一灰黄色	4/5。
20	土 師 器 埴	口径 9.2 底径 — 器高 8.6	体部は膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、下位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	石英・白色粒 内一褐色 外一赤褐色	4/5。
21	土 師 器 埴	口径 (8.6) 底径 3.0 器高 9.2	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。底部は平底。	外面一部面荒れており不明瞭だが、口縁～底部ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	砂礫・チャート 内一黄灰色 外一褐色	4/5。
22	土 師 器 埴	口径 (14.5) 底径 — 器高 17.0	体部は下位に膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き、上位やや内彎。底部に不整形の窪み。	外面一口縁～体部ナデ、底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内一明褐色 外一褐色	4/5。
23	土 師 器 埴	口径 14.8 底径 1.2 器高 15.3	体部は中位に膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き、上位やや内彎。小さな上げ底気味の底部。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、中位・下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・角閃石 内外一よい褐色	一部欠損。
24	土 師 器 埴	口径 — 底径 — 器高 —	下位が膨らむ体部。底部は丸底。	外面一体部上位・中位ナデ、下位～底部ヘラケズリ。内面一体部～底部ナデ。	石英・角閃石 内一よい黄褐色 外一よい褐色	体部～底部 1/2 残存。
25	土 師 器 埴	口径 (13.6) 底径 4.3 器高 16.0	胴部は膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き、端部わずかに内彎する。	外面一部面荒れており不明瞭だが、胴部下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外一よい褐色	5/6。
26	土 師 器 埴	口径 (10.0) 底径 4.8 器高 13.7	胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。底部は上げ底。	外面一部面荒れており不明瞭。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外一よい黄褐色	一部欠損。
27	土 師 器 埴	口径 12.6 底径 — 器高 —	胴部は膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。	外面一口縁部ヘラケズリ後、上位ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、頸部に指頭圧痕。	片岩・チャート 内外一褐色	1/3。
28	土 師 器 小型 壺	口径 — 底径 5.6 器高 —	胴部は膨らみを持つ。台状の底部。	外面一胴部上位・中位ナデ、下位～底部ヘラケズリ。内面一胴部～底部ヘラナデ。	白色粒・角閃石 内一褐色 外一よい黄褐色	口縁部欠損。
29	土 師 器 高 杯	口径 18.1 底径 13.2 器高 15.3	杯部下位にわずかな稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。脚部はわずかな膨らみを持ち、裾部広がる。	外面一口縁部ヨコナデ、杯部下位～脚部ナデ、裾部ヨコナデ。内面一環部器面荒れており不明瞭。脚部絞り目。裾部ヨコナデ。	白色粒・黒色粒 内一褐色 外一よい褐色	2/3。
30	土 師 器 高 杯	口径 (20.6) 底径 (15.1) 器高 15.2	杯部下位にわずかな稜を持ち、口縁部は直線的に開く。脚部はわずかな膨らみを持ち、裾部広がる。	外面一口縁部ヨコナデ、杯部下位～脚部ナデ、裾部ヨコナデ。内面一口縁部ヨコナデ、杯底部ナデ、脚部絞り目。裾部ヨコナデ。	石英・白色粒・角閃石 内外一明赤褐色	2/3。

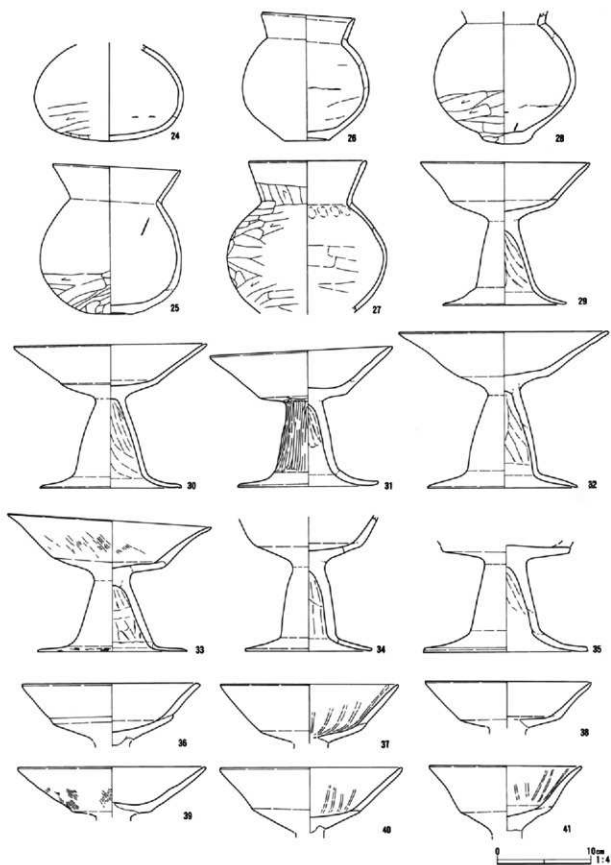


图60 旧河道・北集中部出土遺物実測図(2)

表32 旧河道・北集中部出土遺物観察表(3)

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
31	土師器 高 坏	口径 19.6 底径 15.1 器高 14.7	坏部下端に横を持ち、口縁部は外反気味に開く。坏部内底部がわずかに隆起。脚部はわずかな膨らみを持ち、裾部広がる。	外面一口縁部ヨコナデ、坏部下位ヘラケズリ、脚部ミガキ、裾部ヨコナデ。内面一口縁～底部ヨコナデ・ナデ、裾部上位絞り目、下位ナデ、裾部ヨコナデ。	砂雜・チャート 内外一明赤褐色	ほぼ完成。
32	土師器 高 坏	口径 (22.5) 底径 (16.0) 器高 16.5	坏部下位にわずかな横を持ち、口縁部は外反して開く。脚部は下位に膨らみを持ち、裾部広がる。	外面一坏部器面荒れており不明瞭、脚部ナデ、裾部ヨコナデ。内面一坏部器面荒れており不明瞭、脚部絞り目、下端ナデ、裾部ヨコナデ。	石英・白色粒 内一橙色 外一にぶい黄褐色	1/2。
33	土師器 高 坏	口径 21.7 底径 15.9 器高 14.7	坏部下位にわずかな横を持ち、口縁部は外反して開く。脚部は直線的に開き、裾部横に広がる。	外面一口縁部ヨコナデで一部ハケ目残る、坏部下位～裾部ナデで坏部にハケ目残る。内面一口縁部ナデで一部ハケ目残る。坏底部器面荒れており不明瞭、脚部絞り目・ナデ、裾部ハケ目。	白色粒・黒色粒 内外一にぶい橙色	4/5。
34	土師器 高 坏	口径 — 底径 13.4 器高 —	坏部下位に横を持ち、口縁部直線的に開きはじめる。脚部わずかな膨らみを持ち、裾部広がる。	外面一坏部ヘラケズリ後ナデ、脚部ナデ、裾部ヘラケナデ。内面一口縁部ヨコナデ、坏底部器面荒れており不明瞭、脚部ヘラケナデ、裾部ヨコナデ。	石英・角閃石 内外一橙色	口縁部の上位を欠損。
35	土師器 高 坏	口径 19.4 底径 — 器高 —	水平な内盤状の坏底部。脚部はわずかな膨らみを持つ。裾部は広がり、口唇部中央に凹線。	外面一坏底部～脚部ナデ、裾部ヨコナデ。内面一坏底部ナデ、脚部上位絞り目、下位ナデ、裾部ヨコナデ。	石英・黒色粒 内一にぶい褐色 外一にぶい橙褐色	口縁部欠損。
36	土師器 高 坏	口径 19.0 底径 — 器高 —	坏部下位に弱い横を持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、坏部下位ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、坏底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内外一橙褐色	口縁部4/5残存。
37	土師器 高 坏	口径 19.0 底径 — 器高 —	坏部下位にわずかな横を持ち、口縁部は直線的に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、坏部下位ナデ。内面一坏部器面荒れるがミガキの痕跡あり。	チャート・白色粒・赤褐色粒 内外一明赤褐色	脚部欠損。
38	土師器 高 坏	口径 17.8 底径 — 器高 —	坏部下位にわずかな横を持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一坏部器面荒れており不明瞭。内面一口縁部ヨコナデ、坏底部ナデ。	石英・角閃石 内一にぶい褐色 外一明赤褐色	脚部欠損。
39	土師器 高 坏	口径 19.4 底径 — 器高 —	坏部下端に横を持ち、口縁部はわずかに彎曲して開く。	外面一坏部ナデで一部にハケ目残る。内面一口縁部ヨコナデ、坏底部ナデ。	白色粒・角閃石 内外一明赤褐色	脚部欠損。
40	土師器 高 坏	口径 (19.0) 底径 — 器高 —	坏部下位に弱い横を持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁～坏部下位ヨコナデ。内面一坏部器面荒れるがミガキの痕跡あり。	白色粒・角閃石 内外一にぶい橙褐色	坏部2/3残存。
41	土師器 高 坏	口径 16.2 底径 — 器高 —	坏部下位に弱い横を持ち、口縁部は外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、坏部下位ナデ。内面一口縁部器面荒れるがミガキの痕跡あり。坏底部ナデ。	石英・白色粒 内外一明赤褐色	脚部欠損。
42	土師器 高 坏	口径 23.0 底径 — 器高 —	外反気味に開く口縁部。	外面一口縁部ヨコナデ、不明瞭だがミガキあり。内面一口縁部不明瞭だがミガキの痕跡あり。	石英・白色粒 内一明赤褐色 外一黒色	口縁部3/4残存。
43	土師器 高 坏	口径 — 底径 15.1 器高 —	脚部はわずかに反りながら下方に開き、裾部広がる。	外面一脚部～裾部ナデ。内面一脚部上位・中位絞り目、下位～裾部ナデ。	石英・白色粒 内外一橙褐色	脚部2/3残存。
44	土師器 高 坏	口径 — 底径 14.0 器高 —	脚部はわずかな膨らみを持ち、裾部広がる。	外面一脚部ナデ、裾部ヨコナデ。内面一脚部絞り目、下位ナデ、裾部ヨコナデ。	石英・白色粒 内一明赤褐色 外一明褐色	脚部3/4残存。
45	土師器 高 坏	口径 — 底径 14.0 器高 —	脚部は直線的に開き、裾部広がる。	外面一脚部～裾部ナデ、一部にハケ目残る。内面一脚部ナデ、裾部ヨコナデ。	白色粒・角閃石 内外一明赤褐色	坏部欠損。

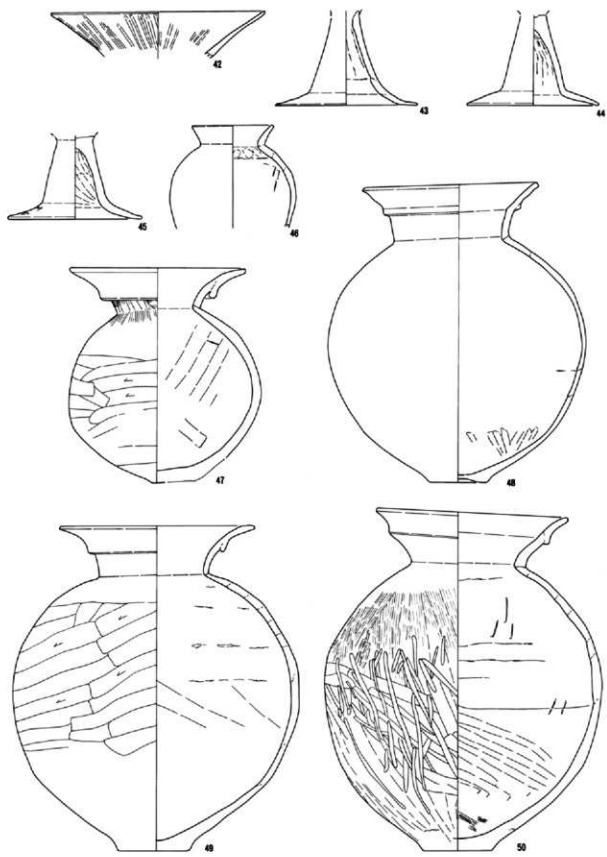


图61 旧河道·北集中部出土遺物実測図(3)

表33 旧河道・北集中部出土遺物観察表(4)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
46	土器 小壺 底径 器高	8.4 — —	胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、頸部に指頭圧痕。	白色粒・黒色粒 内一にぶい黄色 外一浅黄色	上半部3/4残存。
47	土器 壺 底径 器高	18.6 — 22.8	胴部は中位に膨らみを持つ。口縁部は中位がヒレ状となる複合口縁で、外反して開く。	外面一口縁部上位ヨコナデ、下位～胴部上位ナデでハケ目残る。胴部中位・下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	石英・チャート・白色粒 内外一にぶい橙色	5/6。
48	土器 壺 口径 底径 器高	18.9 6.3 31.7	胴部は中位に膨らみを持つ。口縁部は中位に尖帯を巡らせ、外反して開く。底部はやや上げ底。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	白色粒・角閃石 内一褐色 外一黒褐色	4/5。
49	土器 壺 口径 底径 器高	20.6 7.8 34.4	胴部は膨らみを持つ。口縁部は複合口縁で中位に段を持ち、上位は外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、上位と下位ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内一にぶい黄褐色 外一にぶい黄褐色	3/4。
50	土器 壺 口径 底径 器高	20.3 7.4 36.4	胴部は中位に膨らみを持つ。口縁部は複合口縁で中位に段を持ち、上位は外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部上位木口状工具ナデ、中位・下位ヘラケズリ後粗雑なミガキ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、下位～底部にハケ目残る。	石英・チャート 内一にぶい橙色 外一橙色	4/5。
51	土器 壺 口径 底径 器高	(20.1) — —	胴部は膨らみを持つ。口縁部は肥厚し、外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内一明赤褐色 外一橙色	上半部3/4残存。
52	土器 壺 口径 底径 器高	17.5 8.1 31.0	胴部は膨らみを持ち、上位に突起を貼り付ける。口縁部は肥厚し、外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部器面荒れており不明瞭。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデで下位にハケ目、底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内一明赤褐色 外一橙色	一部欠損。
53	土器 壺 口径 底径 器高	19.4 6.8 32.6	胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	片岩・チャート 砂礫 内外一浅黄色	一部欠損。
54	土器 壺 口径 底径 器高	17.0 — —	胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	石英・チャート 内外一明赤褐色	下半部欠損。
55	土器 壺 口径 底径 器高	(18.2) 6.0 36.8	胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。	外面一部面荒れており不明瞭だが、胴部の一部にハケ目残る。内面一口縁部ヨコナデ、胴部上位木口状工具ナデ、下位～底部ナデ、中位に指頭圧痕。	白色粒・黒色粒 内一にぶい黄褐色 外一橙色	2/3。
56	土器 壺 口径 底径 器高	— 6.9 —	上方に向かって膨らみはじめる胴部下位。	外面一胴部下位ナデ。内面一胴部下位ヘラナデ、底部器面荒れており不明瞭。	白色粒・角閃石 内一浅黄色 外一にぶい黄褐色	胴部下位～底部残存。
57	土器 小壺 底径 器高	15.1 — 11.6	胴部上位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。底部中央部が窪む。	外面一口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面一口縁部～底部ナデ。	石英・黒色粒 内一明赤褐色 外一赤色	5/6。
58	土器 壺 口径 底径 器高	16.7 5.8 19.0	下位に膨らみを持つ胴部。口縁部は外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後、上位をナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ナデ。	石英・黒色粒 内一白色 外一橙色	4/5。
59	土器 壺 口径 底径 器高	14.9 4.8 21.9	胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部器面荒れており不明瞭だが下位にヘラケズリ痕。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	石英・黒色粒 内一明赤褐色 外一にぶい褐色	5/6。
60	土器 壺 口径 底径 器高	(17.9) 5.4 24.5	胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	石英・角閃石 内一橙色 外一にぶい黄褐色	口縁部の1/2を欠損。
61	土器 壺 口径 底径 器高	(19.0) — —	胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内一オリーブ黒色 外一灰黄色	2/3。

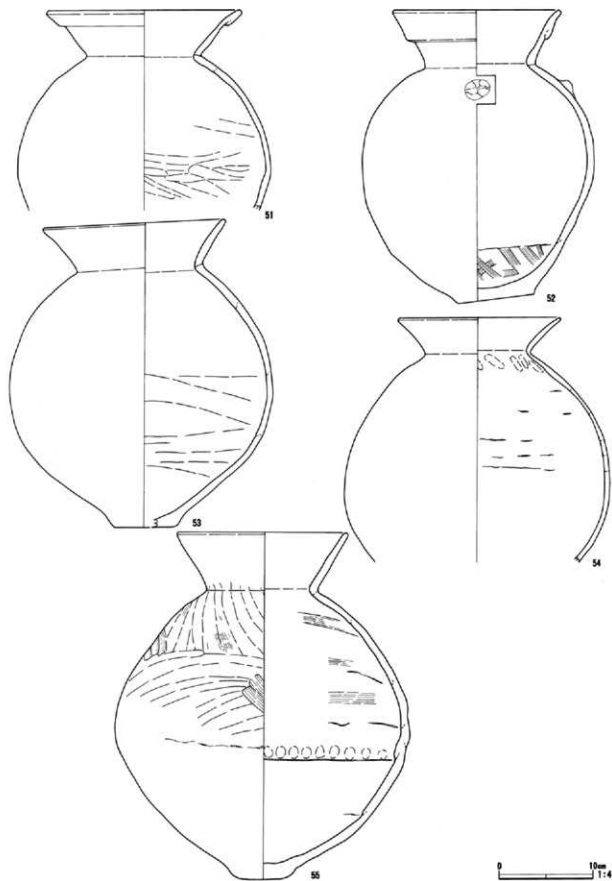


图62 旧河道・北集中部出土遺物実測図(4)

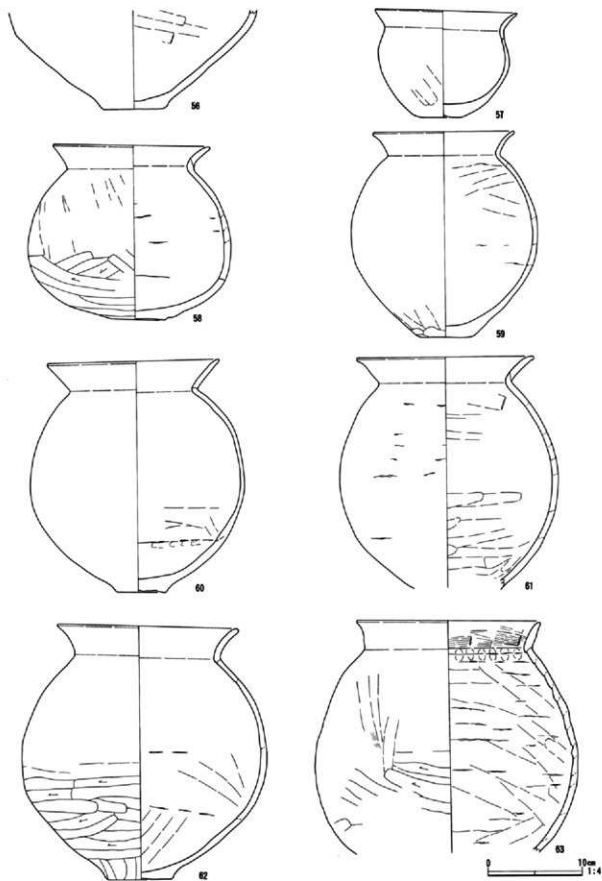


圖63 旧河道・北集中部出土物実測図(5)

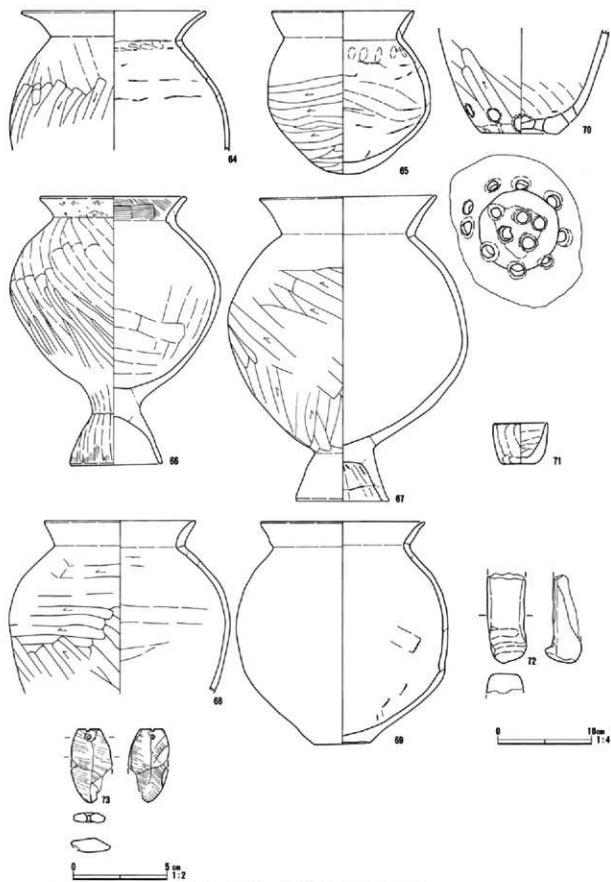


図64 旧河道・北集中部出土遺物実測図(6)

表34 旧河道・北集中部出土遺物観察表(5)

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
62	土 節 器 壺	口径 19.2 底径 7.0 器高 27.1	胴部は大きく膨らみ、口縁部は外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後、上位をナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	粗砂粒・チャート・黒色粒 内外一にふい黄褐色	4/5。
63	土 節 器 壺	口径 19.4 底径 — 器高 —	粘土組織み上げ成形。成形やや粗雑。胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ後ナデで下位にケズリ痕残る。内面一口縁部木口工具ナデ、胴部ヘラナデ。	石英・黒色粒 内一明赤褐色 外一褐色	1/3。
64	土 節 器 壺	口径 19.6 底径 — 器高 —	胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後、上位をナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、頸部に指痕圧痕。	石英・黒色粒 内外一にふい黄褐色	上半部1/2残存。
65	土 節 器 壺	口径 (15.2) 底径 2.5 器高 17.4	胴部は膨らみを持ち、口縁部はわずかに彎曲して開く。小さな丸みを帯びた底部。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部上位ナデ、胴部～下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ、頸部に指痕圧痕。	粗砂粒・チャート・白色粒 内外一にふい黄褐色 外一明黄褐色	2/3。
66	土 節 器 台付壺	口径 15.6 底径 9.5 器高 28.2	胴部は上位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。台部はわずかに彎曲して開く。	外面一口縁部ヨコナデで一部にハケ目残る。胴部ヘラケズリ後、粗雑なミダキ、台部ヘラケズリ後ナデで下位にハケ目残る。内面一口縁部ハケ目、胴部～底部ヘラナデ、台部ナデ。	石英・白色粒・赤褐色粒 内外一にふい黄褐色	4/5。
67	土 節 器 台付壺	口径 19.0 底径 10.0 器高 32.4	胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。台部は「ハ」の字状に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後、上位をナデ、台部ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ、台部ヘラナデ・指ナデ。	白色粒・黒色粒 内外一褐色	4/5。 外面胴部中位に保存着。
68	土 節 器 壺	口径 (16.0) 底径 — 器高 —	胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内一黄灰色 外一暗灰色	1/3。
69	土 節 器 壺	口径 17.5 底径 6.0 器高 23.7	胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	砂礫・チャート 内外一浅黄色	4/5。
70	土 節 器 瓶	口径 — 底径 8.3 器高 —	膨らみの少ない胴部。底部及び胴部下端に計14孔を穿つ。	外面一胴部ヘラケズリ。内面一胴部～底部ナデ。	石英・チャート 内外一にふい黄褐色	胴部下位～底部残存。
71	土 節 器 ミニチュア土器	口径 (5.7) 底径 3.4 器高 4.3	体部は丸みを持って立ち上がる。底部は平底。	外面一口縁部～底部ナデ。内面一口縁部～底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内一灰褐色 外一黒褐色	1/2。
72	(土製品)	口径 — 底径 — 器高 —	幅4cm前後、断面(長)方形の中実製品で、図下側が短く折れ曲がる。	全体をナデ。	石英・角閃石にふい黄褐色	
No	種類	器種	法 量 (cm・g)		備考	
73	石製品	剣形模造品	長さ:3.9 幅:2.1 厚さ:0.7 重さ:6.1 孔径:0.15 胎晶片岩製	灰白色	4/5。	

旧河道中央と仮称した南北の集中部の間でも、散漫ではあるが、完形に近い土器が出土している(図57)。それらの土器には、本来の包含層の上部の、旧河道Dの堆積土と思われる砂層から出土したものも含まれ、あるいは南集中部の土器が水流により運ばれたものが含まれる可能性がある。

南集中部では、調査所見による限り、北集中部のように遺物が一定の傾向をもって出土するようには見えなかった(図57・58)。河岸に沿ってある程度高低差をもちつつ、河岸の肩のところから河底近くまで遺物、とくに土器が所々まとまりをもち出土し続けた。斜面からも半完形の土器が出土しており、破片の出土状態から見ても、河底の遺物群と一連の出土状態を示している。45の剣形の石製模造

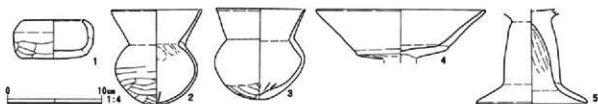


図65 旧河道・中央出土遺物実測図

表35 旧河道・中央出土遺物観察表

No	器種	法量(cm)	形部・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 ミニチュア土器	口径 6.6 底径 6.3 器高 4.2	体部はやや彎曲して立ち上がり、口縁部は内彎する。底部は平底。	外面一口縁部ココナダ、体部ヘラケズリ、底部ナダ。内面一口縁部ココナダ、底部ナダ。	石英・チャート 内一橙色 外一明赤褐色	完形。
2	土師器 甕	口径 9.6 底径 — 器高 10.1	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。底部は丸底。	外面一口縁部体部上位ナダ、体部中位へラケズリ。内面一口縁部ナダ、体部へ底部ヘラナダ、上位に指面圧痕。	片岩・チャート 内外一にぶい黄褐色	1/2。
3	土師器 甕	口径 9.5 底径 — 器高 9.7	体部は膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き、肩部は玉縁状。底部は丸底。	外面一口縁部ココナダ、体部へ底部ヘラケズリ後、上位・中位ナダ。内面一口縁部ココナダ、体部へ底部ヘラナダ。	石英・白色粒 内外一にぶい褐色	一部欠損。
4	土師器 高環	口径 18.2 底径 — 器高 —	環部下に弱い稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部器面荒れており不明瞭、環部下へラケズリ後ナダ。内面一口縁部器面荒れており不明瞭、環底部ナダ。	白色粒・黒色粒 内外一橙褐色	脚部欠損。
5	土師器 高環	口径 — 底径 (12.0) 器高 —	脚部はわずかな膨らみを持ち、肩部は彎曲気味に広がる。	外面一脚部へ器面荒れており不明瞭。内面一脚部上位・中位紋目目、下位へ器面荒れており不明瞭。	石英・チャート 内一明赤褐色 外一赤色	脚部2/3残存。

品は、南集中部のやや南寄りの中央、30層の下部から散乱する土器片とともに出土している。

なお、旧河道Bの南集中部を精査した際、遺物の特に集中する26層最下部で、突き刺さった状態の木杭と思しき植物遺体を2箇所(図58:杭1・2)で検出している。断面観察では、それらの植物遺体は、表面が腐朽しており、鉄分が浸み込み木質が辛うじて残るような状態であり、さらに下の32層とした暗緑灰色のシルトまで、ほぼ垂直に突き刺さっていた(図版12:最下段中央)。打ち込まれた層準を確定することはできないが、少なくとも旧河道Bの堆積土中で検出できたこと、杭先の深さなどから見て、旧河道Bの段階に打ち込まれた可能性があるものと考えられる。

9層とした旧河道Dの砂礫層からは、古墳時代後期の土器(図69:1~4)が単独で出土している。

旧河道の基底層を確認するために包含層以下を深掘したトレンチ部分では、遺物は出土していない。

なお、南調査区は調査範囲が狭く、旧河道を完掘することが困難であったため、調査範囲のほぼ中央にトレンチを入れ、遺物の出土状態および包含層の有無を確かめてから、可能な範囲で精査を行なう方法を選んだ。重機でトレンチを開掘したところ、北調査区で検出した包含層は見られず、遺物もほとんど検出できなかったため、旧河道部分に関しては、トレンチ調査のみで調査を終えた。

2 遺構外出土遺物

図70は、いずれも試掘調査時に検出した遺物である。層的にやや高く多少問題が残るが、位置的には、1が旧河道、3・7が旧河道の南集中部にほぼ相当する位置で出土している。

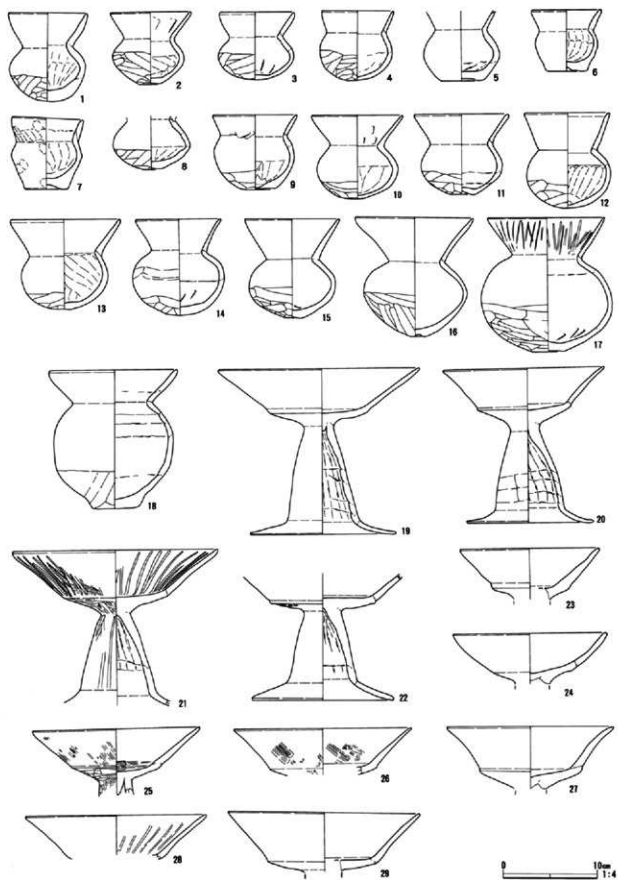


图66 旧河道·南集中部出土遺物実測図(1)

表36 旧河道・南集中部出土遺物観察表(1)

No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 用	口径 8.4 底径 — 器高 9.4	体部は膨らみを持ち、口縁部は彎曲して開く。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ。中位～底部ヘラクスリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部指ナデ。	石英・白色粒 内一橙色 外一明赤褐色	一部欠損。
2	土師器 用	口径 8.6 底径 2.0 器高 7.7	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。底部は小さな平底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、中位・下位ヘラクスリ。内面一口縁～底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外一橙色	完形。
3	土師器 用	口径 (8.0) 底径 — 器高 7.2	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は彎曲気味に開く。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、中位～底部ヘラクスリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	石英・白色粒 内一黒褐色 外一にぶい褐色	口縁部の3/4を欠損。
4	土師器 用	口径 7.6 底径 — 器高 7.4	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は彎曲気味に開く。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、中位～底部ヘラクスリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	石英・白色粒 内外一明赤褐色	口縁部の1/3を欠損。
5	土師器 用	口径 — 底径 5.6 器高 —	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に立ち上がりはじめる。底部は上げ底。	外面一口縁部～体部ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	石英・黒色粒 内外一にぶい褐色	口縁部上位を欠損。
6	土師器 用	口径 7.3 底径 5.4 器高 6.6	体部は上位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。底部は平底で、中央部窪む。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部指ナデ。	石英・白色粒 内一にぶい黄褐色 外一灰黄褐色	一部欠損。
7	土師器 用	口径 7.4 底径 4.6 器高 8.3	体部上位に膨らみを持ち、口縁部はやや槽曲して立ち上がる。底部は上げ底。	外面一口縁部～体部ナデ・指部圧痕。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部指ナデ。	石英・白色粒 内一にぶい黄褐色 外一浅黄褐色	ほぼ完形。
8	土師器 用	口径 — 底径 1.8 器高 —	中位に膨らみを持つ体部。小さな上げ底気味の底部。	外面一体部上位ナデ、下位ヘラクスリ。内面一体部上位ナデ、下位～底部ヘラナデ。	石英・角閃石 内外一明赤褐色	口縁部欠損。
9	土師器 用	口径 9.0 底径 3.4 器高 7.9	体部は膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。底部は平底で、内面中央部が窪む。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラクスリ後、上位をナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外一にぶい褐色	一部欠損。
10	土師器 用	口径 9.7 底径 1.5 器高 8.9	体部は中位に膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き、端部わずかに内彎する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位・中位ナデ、下位～底部ヘラクスリ。内面一口縁部ヘラナデ、体部～底部ヘラナデ。	緑・白色粒・黒色粒 内外一にぶい黄褐色	完形。
11	土師器 用	口径 10.1 底径 2.6 器高 8.5	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。底部は小さな上げ底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位・中位ナデ、下位ヘラクスリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・白色粒 内外一明赤褐色	一部欠損。
12	土師器 用	口径 9.5 底径 — 器高 10.1	体部は中位に膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き、内面上位に弱い稜を持つ。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、下位～底部ヘラクスリ。内面一体部～底部指ナデ。	白色粒・黒色粒 内一にぶい橙色 外一橙色	3/4。
13	土師器 用	口径 (11.5) 底径 — 器高 9.6	体部は膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き、端部わずかに内彎する。底部は小さな平底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位・中位ナデ、下位ヘラクスリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部指ナデ。	石英・白色粒 内外一にぶい橙褐色	2/3。
14	土師器 用	口径 9.0 底径 — 器高 10.2	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位・中位ナデ・帯状のヘラナデ、下位～底部ヘラクスリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外一にぶい橙褐色	一部欠損。
15	土師器 用	口径 10.2 底径 1.9 器高 10.5	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。小さな上げ底気味の底部。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、下位ヘラクスリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外一にぶい橙褐色	ほぼ完形。

表37 旧河道・南集中部出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
16	土師器 埴	口径 12.6 底径 1.6 器高 12.8	体部は中位に膨らみを持つ。口縁部は外反気味に開き、肩部わずかに内彎する。小さな上げ底気味の底面。	外面一口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ、下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・黒色粒 内外一橙色	一部欠損。
17	土師器 埴	口径 12.5 底径 3.3 器高 14.3	体部は中位に膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き、肩部わずかに内彎。底面は小さな平底。	外面一口縁部ヨコナデ・ミガキ、体部上位ナデ、下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ・ミガキ、体部～底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外一ぶい橙色	3/4。
18	土師器 小型埴	口径 13.6 底径 5.0 器高 14.6	粘土総横み上げ成形。胴部中位に膨らみを持ち、口縁部は彎曲気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ナデ。	石英・白色粒 内一ぶい褐色 外一明褐色	口縁部の1/2を欠損。 外面に厚付着。
19	土師器 高坏	口径 21.6 底径 (15.0) 器高 17.5	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。肩部はわずかに膨らみ、裾部広がる。	外面一口縁部ヨコナデ、坏部下位～臀部ナデ、裾部ヨコナデ。内面一口縁部ヨコナデ、坏底部ナデ、臀部絞り目、裾部ヨコナデ。	白色粒・角閃石 内外一橙色	3/4。
20	土師器 高坏	口径 (17.2) 底径 13.5 器高 16.5	坏部下位に稜を持ち、口縁部は外反して開く。臀部は下位に膨らみを持ち、裾部広がる。	外面一口縁部ヨコナデ、坏部下位～臀部上位ナデ、下位ヘラナデ、裾部ヨコナデ。内面一口縁部ヨコナデ、坏底部ナデ、臀部絞り目、裾部ヨコナデ。	石英・白色粒・角閃石 内外一ぶい橙色	3/4。
21	土師器 高坏	口径 (21.6) 底径 — 器高 —	坏部下位に弱い稜を持つ。口縁部は外反気味に開き、肩部やや内彎する。裾部はわずかな膨らみを持ち、裾部広がる。	外面一本口状工具ナデ・ミガキ、坏部下位木口状工具ナデ、臀部ナデ・粗雑なミガキ、裾部ヨコナデ。内面一坏部ミガキ、臀部上位・中位絞り目、下位ヘラナデ、裾部ヨコナデ。	石英・角閃石 内外一ぶい褐色	2/3。
22	土師器 高坏	口径 — 底径 (14.8) 器高 —	坏部下位に稜を持ち、口縁部は直線的に開きはじめ。臀部はわずかな膨らみを持ち、裾部広がる。	外面一器面荒れており不明瞭だが、坏部下位は木口状工具ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、坏底部ナデ、臀部上位・中位絞り目、下位ナデ、裾部ヨコナデ。	石英・白色粒 内一ぶい褐色 外一明赤褐色	1/2。
23	土師器 高坏	口径 14.9 底径 — 器高 —	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部はわずかに彎曲して開く。	外面一口縁部ヘラケズリ後ナデ、坏部下位ナデ。内面一口縁部ナデ。	粗砂粒・チャート 内外一明赤褐色	坏部3/4残存。
24	土師器 高坏	口径 16.5 底径 — 器高 —	坏部下位にわずかな稜を持ち、口縁部は彎曲して開く。	外面一口縁～坏部下位ナデ。内面一口縁～坏底部ナデ。	石英・チャート 内一ぶい黄褐色 外一橙色	坏部3/4残存。
25	土師器 高坏	口径 17.6 底径 — 器高 —	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ナデ、一部にハケ目残る。坏部下位ヘラケズリ。内面一口縁～底部ナデ、埴目部分を木口状工具ナデ。	石英・黒色粒 内外一橙色	胴部欠損。
26	土師器 高坏	口径 (19.0) 底径 — 器高 —	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部は外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、一部にハケ目残る。坏部下位ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、一部にハケ目残る。	石英・黒色粒 内外一橙色	坏部1/3残存。
27	土師器 高坏	口径 (17.4) 底径 — 器高 —	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部は外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、坏部下位ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、坏底部ナデ。	石英・角閃石 内一褐色 外一明赤褐色	胴部欠損。
28	土師器 高坏	口径 18.9 底径 — 器高 —	外反気味に開く口縁部。	外面一口縁部器面荒れており不明瞭。内面一口縁部器面荒れており不明瞭だがミガキあり。	白色粒・黒色粒 内外一橙色	口縁部残存。
29	土師器 高坏	口径 20.6 底径 — 器高 —	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、坏部下位ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、坏底部ナデ。	白色粒・角閃石 内一褐色 外一明赤褐色	胴部欠損。
30	土師器 高坏	口径 24.5 底径 — 器高 —	外反して開く口縁部。口唇部は平坦な面をなす。	外面一口縁部ナデ。内面一口縁部ナデ。	石英・白色粒 内一ぶい黄褐色 外一橙色	口縁部2/3残存。

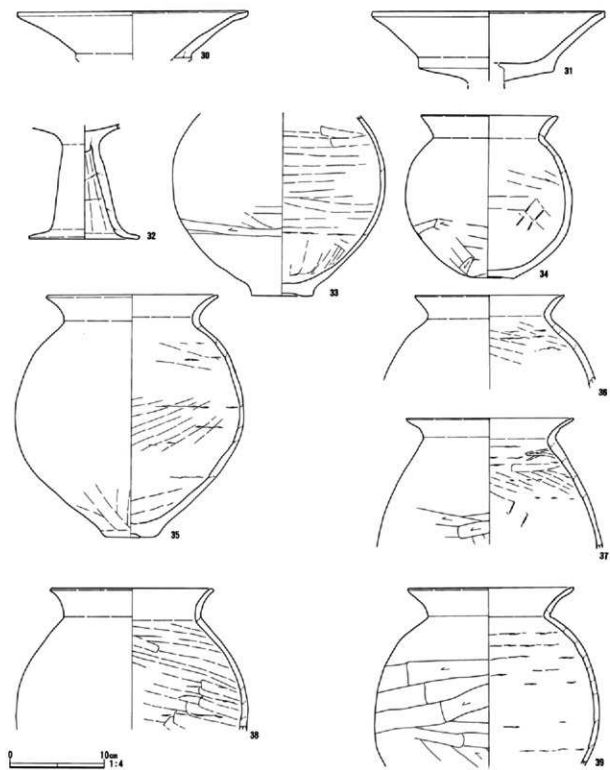


图67 旧河道·南巢中部出土遗物实测图(2)

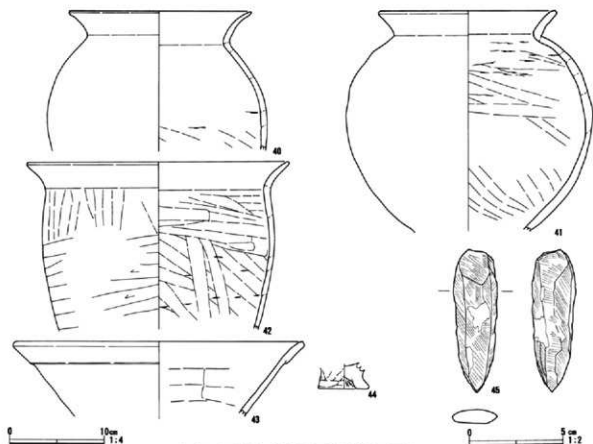


図68 旧河道・南集中部出土遺物実測図(3)

表38 旧河道・南集中部出土遺物観察表(3)

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
31	土師器 器 高 環	口径 24.8 底径 — 器高 —	坏部下位に稜を持ち、口縁部は外反して開く。口唇部は平坦な面をなす。	外面—口縁〜坏部下位ナデ。内面—口縁〜坏底部ナデ。	石英・白色粒 内外一橙色	胴部欠損。
32	土師器 器 高 環	口径 — 底径 11.7 器高 —	胴部はわずかに膨らみ、胴部は小さく広がる。	外面—胴部ナデ、裾部ヨコナデ。内面—坏高部ナデ、胴部ヘラナデ、裾部ヨコナデ。	白色粒・黒色粒 内外一明赤褐色	胴部 4 / 5 残存。
33	土師器 器 高 密	口径 — 底径 6.7 器高 —	中に膨らみを持つ胴部。底部はやや上げ底。	外面—胴部ヘラケズリ後ナデ。内面—胴部〜底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内—いよ黄色 外—灰黄褐色	胴部 1 / 2 残存。
34	土師器 器 高 環	口径 14.6 底径 4.5 器高 17.8	粘土縦横み上げ成形。胴部は丸く膨らみを持ち、口縁部は短く外反して開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ナデ、下位ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部〜底部ヘラナデ。	礫・黒色粒 内—いよ黄色 外—いよ褐色	3 / 4。
35	土師器 器 高 環	口径 18.3 底径 6.0 器高 25.5	胴部は中に膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。底部は中央部が窪む。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部〜底部ヘラナデ。	片岩・チャート 内—橙色 外—明赤褐色	2 / 3。
36	土師器 器 高 環	口径 (16.0) 底径 — 器高 —	胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ナデ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ヘラナデ。	石英・角閃石 内外一灰黄色	口縁〜胴部上位 2 / 3 残存。
37	土師器 器 高 環	口径 (18.0) 底径 — 器高 —	胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ナデ、中位ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	片岩・チャート 内外—いよ褐色	口縁〜胴部中位 1 / 3 残存。

表39 旧河道・南集中部出土遺物観察表(4)

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
38	土師器 甕	口径 17.3 底径 — 器高 —	胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。	外面—口縁部ココナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面—口縁部ココナデ、胴部ヘラナデ。	片岩・チャート 内—いぼい橙色 外—いぼい橙色	口縁～胴部中位 1/3残存。
39	土師器 甕	口径 (17.7) 底径 — 器高 —	粘土粗積み上げ成形。胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。	外面—口縁部ココナデ、胴部上位ナデ、中位以下ヘラケズリ。内面—口縁部ココナデ、胴部上位ナデ、中位以下ヘラナデ。	片岩・チャート 内—いぼい橙色 外—赤色	上半部2/3残存。
40	土師器 甕	口径 19.3 底径 — 器高 —	胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。	外面—口縁部ココナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面—口縁部ココナデ、胴部ヘラナデ。	片岩・チャート 内外—いぼい黄橙色	上半部1/2残存。
41	土師器 甕	口径 (18.7) 底径 — 器高 —	胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面—口縁部ココナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面—口縁部ココナデ、胴部ヘラナデ。	片岩・チャート 内—灰黄色 外—いぼい褐色	2/3。
42	土師器 甕	口径 (27.9) 底径 — 器高 —	膨らみの少ない胴部。口縁部は外反気味に開く。	外面—口縁部ココナデ、胴部上位ヘラケズリ後ナデ、中位以下横位ヘラケズリ。内面—口縁部ココナデ、胴部ヘラナデ。	片岩・チャート 外—浅黄色	上半部1/2残存。
43	土師器 甕	口径 (31.2) 底径 — 器高 —	肥厚口縁。胴部は口縁部に向かって直線的に開く。	外面—口縁部ココナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面—口縁部ココナデ、胴部ヘラナデ。	石英・白色粒 内—いぼい黄褐色 外—明赤褐色	口縁～胴部上位 片。
44	土師器 ミニチュア 土器	口径 — 底径 5.5 器高 —	下方が開く台部。	外面—台部ナデ。内面—台部絞り目。	石英・白色粒 内外—明赤褐色	台部残存。
No	種類	器種	法 量 (cm・g)			備考
45	石製品	刺形模造品	長さ:7.5 幅:2.3 厚さ:0.7 重さ:18.4	蛇紋岩製	暗青灰色	未穿孔。

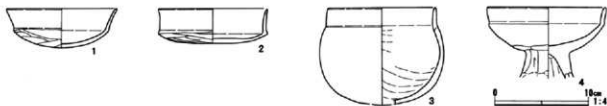


図99 旧河道・中位砂礫層出土遺物実測図

表40 旧河道・中位砂礫層出土遺物観察表

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 11.8 底径 — 器高 4.3	口縁部は体部との境に横を持ち、外反して開く。底部は丸底。	外面—口縁部ココナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ココナデ、底部ナデ。	片岩・チャート 内—いぼい橙色 外—いぼい黄褐色	一部欠損。
2	土師器 坏	口径 (11.6) 底径 — 器高 3.7	体部は浅く、口縁部との境に横を持ち、口縁部は直立気味で、端部やや外反する。	外面—口縁部ココナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ココナデ、底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内外—いぼい橙色	1/3。
3	土師器 埴	口径 (11.4) 底径 — 器高 —	膨らみを持つ体部。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部わずかに内彎する。	外面—口縁部ココナデ、体部は器面差れており不明瞭。内面—口縁部ココナデ、体部ヘラナデ。	微砂粒・チャート 内外—いぼい橙色	1/2。
4	土師器 高坏	口径 (12.6) 底径 — 器高 —	口縁部は体部との境に横を持ち、彎曲気味に立ち上がる。脚部は下方に向かってわずかに開く。	外面—口縁部ココナデ、体部ナデ、坏底部～脚部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ココナデ、坏底部ナデ、脚部ヘラナデ。	チャート・白色粒 粒・黒色粒 内—いぼい橙色 外—明赤褐色	胴部及び坏部の 2/3を欠損。

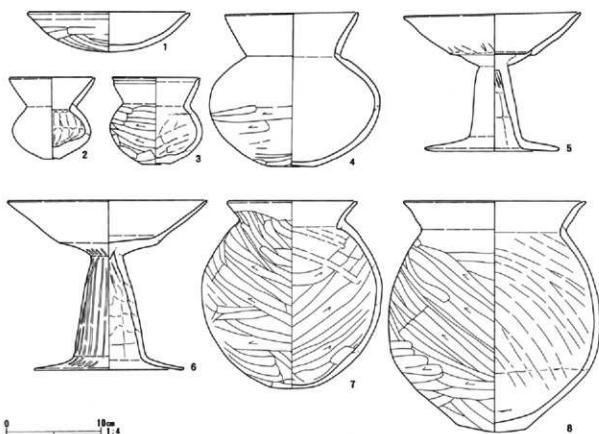


図70 遺構外出土遺物実測図

表41 遺構外出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 杯	口径 (17.2) 底径 — 器高 4.3	体部は浅く、緩やかに立ち上がり、口縁部は短くわずかに外反する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁～底部ナデ。	石英・角閃石 内一浅黄褐色 外一橙色	3/4。
2	土師器 埴	口径 (9.0) 底径 1.8 器高 8.6	体部は中位に膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き、端部わずかに内彎。底部は小さな平底。	外面一口縁～体部器面荒れており不明瞭。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部指ナデ。	石英・チャート 内外一橙色	3/4。
3	土師器 埴	口径 9.3 底径 3.0 器高 9.2	体部は中位に膨らみを持つ。口縁部は彎曲気味に開き、上位に凹縁が広がる。底部は平底。	外面一口縁部ヘラケズリ後ナデ、体部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	石英・角閃石 内一浅黄褐色 外一橙色	5/6。
4	土師器 埴	口径 14.2 底径 4.5 器高 16.5	体部は中位が大きく膨らむ。口縁部は外反気味に開き、端部やや内彎する。底部は平底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	白色粒・角閃石 内一褐灰色 外一ぶい橙褐色	3/4。
5	土師器 高杯	口径 18.8 底径 14.3 器高 14.7	杯部下位に段差を有し、口縁部は彎曲気味に開く。脚部は直線的に開き、裾部幅方向に広がる。	外面一口縁部～裾部ヘラケズリ後ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、杯部ナデ、脚部上位絞り目、中位・下位ヘラナデ、裾部ヨコナデ。	石英・白色粒 内一ぶい褐色 外一明赤褐色	一部欠損。
6	土師器 高杯	口径 21.2 底径 15.9 器高 18.0	杯部下位にわずかな稜を持つ。口縁部は外反気味に立ち上がり、上位やや内彎する。脚部はわずかに膨らみ、裾部広がる。	外面一口縁部器面荒れており不明瞭、杯部下位～裾部ナデ・ミガキ。内面一環部器面荒れており不明瞭、脚部上位絞り目、中位・下位ヘラナデ、裾部ミガキ。	石英・白色粒 内外一橙褐色	4/5。
7	土師器 甕	口径 (13.7) 底径 2.2 器高 20.0	胴部は膨らみを持ち、口縁部はわずかに槽曲して開く。底部は丸底気味。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラケズリ後、一部をヘラナデ。	片岩・チャート 内一橙褐色 外一黒褐色	1/3。
8	土師器 甕	口径 19.4 底径 7.0 器高 24.5	胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。底部は丸みを持つ。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	石英・白色粒 内一灰褐色 外一黒褐色	1/2。

V 観音塚遺跡の遺構と遺物

1 中世以降の遺構と遺物

(1) 土坑

基本層序に関しては、九反田遺跡と大きく異ならないため、必要な部分のみ補足しておきたい。まず、九反田遺跡でI a、I b層とした表土層、旧耕作土を除去すると、ローム質の土が露出する状態であった。ローム層は、水の影響を受け、くすんだ色調で、鉄分がかなり沈着していた。つまり、南側から伸長する観音塚遺跡の住居跡などが占地する微高地は、今回の調査範囲の南側直前で途切れ、徐々に沖積層に転じるようである。

今回の調査範囲の北側で、わずかではあるが陶磁器片が採集でき、試掘調査で確認した遺構の時期が決めたこともあり、発掘調査を行った。発掘調査により検出した遺構は、土坑1基のみである。

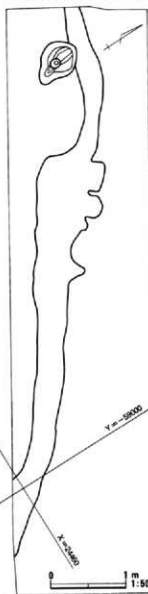


図71 観音塚遺跡遺構全体図

1号土坑

遺構 (第71・72図、図版12) 西北西—東南東に長い横長の調査範囲の西端付近で検出した遺構で、確認面は、IV層上面である。北側の上端の一部を、近・現代の溝によって壊されている。

平面形は、洋梨形で、長軸長は、195cm、横幅は、143cmである。坑壁はかなり急峻に掘り込まれており、底面中央にピット状の円形の掘り込みが見られる。最深部での深さは、92cmである。

覆土は、5層に分けられ、1～4層は暗褐色土を主とし、下部へゆくほど砂を多く含み、5層はロームを主とする土層である。覆土から見て、中世以降の遺構と考えられる。

遺物 遺物は、土器の微細片が数点出土しているのみである。

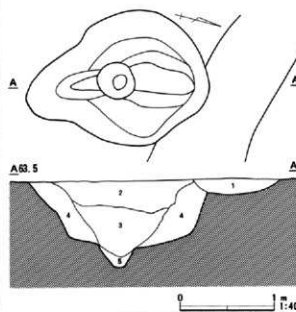


図72 1号土坑平面図および断面図

1号土坑覆土

- 1: 暗褐色土層。やや灰色みがかった暗褐色土と小砂利の混合土。白みがかったロームを含み、鉄分が沈着している。近世以降の溝覆土。
- 2: 暗褐色土層。粘性の強い暗褐色土を主に、くすんだ色調のロームを含む。
- 3: 暗褐色土層。2層に近いが、厚みが増し、粘性強い。砂も格段に多くなる。
- 4: 暗褐色土層。2層に近いが、くすんだ色調のロームが多い。
- 5: 褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を含む。

VI ま と め

今回の調査は、いずれも道路幅の調査であり、遺跡の全貌を明らかにすることはできなかったが、九反田遺跡に関しては、旧河道により画された微高地上に位置する、やや特異な立地の古墳時代中期の集落の様相をとらえることができた。ここでは、九反田遺跡について、調査所見に基づき成果と問題点を些か書き留めることにしたい。

まず、出土遺物についてであるが、住居跡、および1号溝、旧河道から大量の土器が出土している。細かな検討を加える余裕がないため、図化した資料に限って概略のみ記す。

出土土器は、旧河道の中～上層出土の極一部の古墳時代後期の土器を除いて、古墳時代中期の土器、いわゆる和泉式としてよいであろう。ただし、旧河道出土土器の中には、微妙な例が多少含まれ、また、図化し得ていない破片資料の中にはS字罫がかなり含まれるため、前期に遡る土器が全くないとは言い切れない。

出土土器は、遺構により様相がかなり異なっており、以下それを器種ごとに列記することにする。

まず、鉢あるいは堦・環の類については、丸底あるいは丸底に近いものは、3・11号住居跡出土例(図15:1、図34:1)、平底の鉢は、7・9・12号住居跡出土例(図24:1、図28:1、図38:1)、2号溝出土例(図52:1)があげられ、6号住居跡では両者が出土している(図21:1～3)。前者丸底の堦・環は、後者に比し、後出する器種と見てよいであろう。なお、やや低平で口径の大きい丸底の鉢は、1号溝のみで出土している(図47:1～3)。

埴、とくに小型埴はほぼすべての遺構から出土しているが、旧河道出土例の多くは(図59、図61:1～18)、総じて口縁部が長く、内湾気味のものが多く傾向がみとめられる。また、胴部が扁平で下位に最大径をもつ特徴的な大型埴は、旧河道のみから出土している(図59:22)。形態変化の大筋として、それらに後出する埴は、総じて器厚が厚く、口縁部が短く、胴部最大径が口径を凌ぐ傾向が見られ、またケズリが卓越する。全体に整形、調整が粗略化するとしてよいようである。

高環は、形態的に多様で、遺構単位一律の違いを求めることがむづかしいが、総じて環部がやや浅めで大きく、脚部がすんりのびるものは古い段階に多いようである。脚部の造りにも種々あるが、いわゆる柱状脚は見られず、また内面に輪積痕を上から下まで強くとどめる例も全体に少ない。

埴・高環の器面調整にミガキが用いられた例は、極わずかで、そのミガキも軽微である。埴では、旧河道南集中部出土例(図66:17)が完形品の唯一例で、高環では、7号住居跡出土例(図24:8)や10号住居跡出土例(図31:7)など部分的にミガキが施されたものを除けば、旧河道出土例にほぼ限られる(図60:37・40・41、図66:21・28)。

壺では、二重口縁壺や折返し口縁壺などの典型的な壺は、ほぼ旧河道北集中部出土例に限られる(図61:47～50、図62:51・52)。1号溝でも、わずかではあるが、その種の壺が出土している(図48:41)。住居跡出土の壺は、ほとんどが壺と甕の中間的な器形の壺である。北集中部出土の二重口縁壺、折返し口縁壺の場合、形態的に多様であり、ある程度の時間幅を含むものと考えられる。

甕は、大半が平底甕であるが、台付甕も4・10号住居跡、1号溝、旧河道北集中部で出土している(図19:8、図31:4、図50:54、図64:66・67)。旧河道北集中部出土例(図64:66)は、胴部の形態、脚部の長さ、内外面に残るハケメなどから見て、中期の甕としてよいか微妙な例に含まれる。明瞭な

丸底の甕は、旧河道出土北集中部出土例（図64：65）のみである。

甕では、多孔の甕が3・6・11号住居跡、旧河道北集中部から出土している（図16：15、図21：13、図34：19、図64：70）。旧河道出土土器には古い段階の土器が多いが、出土土器全体としては、やはりかなりの時間幅があると見てよく、多孔の甕もその一例である。

住居跡出土土器の器種構成に関しては、埴・高杯が極端な割合を占める3・9号住居跡、埴・高杯・甕がおおむね同じような比率で出土している7・10・12号住居跡がある。器種の比率を考える場合、6・11号住居跡のように覆土上・中層からも完形に近い土器が出土し続ける例と7・10・12号住居跡のように覆土中からは少数の破片のみ出土し、完形、あるいはそれに近いものは床面から出土する例を一応別けて考える必要がある。

以上、とくに出土土器の所見から、時期的には、旧河道出土土器には、本遺跡で最も古い様相をもつ土器、埴・壺・甕が含まれることは明らかである。また、住居跡出土土器は、ひとつには、丸底の鉢あるいは埴・坏が加わる一群と平底の鉢を伴う一群とそれ以外に分けられ、また、埴・高杯におけるミガキの残存、台付甕の存続、それぞれの器形などを目安にすれば、少なくとも2段階に分けることができる。その場合、3・6号住居跡出土土器、および11号住居跡出土の坏を最新相を示す土器群と見、台付甕を含む4・10号住居跡出土土器や高杯にミガキの残る7号住居跡出土土器を古相を示す土器群と見ることができる。埴・高杯の形態からは、1・12号住居跡出土土器も前者に含まれる。九反田遺跡出土土器に関しては、この新古2群の土器様相をもって、新古の2段階、旧河道出土のさらに古い一群を加え、ひとまず3段階の推移を考えておきたいと思う。

細かな対比はできないが、古墳時代中期当該段階の児玉地域の既往土器編年（宍河内 1995、中村 1989、坂野 1991など）に照らせば、住居跡の古い様相の土器は、3期区分の2期に、新しい様相の土器は、3期前後に相当すると考えられる。旧河道北集中部の先に指摘した壺・甕はそれ以前ということになる。それら最も古い段階の壺・甕、あるいは埴に対応する段階の土器は、住居跡出土土器中にはほとんど見られない。焼土跡とした痕跡しかとどめない住居が本来複数あったのか、あるいはすでに失われた範囲にその段階の住居跡があったのかは、現状では確定することができない。

遺物としては、他に勾玉2点（図50：57・58）が1号溝から、剣型の石製模造品2点（図64：73、図68：45）がそれぞれ旧河道の南北の集中部から出土している。1号溝および旧河道が単なる土器などの廃棄の場ではないことを物語る資料である。また、1号住居跡の床面からは、勾玉状土製品（図9：8）と管状土製品（同図：19～29）が、ひとまとまりになって出土している。管状土製品と呼んだが、形態的には魚網用の土鍾との区別はむつかしく、また勾玉状土製品に寄り沿って数個ずつ並んで出土した状況から見て（図版12、下段右端）、ともに紐を通した一連の状態のまま埋もれたものと推定される。したがって、それらの管状土製品は、管玉に類する装飾品である可能性が高いと考えられる。

遺構についても特筆すべき点が多い。まず、住居跡全体についてであるが、上記した出土土器についての所見が妥当であれば、2段階程度の推移の過程が考えられる。焼土跡とした痕跡を2箇所で見出し、あるいは床面の高い住居跡が本来は何軒かあった可能性がないとは言えないようである。無柱穴で炉をもたない6号住居跡、痕跡的な8号住居跡を除けば、いずれも4本柱で貯蔵穴を持ち、炉は地床炉である。調査範囲が限られることもあろうが、カマドの痕跡は一切見られない。

特記すべき住居内施設としては、1号住居跡の石敷施設と特異な貯蔵穴、3号住居跡の小溝と呼ん

だ間仕切溝があげられる。住居内の石敷施設は、類例がないではないが、1・3号住居跡の場合、特異な施設を持った大型住居が溝を挟み向き合うかのように配置されていることそのものが特異である。

石敷が付設された貯蔵穴は、方形の枠状の炭化材に囲まれており、覆土にも所々炭化材片が混入していた。枠状の炭化材は、内側に不規則な炭化物の薄層を伴ない、薄層は部分的に貯蔵穴の上面にも及んでいた。あるいは枠の付いた木製方形の蓋のようなものが貯蔵穴に被せてあったのかもしれない。

1号溝は、住居跡のある平場を縦断する断面形がV字形、U字形の溝であり、人為的に掘削された溝と見て、まず間違いはない。溝底の高さが南から北へとわずかながらも傾斜していること、覆土に砂礫混じりの層が所々貫入することなどから、南から北へと水を流した水路の一種と見てよいであろう。調査区外の南側のどこかで今回調査した河道(旧河道)から分流して、南側一帯に開かれた水田に水を引き、再び河道に流し込むべく設けられた施設と推定して無理はない。多数のピット、土坑が掘り込まれ、また炭化物、焼土の密集部分が見られ、土器を主とする遺物が多量に出土したことからすれば、水路としての機能を終えた後も、溝をめぐる様々な行為がなされたことがうかがえる。

旧河道に関しては、事実記載の項で旧河道A～Fに分けられることを記した。ここでは、極かいつまんで河道の変遷について記しておく。

基底礫層を削り込む旧河道Aは、堆積物の特徴および遺物が皆無であることから、更新世末期の谷形成期の自然流路と考えられる。古墳時代中期の大量の遺物が出土した旧河道Bは、長期間に及ぶ旧河道Aの埋積過程のある時点で川中の川として形成されたものであろう。人為的に開削された明瞭な痕跡は、今回の調査では得られていない。旧河道Bの形成時期は、古墳時代中期以前と言う他ないが、出土遺物から見て、それが再び埋りはじめたのは、古墳時代中期初頭を前後する時期と推定される。旧河道Bは、黒みの強いシルト質の堆積土で埋積しており、堆積物中に押し潰されたヨシなどの類がしばしば見られたことからすれば、この段階の河道は、水流がそれほど激しくなく、灘んだ状態で時に乾湿を繰り返し、水辺にヨシなどが繁茂していたものと考えられる。

続く旧河道C・Dの段階は、一転して大量の砂礫がもたらされており、激しい水流により流路が度々変転した段階である。旧河道C・Dからは、図化し得た資料以外には土器破片もほとんど出土していない。出土土器は、古墳時代後期、6世紀前半ないしは、それ以降にほぼ限定できる。旧河道Bの段階から旧河道C・Dの段階にかけて、河道の状態を一変させる何らかの大きな変化が生じたようである。旧河道C・D以降は、旧河道Eの段階にやや流水が活発化したのを除いて、緩慢な埋積過程が進行した模様である。

旧河道は、北側では蛇行しながら、女堀川右岸の改修工事に伴う事前調査で確認された「河川跡」(利根川 1999)に合流すると見てよいであろう(図1)。

以上、九反田遺跡については、その立地のみならず、遺構・遺物ともに特異な点が多々あり、通常の集落ととは些か異なった集落であると見ることもできないではない。今後周辺集落との比較を通じて解決すべき課題であろう。また、旧河道については、河道内で行なわれた諸行為の再構成、周辺一帯を含めた流路の復元、自然科学的方法による環境分析など、やはり向後に残された課題である。課題を列記したばかりで、まともとは言いがたいが、ひとまず筆を擱くことにしたい。

末筆ながら、厳しい寒さの中、発掘調査にあられた方々をはじめ、報告書の作成に多大なご協力を頂いた様々な方々に心から御礼申し上げる次第である。

引用文献および主要参考文献

- 岩瀬 譲 1998 「地神／塔頭」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第193集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 岩田明広 1998 「今井条里遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第192集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 太田博之・佐藤好司 1991 「本庄遺跡群発掘調査報告書V—公葬塚古墳—」本庄市埋蔵文化財調査報告第19集、本庄市教育委員会
- ほか 2002 「東五十子・川原町」東五十子遺跡調査会
- ほか 2003 「宍勝寺裏壇輪窯跡・宍勝寺北裏」本庄市埋蔵文化財調査報告第24集、本庄市教育委員会
- 恋河内昭彦 1993 「川越田II」児玉町文化財調査報告書第5集、児玉町教育委員会
- 1995 「飯玉東II・高縄田・桶越・梅沢II・東牧西分・鶴蒔・毛無し屋敷・石橋」児玉町文化財調査報告書第17集、児玉町教育委員会
- 2002 「児玉地方の弥生土器」埼玉土器観会第20回資料、埼玉土器観会
- 小久保 徹・柿沼幹夫ほか 1978 「東谷・前山・古川端」埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集、埼玉県教育委員会
- 坂口 一 1987 「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」『研究紀要』4、群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 坂本和俊 1984 「埼玉県」『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会
- 末木啓介 1994 「埼玉県におけるカマド導入期の様相」『研究紀要』第11号、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 立石盛詞ほか 1982・1983 「後張—本文編・図版編I・II」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15・26集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 利根川章彦 1982 「古墳時代集落構成の一考察」『土曜考古』第5号、土曜考古学研究会
- 1999 「西富田・四方田条里遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第224集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中村倉司 1989 「関東地方における竈・大形甕・須恵器出現時期の地域差」『研究紀要』第6号、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 1999 「埼玉県における5世紀代の土器—和泉式土器の行方—」『東国土器研究』第5号、東国土器研究会
- 坂野和信 1988 「和泉式土器の様相—竈導入期の土器群—」『本庄市立歴史民俗資料館紀要』第2号、本庄市立歴史民俗資料館
- 1991 「和泉式土器の成立について—序論—」『土曜考古』第16号、土曜考古学研究会
- 本庄市史編集室編 1976 『本庄市史 資料編』本庄市
- 1986 『本庄市史 通史編I』本庄市
- 1989 『本庄市史 通史編II』本庄市
- 増田逸朗・小久保 徹・柿沼幹夫ほか 1979 「下田・諏訪」埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告書第21集、埼玉県教育委員会
- 増田一裕 1987 「東富田遺跡群発掘調査報告書」本庄市埋蔵文化財調査報告第10集、本庄市教育委員会
- 1989 「四方田・後張遺跡群発掘調査報告書」本庄市埋蔵文化財調査報告第14集、本庄市教育委員会

图 版



北調査区全景（北西より）



北調査区近景（南東より）



南調査区全景（北西より）

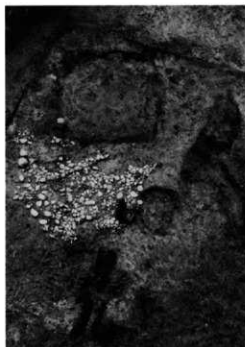
図版2



1号住居跡全景（南より）



同焼土・炭化物出土状態（南より）



同貯蔵穴・敷石検出状況（東より）



同貯蔵穴完掘状況（南より）



同土製品出土状態（西より）



2号住居跡全景（北東より）



3号住居跡全景（南東より）



同貯藏穴・小溝完掘状況（西より）

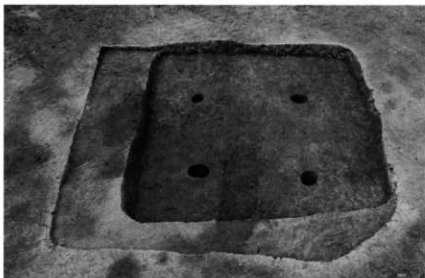


同P3・小溝完掘状況（南より）

図版4



4号住居跡全景 (南西より)



5・6号住居跡全景 (南より)

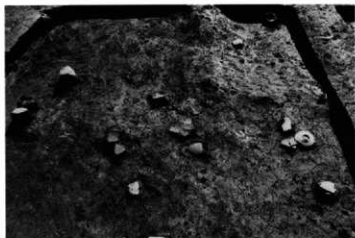


7号住居跡全景 (南東より)

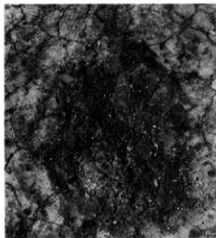
7号住居跡遺物出土状態
(南東より)



9号住居跡全景 (南東より)



同遺物出土状態 (南東より)



同炉跡検出状況 (南東より)

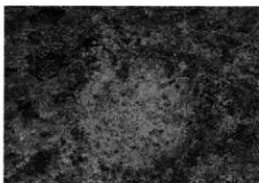
図版6



10号住居跡全景（南東より）



11号住居跡全景（南東より）



同炉跡検出土状況（南東より）



同貯蔵穴土層断面（北東より）

12号住居跡全景 (南東より)



同遺物・炭化物検出状況
(南東より)



同遺物検出状況 (南東より)

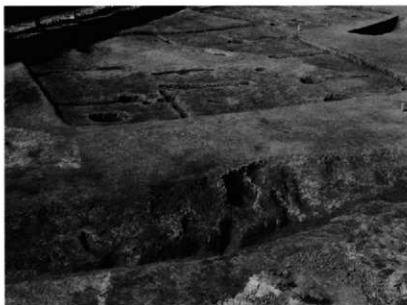


同炉跡1検出状況 (南東より)

図版8



1号溝全景（南より）



同近景（南東より）



1号溝遺物出土状態(1) (南より)



同遺物出土状態(2) (南より)



同焼土・炭化物密集範囲検出状況(東より)



同焼土・炭化物密集範囲断面(北より)



同土坑3遺物出土状態(北東より)



同勾玉出土状態(西より)

図版10



旧河道・北集中部完掘状況（北西より）



同南集中部完掘状況（北西より）



同南西壁土層断面（北東より）



同北東壁土層断面（南西より）

旧河道・北集中部遺物出土状態
(1) (南西より)



同北集中部土層断面 (南東より)



同北集中部遺物出土状態 (2) (南西より)



同北集中部遺物出土状態 (3) (北東より)

図版12



旧河道・南集中部遺物出土状態
(1) (北東より)



同南集中部遺物出土状態
(2) (南西より)



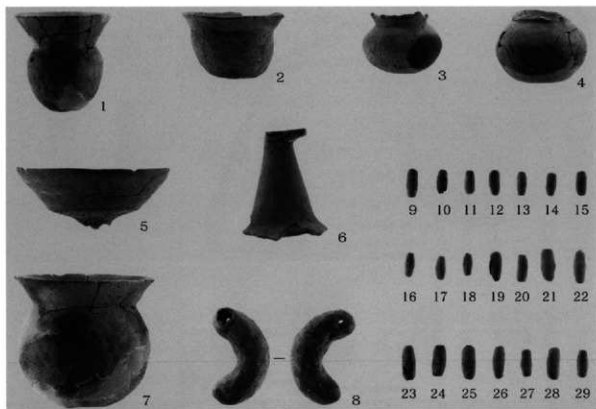
同南集中部石製品出土状態
(西より)



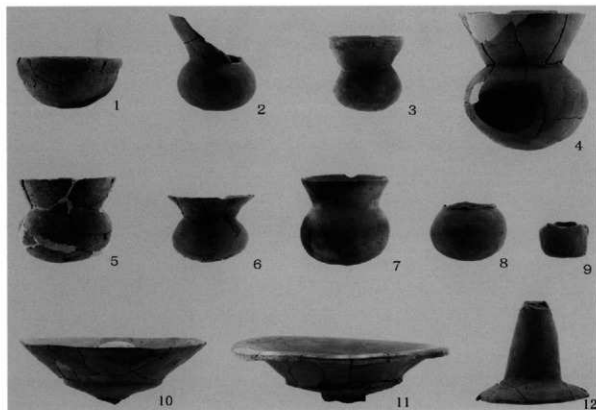
同南集中部木杭断面
(北東より)



観音塚遺跡・1号土坑全景 (南東より)

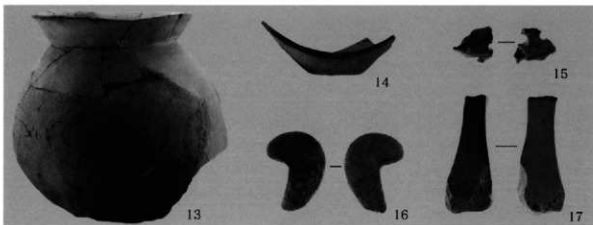


1号住居跡出土遺物 1~29

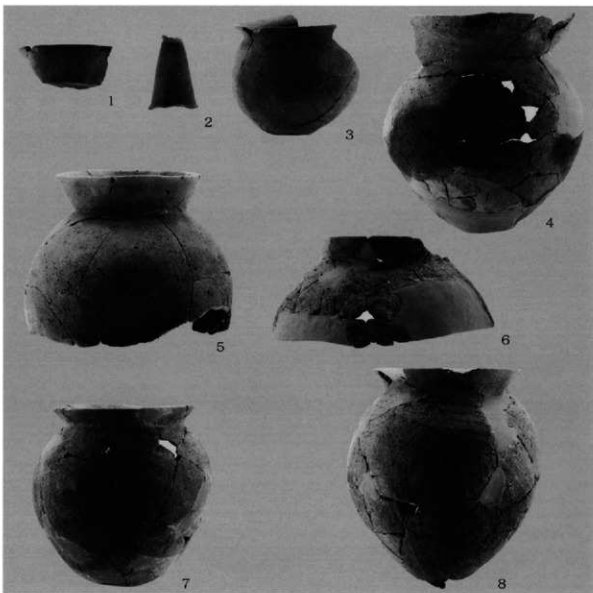


3号住居跡出土遺物 (I) 1~12

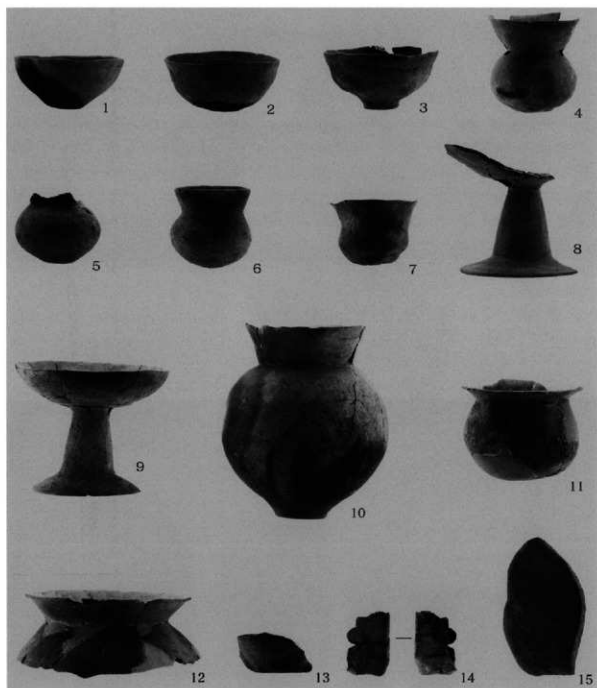
图版14



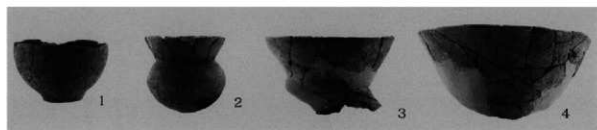
3号住居跡出土遺物(2) 13~17



4号住居跡出土遺物 1~8

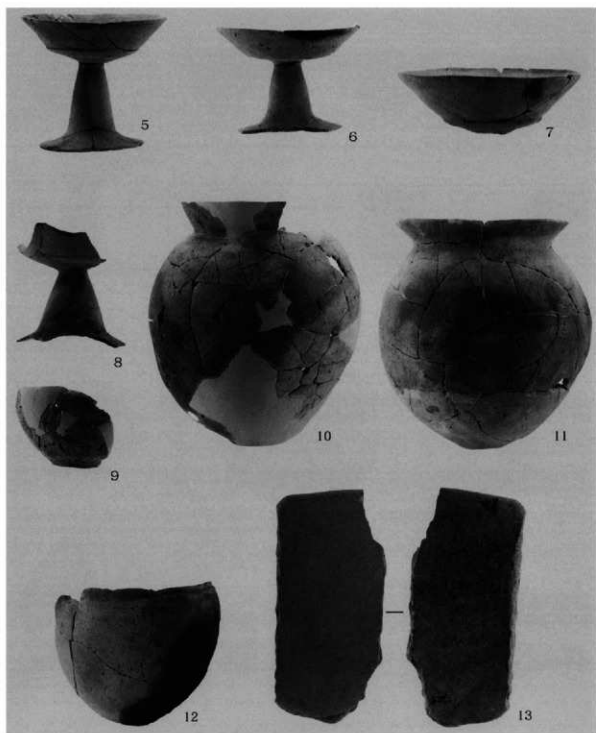


6号住居跡出土遺物 1~15



7号住居跡出土遺物(1) 1~4

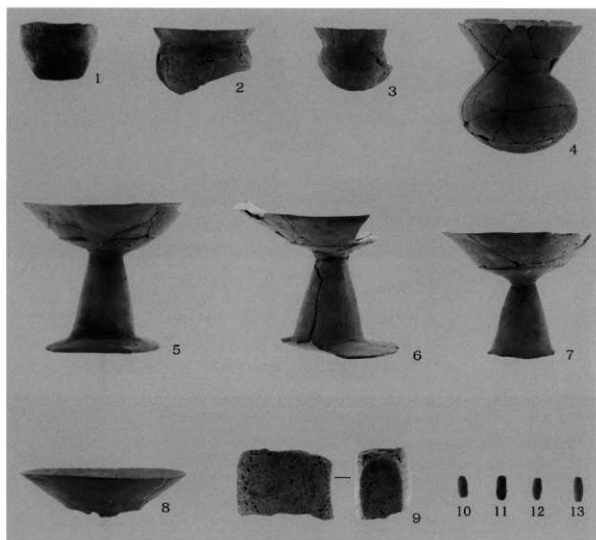
図版16



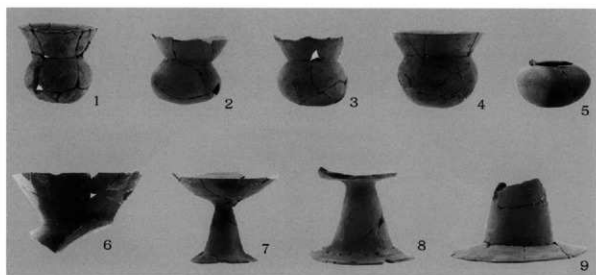
7号住居跡出土遺物(2) 5~13



8号住居跡出土遺物 1

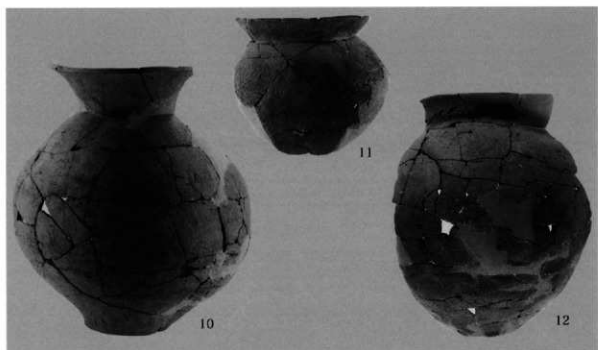


9号住居跡出土遺物 1~13

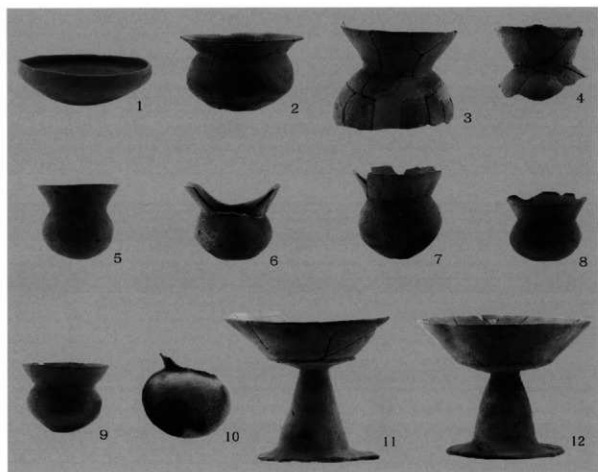


10号住居跡出土遺物 (I) 1~9

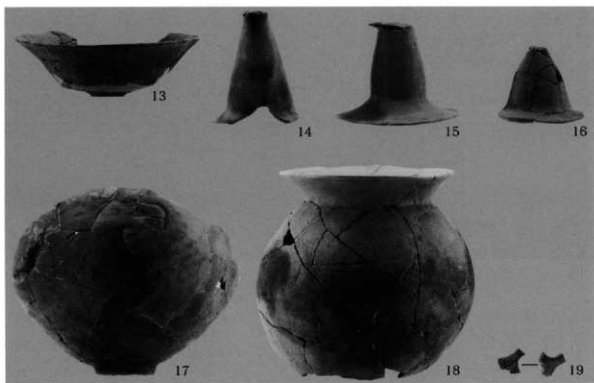
図版18



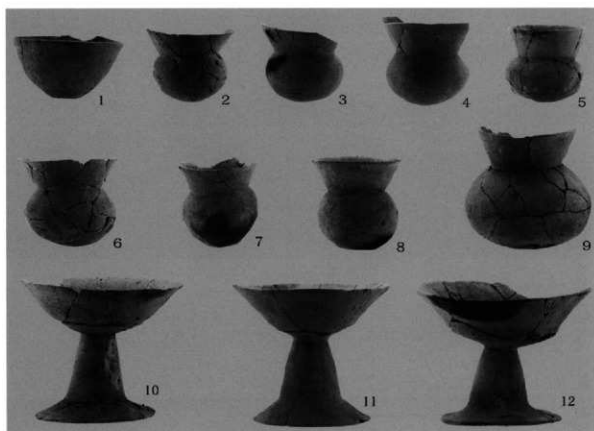
10号住居跡出土遺物(2) 10~12



11号住居跡出土遺物(1) 1~12

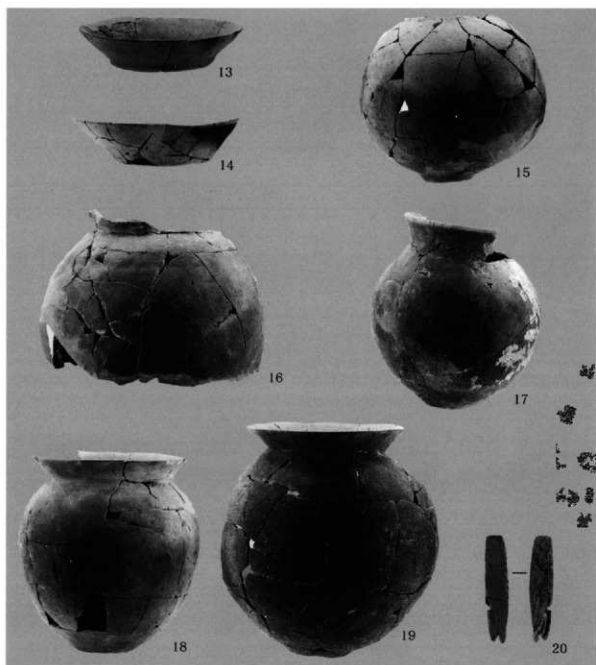


11号住居跡出土遺物(2) 13~19

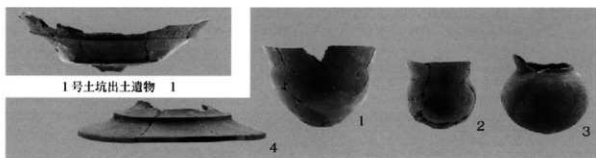


12号住居跡出土遺物(1) 1~12

図版20

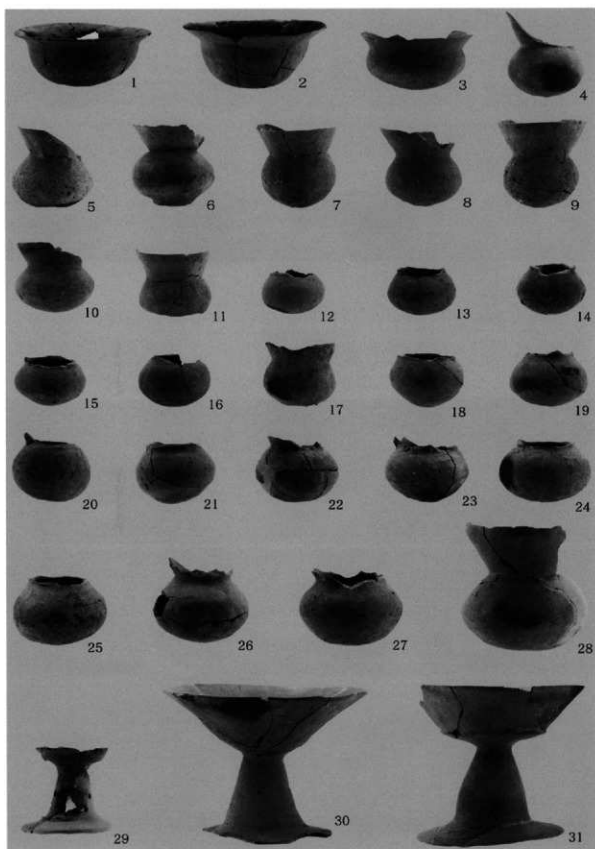


12号住居跡出土遺物(2) 13~20



1号土坑出土遺物 1

1号焼土跡出土遺物 1~4

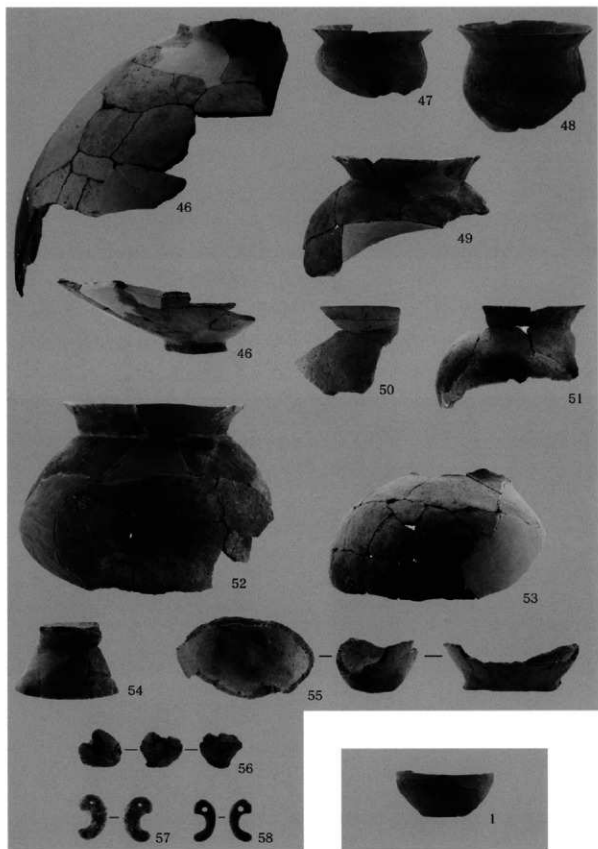


1号溝出土遺物(1) 1~31

图版22



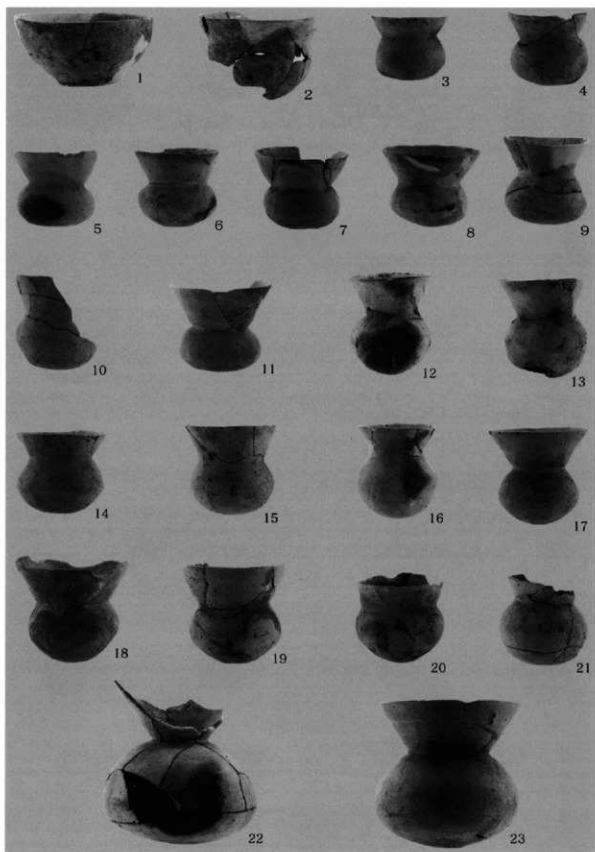
1号溝出土遺物(2) 32~45



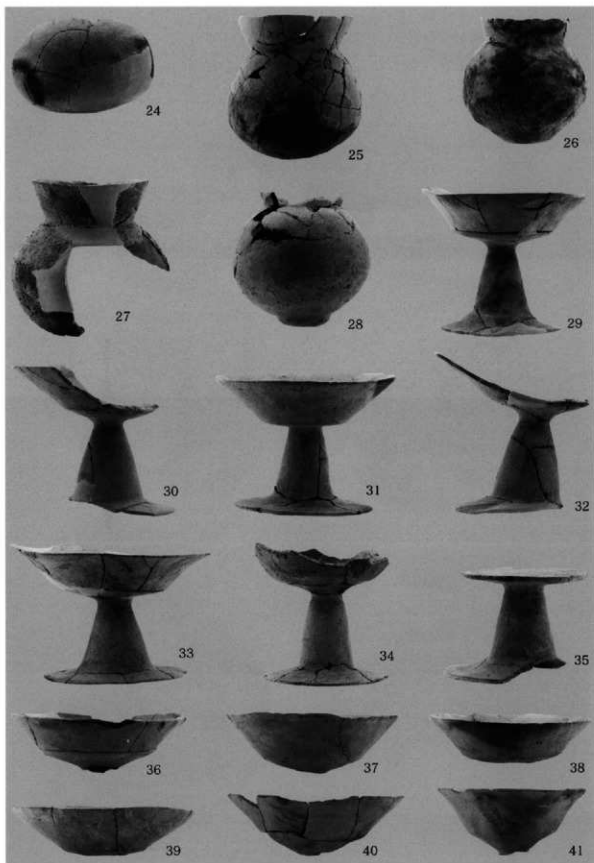
1号清出土遺物 (3) 46~58

2号清出土遺物 1

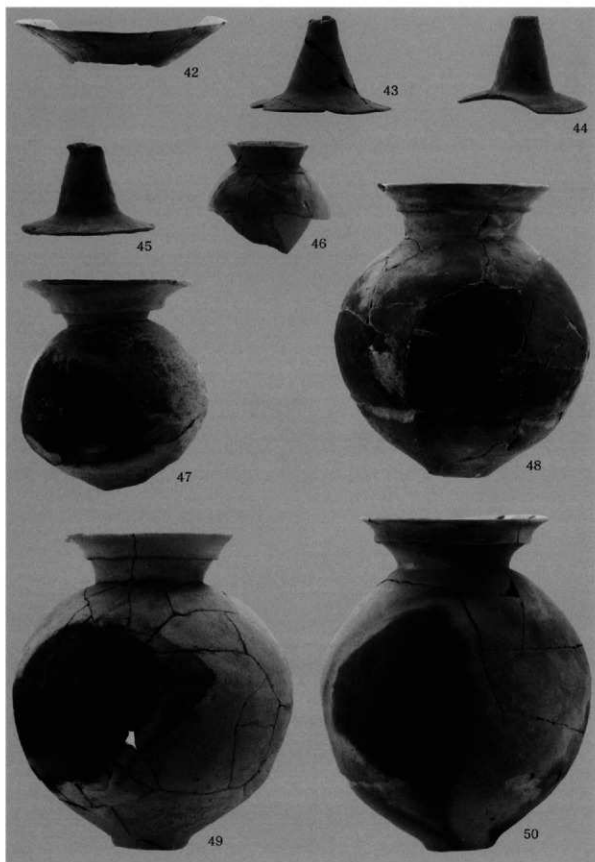
図版24



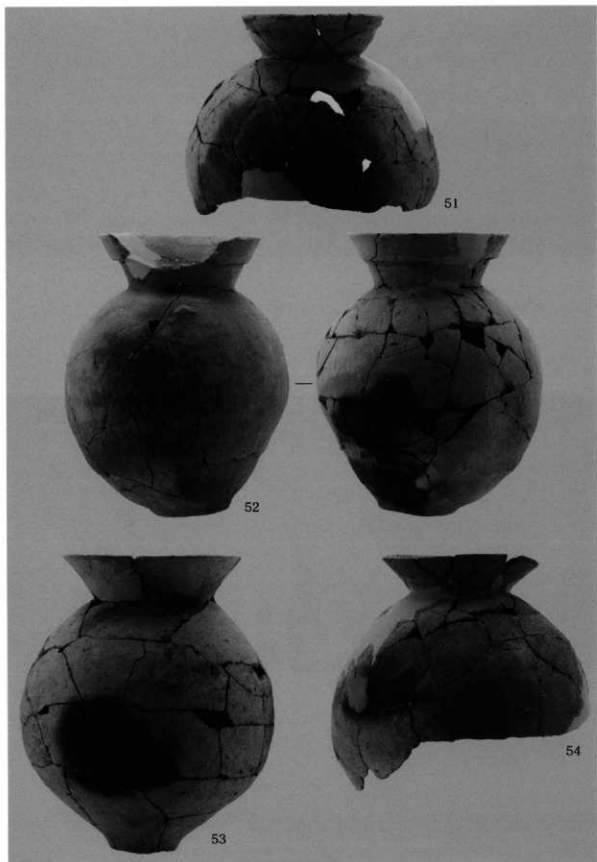
旧河道・北集中部出土遺物(1) 1~23



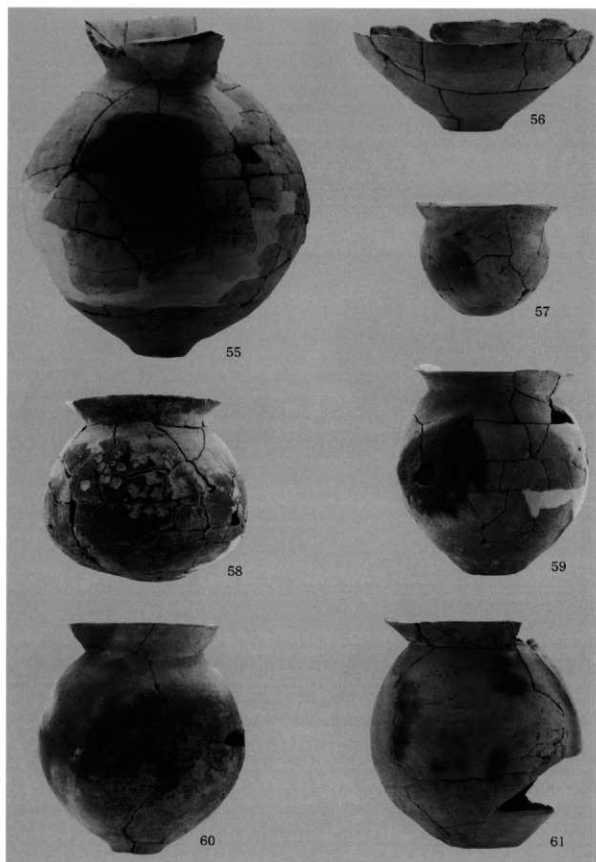
旧河道・北集中部出土遺物(2) 24~41



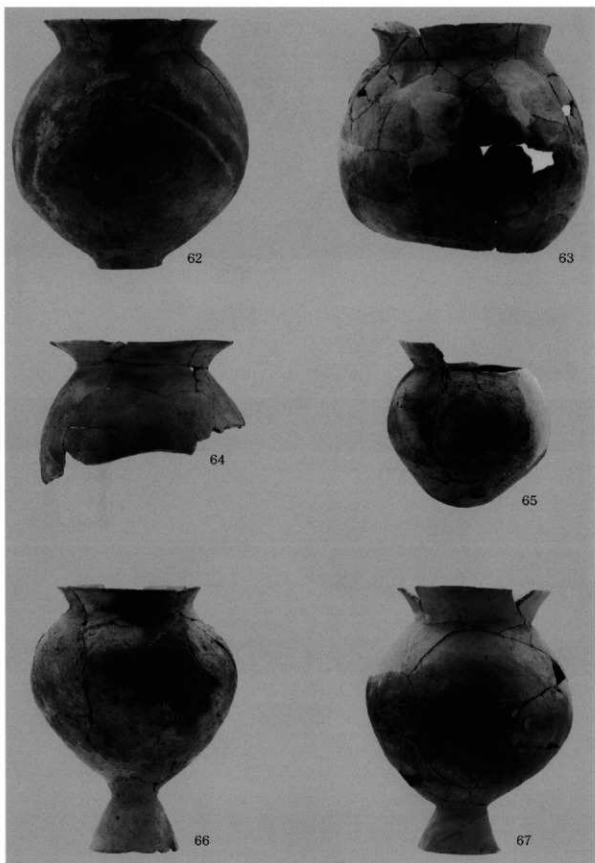
旧河道・北集中部出土遺物(3) 42~50



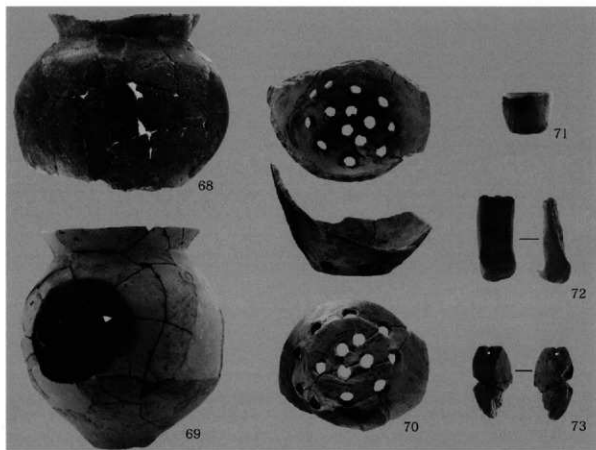
旧河道・北集中部出土遺物(4) 51~54



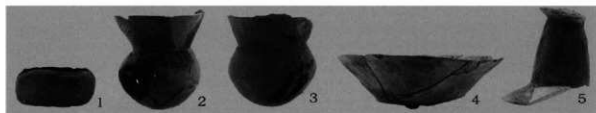
旧河道・北集中部出土遺物(5) 55~61



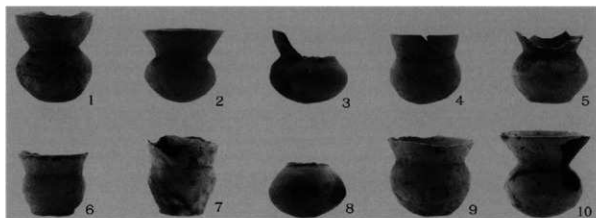
旧河道・北集中部出土遺物(6) 62~67



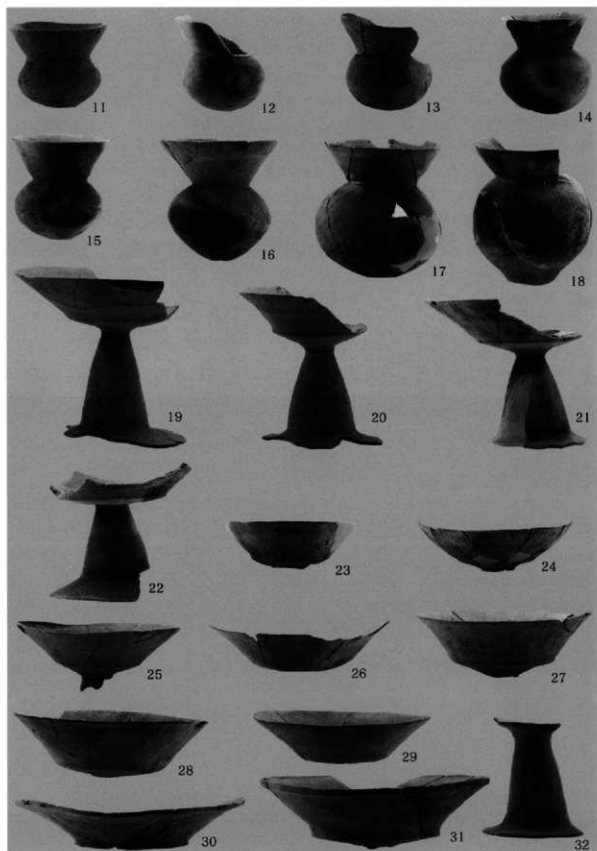
旧河道・北集中部出土遺物 (7) 68~73



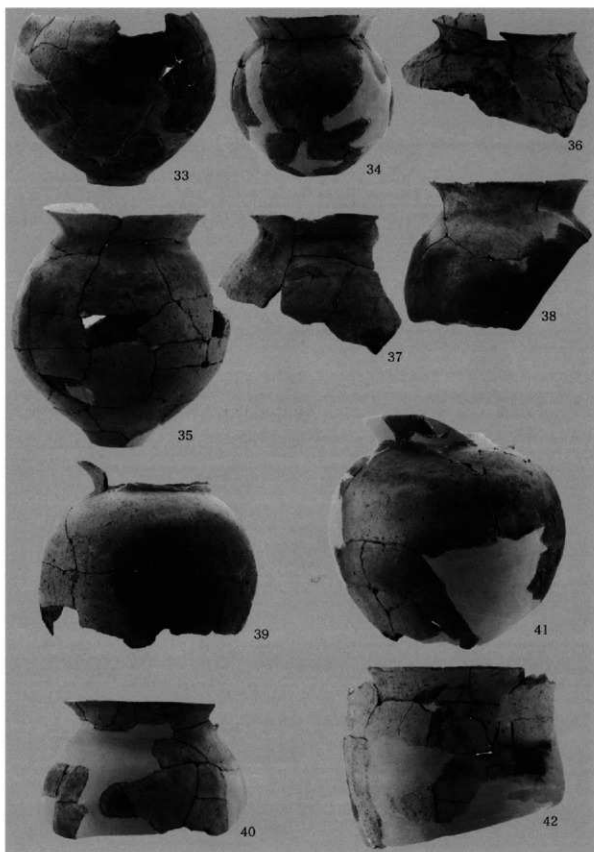
同中央出土遺物 1~5



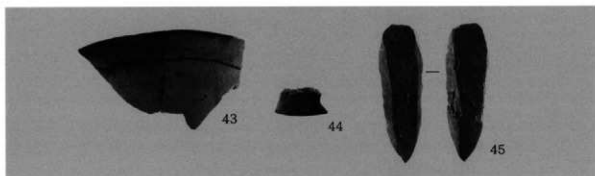
同南集中部出土遺物 (1) 1~10



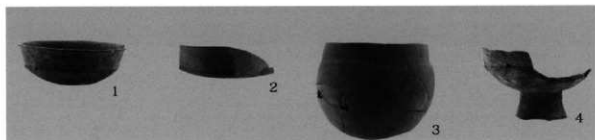
旧河道・南集中部出土遺物(2) 11~32



旧河道・南集中部出土遺物(3) 33~42



旧河道・南集中部出土遺物(4) 43~45



同中位砂礫層出土遺物 1~4



遺構外出土遺物 1~8

報告書抄録

ふりがな	くたんだ(さんじちょうさ)・かんのんづか(さんじちょうさ)								
書名	九反田(Ⅲ次調査)・観音塚(Ⅲ次調査)								
副書名	東西通り線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
巻次									
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告								
シリーズ番号	第28集								
編著者名	松本 完								
編集機関	本庄市教育委員会								
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 本庄市教育委員会 電話 0495-25-1186								
発行年月日	西暦 2004(平成16)年3月31日								
所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
		市町村	遺跡番号						*
九反田遺跡	埼玉県本庄市西富田562-576-1他	112119	173	36° 12' 32"	139° 10' 15"	2002.12.10) 2003.03.20	2,040	道路建設	
観音塚遺跡	埼玉県本庄市大字東富田44他	112119	074	36° 11' 46"	139° 10' 37"	2003.03.12) 2003.03.20	504	道路建設	
所取遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
九反田遺跡	集落	古墳時代中・後期		竪穴住居跡12、土坑1、焼土跡2、溝2、旧河道1土坑1		土師器、土製品、勾玉、石製模造品 磁石			
観音塚遺跡	集落	中・近世							

本庄市埋蔵文化財調査報告 第28集

九反田（Ⅲ次調査）・観音塚（Ⅲ次調査）

— 東西通り線施設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成16年3月25日 印刷

平成16年3月31日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

電話 0495-25-1186

印刷／朝日印刷工業株式会社

